休日、窓辺にて

草津出

時刻は十二時半を廻ったあたりだろうか。俺は早くも、今日という日が最悪の一日となるであろうことを予感していた。何故こうなってしまったのか。俺はぼんやりと頭の中の記憶を手繰り始める。

朝の寝覚めは最高だった。いや、朝というと少し語弊があるかもしれない。実際は今にも午後に切り替わろうという時間だった。寝覚めが良いのも当然だろう、睡眠にほぼ半日という時を費やしていたのだから。断わっておくが、別に毎日こんなふうに惰眠を貪っているわけではない。むしろ十分な睡眠時間を確保できることのほうが珍しかった。講義のない時間帯を埋めるように、バイトを隙間なく敷き詰めていたからだ。俺にとって、ただひたすらルーティンワークに勤しむのが一番、なにも考えずに済んで気が楽だったのだ。

まあそれ自体が惰性でしかないのかもしれないが、とにかく、俺はそんな掛け替えのない退屈な日々をただ淡々と費やしていった。バイトで日銭を稼ぎ、大学の講義で舟を漕ぎ、一日を終える。

だが、時には息抜きというものが必要なこともある。そこで、俺はひと月の間に数日だけ、大学の講義もバイトもなく、時間をすべて自由に使える日を用意していた。俺は、密かにそれを休日と呼んでいた。

休日があると、俺は決まって前日に一日の計画を立てる。パチ屋で有り金をはたくか、それとも朝から晩まで飲み明かすか。あるいは一日中寝続けるなんてのも良いかもしれない。いずれにしろそこに未来というものは存在していなかった。趣味もなければ、特技もない。夢もなければ、希望もない。典型的な自己を見失った人間の、退廃した現在だけがそこにあった。

ただ、それは退廃的であるのと同時に、享楽的でもあった。

ひたすら将来に目を瞑り、目の前の快楽だけを求め続ける。それは俺の心に小さな靄を残していったが、それ以上に大きな至福をもたらしていた。いまさら生活を改めようという気は毛頭なかった。それだけこの生活が、肌に染み付いてしまっていたのだ。

俺は正午ちょうどに綿の潰れた布団から這い出て、それを畳まず押し入れにぶち込んだ。この後の予定もすべて決めてあった。今日はなんとなく金をまき散らしたい気分だった。放り投げてあったシャツとジーンズに体を通し、おもむろに洗面所へと向かう。目の前に現れた鏡には、冴えない男のだらしない顔が映っていた。

適当に洗顔を終えたところで、俺は玄関のチャイムが鳴るのに気付いた。誰だこんな真っ昼間から。この前追い返したN〇Kの連中だろうか？　まったく、奴らもしつこいもんだ。そう思いつつ、俺は扉を開けた。

思えばこれが、悪夢の始まりだった。

俺は窓の縁に肘を突きながら、溜息を漏らした。これでは計画が全部パーである。姉貴はいつも俺のところに厄介事を持ち込んでくる。まるで俺を、都合の良い道具としか見ていないかのように。それは姉貴と一緒に暮らしていた昔も、別々に暮らす今も、ずっと変わらないことだった。

俺は部屋の真ん中にちょこんと佇むそれを見遣った。

視線に気づいたのだろう、それも上目遣いで俺を見上げてくる。だが、警戒

した目つきのまま、まったく口を開こうとしない。ただ、さっきまで背負っていたリュックサックを強く抱きしめているだけだった。

それ――その少女の名は、カナといった。

姉貴の一人娘で、俺からすると姪にあたる。話したことなど殆どなかったが、会ったことだけは何度かあった。最後に会ってから既に一年以上の歳月が過ぎていたものの、俺は玄関を開けてすぐその少女がカナだと分かった。その姿から、幽かに姉貴の面影が見て取れたからだった。

しかし、なぜその姪が俺の部屋にいるのだろうか。カナがこの場所を訪ねてきたのは、恐らくは姉貴に指示されてのことなのだろう。少なくともこの少女が自らここに来たというのはあり得ない。それはこの不愛想な態度で一目瞭然だった。だが、その一方で俺には姉貴の意図がまったく理解できなかった。姉貴はどうして俺になんの断りもなく、自分の娘をここに来させたのか。娘を預けるだけなら、他にもっと方法があったはずなのに。なにかを知っているとしたら、それは目の前にいるカナだけだった。

「お前、一人で来たのか？」

しかし少女は、口を開くどころかこちらに見向きもしなかった。たちまち室内に小さな沈黙が舞い降りる。

「おいお前、なんか口利いたらどうなんだ？」

俺は堪らず声を荒げた。するとカナは、小さな声で呟く。

「ママがしらないひとと話しちゃいけないっていってた」

「……そうかい」

俺もできればお知り合いになんぞなりたくなかったがね。

俺はとうとう面倒くさくなって、カナから背を向けた。窓を勢いよく開け放つ。心地良い風が室内に流れ込んでくる。風を両肩で受け止めながら、俺はポケットから煙草を一本取り出し、口に咥えた。

赤くなった煙草の先端から、煙が立ち上った。この煙を眺める瞬間がいちばん落ち着く。世界三大娯楽をなにか上げるとするなら、俺は酒、煙草、ギャンブル、この三つを推すね。もしくはギャンブルのところを女に変えてもいい。

そんな下らないことを考えながら、俺はちらりと横目で部屋に佇む少女を見た。紫煙の向こう側から覗く少女の顔は、少しだけ曇ったように見えた。

そのうち、少女はこう言った。

「コタロー」

「なんだ」

「くさい」

どうして俺は、自分の部屋で、他人に指図を受けなくてはならないのだろうか？　だいたいコタローって、呼び捨てか。もう本当、嫌になるね。バイト先で見下され、おまけにこんなガキにまで見下され。もしかしたらこの瞬間、世界でいちばん底辺にいるのは、俺なんじゃなかろうか。

俺は煙草とは反対のポケットから、財布を取り出した。そしてそこから、野口を一枚だけ抜き取る。

「おい、お前」

「なに」

「千円やるから、帰れ」
しかしカナは、まるでそれに関心がないかのように、無言のままそっぽを向いた。こんなはしたカネじゃ、涙も拭けないとでも言いたいのだろうか。まったく、最近のガキときたら。当時の俺ならば、すぐさま回れ右をしていただろうに。
「ちっ」
俺はわざとでかい舌打ちをして、野口を裸のまま懐に戻した。
「勝手にしろ」
このガキとは絶対に仲良くなれないね。賭けてもいい。
俺はカナの言い分をまるっきり無視して、咥えていた煙草を、たっぷり根元まで吸い込んだのだった。
カナと最初に会ったのは、去年の正月のことだ。もしかしたらそれ以前にもどこかで会っていたのかもしれないが、少なくとも俺の中にあるカナのいちばん小さな姿は、このときのそれだった。
俺がカナを見て最初に感じたのは、懐かしさ、だった。幼いころの姉貴みたいな顔した奴が、親戚たちの合間を縫うようにして歩いている。ただしその足取りは、記憶にある姉貴のそれよりも少しばかり、危なげだった。俺はビール缶を傾けながら、その様子を眺めていた。その光景にしばらく目を離せなかったのは、俺が他人の温もりを、久しく忘れていたからであろうか。
その晩、部屋に独り戻ってきたとき、俺は自分自身にこう問いかけた。ヤニで黄ばんだ六畳一間に、お前は何を望むのだ、と。
カナはパンパンに膨れ上がっているリュックサックから玩具を幾つか取り出して、一人で遊んでいた。どうしてそんなものをわざわざ持ってきたのかとも思ったが、俺も旅行先に玩具を持っていくタイプのガキだったので、滅多なことは言えなかった。
ちなみに玩具とは、例の青ダヌキの縫いグルミだった。それを見て、俺は一抹の懐かしさを感じた。あの作品は不朽の名作だ。斯く言う俺も昔は好きだった。しかし、そういう名作になる確率は、全体のたった一パーセントにも満たないのだろうな、と俺は思った。
そういえば、実家から引き揚げてきたとき、一緒に持って来たものが幾つかあったのを思い出す。その中にたぶんあったはずだ、幼い自分をすべて否定してしまうようで、捨てるに捨てられなかったマンガの群れが。俺は朧げな記憶を頼りに、押し入れの中を探っていった。マンガの群れはすぐに見つかった。それらはうねる布団の草原の隅で、うずくまるように存在していた。俺はそれらを乱暴に引っ張り出し、机の上に広げる。
それに気づいたのか、カナがこちらを覗き込んできた。
「こんなに俺に近づいて、臭いんじゃなかったのか？」
「もうくさくないもん」
「あっそ」
「これは？」
「これか？」
実家から引き取ったマンガたちは皆、長い年月を経て、すっかり色褪せてし

まっていた。
「これは、俺の青春だよ」
「どういうこと？」
「さあ、もう、忘れちまった」
そう、もう忘れた。マンガの表紙が色褪せてしまったように、俺の記憶の片隅にある青春という文字は、ほとんど消えかかってしまっていた。
「へー」
カナは俺の言葉を聞きつつも、視線だけはマンガにばかり注がれていた。マンガのほうに興味が奪われて仕方がないという感じだった。俺は苦笑して、その中の一冊を、カナに手渡す。
「読むか？」
「うん」
カナは目を輝かせながら頷いた。今日一日で、初めてカナの明るい表情を見た気がした。
自慢ではないが、俺は昔から勉強もスポーツも、どちらも人並みだった。別にそのことに対して引け目を感じていたわけではないし、優越感に浸っていたわけでもない。ただ、ありのままの自分であるということを良しとしていただけだった。それなのに、姉貴はいつも俺の一つ上を行っていた。俺はそれが堪らなく嫌だった。特に、比較されるのが嫌だった。俺は、なんでもそつなくこなしてみせる姉貴に、漠然としたコンプレックスを抱いていたのだ。
「なんでコタローは、ひとりで暮らしてるの？」
寝そべってマンガを読んでいたカナが、突然俺にそう問いかけてきた。それは、あまりにも俺に対して不意打ちの問いかけだった。突然だったのもそうだが、カナが自分のほうから口を開くとは思ってもいなかったからだ。
「さあな、気付いた時にはこうだった」
俺は深く考えることもできずにそう答えた。しかしそれは、今の俺に対する真理であるようにも思われた。この生活には意味なんてないのだ。結婚して暖かい家庭を築いた姉貴と、隙間風の吹く室内で独り暖をとる俺との違いは、きっとそこにある。
「じゃあなんでお前は、家族と暮らしてるんだ？」
「んー、わかんない」
俺はたぶん、あちら側が羨ましかったのだ。俺が最初、カナのことを邪険に扱っていたのは、きっと彼女に嫉妬していたからなのだ。
「人生とは底の見えない井戸を覗き見るようなもの」
とある言葉が、急に口を衝いて出た。
「なあに、それ」
「さあな、俺が知りたいくらいだ」
俺はその言葉の本当の意味を、まだ知らなかった。いや、ただ知ろうとしていなかっただけなのかもしれない。いつもなんでも知っているふうに振る舞う姉貴に、その言葉に、まだケツの青かった俺は反感を覚えていたのだ。
「知りたきゃお前のママに聞け」
「ふうん」

カナはそれ以上のことを聞いてこなかった。ただ、なにも分かっていないかのように小首をかしげているだけだった。俺にはそれが、ある意味で、救いのように思えたのだった。

以前、俺には叶えたい夢があった。文字通り夢のような、馬鹿げた空想だ。それでも俺は真剣だったし、それなりの努力もしていたつもりだ。しかし、それが必ず現実のものとなる保証だなんて、どこにもない。ＳＦ小説で描かれた未来予想図が、そのまま現実のものとなるとは限らないのと同じだ。俺がそれを知ったとき、現実は悪夢となって俺に襲いかかった。夢を追うことがアイデンティティのすべてだった俺に、その現実はあまりにも重かった。逃げ出した。なにもかもをかなぐり捨てて。目の前に姉貴が立っていた。姉貴は俺にこう言った。

「コタロー」

気付けばカナが、横から俺を覗き込んでいた。ほんの一瞬だけ、カナの姿に姉貴が重なって見えた。

「コタローは、いま、楽しい？」

カナが俺に問いかける。少しばかり藪から棒な問いかけではあったが、それは俺の中に、不思議と浸透していった。

「ひとりで暮らしてて、さみしくない？」

それで俺は分かってしまった。この少女は、俺を慰めようとしているのだということに。

「寂しくねえよ」

俺はカナに向かってそう言った。だけどそれが、俺の耳に強がりのように響いたのは、いったいどうしてだったのだろう？　俺の中にある、砂の城が崩れ落ちていく音を聞いた気がした。

「また、遊びに来てあげるよ。だから、泣かないで？」

その言葉で、俺は自分の頬に涙が伝っていることに気付いた。別に悲しいわけじゃない。別に泣きたいわけじゃない。けれど、俺はその涙をとどめる術を知らなかった。涙で滲む世界の向こう側で、少女から目を逸らす術を知らなかった。

「よしよし」

小さな手のひらが、俺の頭に触れる。それは、俺よりもずっと小さな手のはずなのに、昔感じた姉貴の手のひらの温もりのように、大きく温かかった。

俺はその手のひらの感触を、ずっと感じていた。

俺はもしかしたら、姉貴と自分との違いを勝手に悲観して、勝手に殻に閉じこもっていただけなのかもしれない。俺が夢に挫折したあの日、俺は自分の咎を姉貴の姿に擦り付けて、自分自身を偽っていた。姉貴はそんな俺の姿を、何も言わずに見つめていた。その時、姉貴は何を思っていたのだろうか。俺の網膜には、姉貴の影がずっとこびりついていた。

姉貴が俺の部屋を訪ねてきたのは、もうすでに時計の短針が半分を廻ったころだった。いきなり訪ねてきたかと思えば、無遠慮に部屋の真ん中で胡坐をかくあたり、姉貴も変わらないなと俺は思った。

「悪かったわね、預かってもらって。急に仕事が入っちゃったもんだから」

「ほとんど押しつけだったくせになに言ってんだよ。ここは保育園じゃねえんだぞ」
「このまま保育士にでもなったら？」
「バカ言え」
「ビールもらっていい？」
「駄目だ」
俺の最後の言葉を無視して、姉貴は勝手に冷蔵庫から缶を取り出す。炭酸の吹き出す音が、室内に響いた。
「良い子でしょ、カナ」
姉貴はカナのほうに視線を遣った。カナはまた俺のマンガを手に床に寝そべっていた。
「姉貴のくせに、えらく買い被るのな」
「だって、私にとって特別な存在だもの」
「だから飴玉でもやるってか？」
「茶化さないで」
「はいはい」
かつて俺の前に大きな壁として立ちはだかった姉貴は、今ではもうすっかり母親の様相を呈していた。俺にはそれが頼もしいようにも思えたし、少し名残惜しいようにも思えた。
「なあ、ひとつ教えてくれないか？」
「私に答えられることなら、なんでも」
――人生とは底の見えない井戸を覗き見るようなもの。
結局、この言葉の本当の意味は何だったのか？　それが俺の心に魚の小骨のように引っかかっていたのだ。問いかけると、姉貴は笑ってこう言った。
「つまり、もっと目を凝らせってこと」
それ以上は何も言わなかった。俺も聞き返したりはしなかった。姉貴は時の流れを飲み干すように、刻々と喉を鳴らしていた。
やがて缶の中身が空になると、姉貴は立ち上がった。
「それじゃあ、そろそろ御暇しますか」
姉貴の声に反応して、カナがこちらにトコトコやってくる。
「さ、コタローに挨拶しなさい」
「じゃあね！　コタロー」
俺はカナの頭に手をポンと乗せた。カナがくすぐったそうに目を細める。
「また来いよ」
「うん！」
「姉貴」
「なに？」
「俺、もっかいだけ、マンガ家目指してみようかな」
「勝手にすれば？」
あまりにもそっけない返事。だけど俺は、それが姉貴なりの後押しだということを知っている。
「じゃあね」

「ああ」

扉の閉まる音がする。その途端、先ほどまでの人の気配が嘘のように、室内が静まり返った。しかしそれは、昨日までの沈黙のような、憂鬱なものでは決してなかったように俺は思う。

窓を勢いよく開け放つ。心地良い風が室内に流れ込んでくる。風を両肩で受け止めながら、俺はポケットからクシャクシャになった千円札を引っ張り出した。

「もしかしたら俺って、あんましギャンブル強くないのかもな」

千円札で紙飛行機を折り、それを空に向かって飛ばす。紙飛行機は風を孕み、心許ないながらも、彼方へと飛んでいった。

俺はそれを見えなくなるまで見届けてから、そこを離れた。

洗面所の一枚鏡が俺の視界に入った。鏡に映る男の顔は、昼間のそれよりも少しだけ、マシになっている気がした。

夢追い人、夏影を踏む

草津出

「じゃあ頼むわよ、カナのこと」
「ああ」
とある夏の日のこと。
太陽にうだつの上がらない空が、燦々と地上に光を降らせている。そして蜃気楼に歪む大気が夏の暑さを、どんよりとその場に停滞させていた。
「それにしてもさ、こうも簡単に、弟に愛娘を預けるのってどうなんだよ？」
俺は暑さのせいですっかり錆び付いてしまった首をやっとのことで回して、ソファの上で寝息を立てている我が姪――カナを見やった。
「いいじゃない。あんたに懐いてんだから」
確か今は四年生くらいだっただろうか。左右に束ねられた髪と小さな唇にあどけなさが残っている。どうやら背伸びしたいお年頃らしく、最近はませた行動が目立ってきた。しかしこうやって無邪気に眠る姿を見てしまうと、俺にはカナがまだ子供のように思えてしまう。
「だからさ、自分より弟に懐いてる娘ってどうなの。母親的にさ」
「楽でいいわね」
「……あっそ」
俺はさも興味がないかのように吐き捨てた。こんなふうに無駄な反抗を重ねてしまうあたり、どうも俺も大人になり切れていないのかもしれなかった。
ポケットから煙草の箱を取り出す。まだ火も付けていないのに、なんだかシけた臭いが漂ってくる。俺はその中から一本だけ取りだそうとして――そのまま箱ごと盗られた。見上げると姉貴が、いたずらな笑みを浮かべている。俺は大仰に肩をすくめた。
「ところでさ、あんた、最近どうなの？」
俺はその言葉を聞いて、乾いた笑いを漏らした。
「ん、まあ、現状維持ってところかな」
「もう諦めちゃえば？」
「冗談じゃない」
いつものやり取りを姉貴と交わしつつ、俺はカナのほっぺたをぷにぷにと小突いた。きめ細やかな白い肌は、絹のように柔らかくて気持ちいい。俺のざらざらした肌とは大違いだった。
「じゃあ夜には帰ってくるから、それまでお願い」
「うっす」
姉貴に適当な言葉を返し、その背中を見送る。姉貴の後ろ姿は、やがて玄関に吸い込まれて跡形もなく消えた。
バタン、と音がする。
姉貴が家を出た途端、妙な沈黙がリビングのなかに降り立った。俺はなんとなく息苦しさを感じ、立ち上がって窓を開けた。だけど夏の淀んだ空気が邪魔をして、ちっとも気分は良くならない。至福を求めてポケットの中をまさぐってみたりするも、そこあったのは煙草一本にも満たない、空虚な手触りだけだった。
そうして俺は溜め息を吐く。
姉夫婦の家でこんなふうに怠惰をむさぼっている自分に少し嫌気がさした。

俺は将来、どうなるのだろうだなんて。
そんな漠然とした不安に苛まれながら、窓の外を眺めた。
遠くの方に、家族連れの姿が見える。その中の子供が色鮮やかな浴衣を身にまとって嬉しそうにはしゃいでいた。
それを見て、俺は「そう言えば、いま神社のほうで祭りやってんだっけ……」なんてことを思い出す。
その子供は親と手を繋ぎながら、浴衣以上に晴れやかな笑顔を貼りつけていた。今時、両親が共働きの家庭なんか少なくないのかも知れないけれど。こういうふうに他の親子の姿を見てしまうと、カナのことが少しだけ不憫に思えてしまう。だから俺はこうやって何度も子守を引き受けているのかもしれないなんて、朧げながら考えた。
「……ん……うぅ」
家族が見えなくなった後も外の景色を眺め続けていると、背中から声が聞こえた。どうやらカナが目を覚ましたらしかった。俺は振り返ってソファに目をやった。
「おーい、起きたかー？」
するとカナはむくっと起き上がった。どうやら寝起きはあまり良くないらしい。眠たさと夏の気怠さとが一緒くたになったような顔をして、暫くごしごしと目を擦っている。しかし、
「……こ、コタローー!?」
俺の姿を認めるや否や、音が聞こえそうなくらいバチッと目を見開いた。
「おう、邪魔してんぞ」
そして俺が返事をすると、カナは急にアタフタとうろたえ始める。かと思えば、
「なんでここにいるのっ!?」
急に俺に向かって叫び散らした。この家は俺の住んでるオンボロアパートの一室より格段に広いはずだが、それでもカナのかん高い声は家じゅうに響き渡っていった。
どこかで風鈴がちりん、と鳴る。
「なんでって、別に珍しいことじゃないだろ」
俺は眉間に指を当てながら言った。
俺がこの家に遊びに来ることは、決して少ないことではなかった。
そりゃまあ姉貴の旦那さんがいるのなら、一家団欒を壊しかねないため流石に遠慮はする。しかしこうやって運悪く姉貴と旦那さんの仕事が重なったときには、よく俺が駆り出されるのだ。この習慣がいつ始まったのかは分からない。けど、いつの間にか始まって、いつの間にかこれが見慣れた光景になっている。このことだけは、どうやら確かなことらしかった。
「来るときは教えてって、ママに言っておいたのに……」
羽音のような小さな声で、カナがぼそりと呟いた。表情には幽かな不服が滲んでいる。俺はカナのこの表情を見るたびに、なんとなくぼんやりとした気分になった。
「仕方ねえんじゃねえか？　おまえ、寝てたんだし」

しかし俺は敢えて、どうでも良いというふうを装って言った。だがそれを聞いたカナは、より一層顔をしかめる。
「もしかして、カナの寝顔見た……？」
俺の曖昧な気分とは裏腹に、カナの不機嫌の理由はひどく単純明快なものだった。俺は自分がバカバカしくなって、思わず苦笑する。
そしてカナの不安に歪んだ表情を見て、ついつい、悪戯心が芽生えてきてしまう。
「ああ、よだれ垂らしてたな」
俺の言葉を聞いて反射的に口のまわりを拭うカナ。その必死な形相に、俺は思わず吹き出してしまった。
「冗談だって」
コイツはからかうとすぐ表情に出るから面白い。本当は暑くて何もやる気が起きないはずなのに、何故かカナをからかおうという気にだけはなるのが、なんとも不思議な話だった。
「むうぅ」
カナは思いっきり不満そうに唇を尖らせた。そして勢いよくソファを飛び降りる。
「コタローのバカッ！」
俺に精一杯の罵倒を浴びせると、そのままの勢いで自分の部屋に入っていった。ドアに掛けられた『かなのへや』と書かれたプレートがカタンと揺れる。
俺はやれやれと呟いて、先ほどまでカナが寝ていたソファに腰をかける。そこにはまだ、カナのぬくもりが残っていた。それを感じながら、俺は軽いタイムトリップのような気分を味わう。少し前まで掴んだら消えてしまいそうなくらいに幼かったはずなのに。なんだか嬉しいような、それでいて、少しだけ悲しいような。
しばらくすると、カナがまたリビングに戻ってきた。
どうやら部屋で着替えてきたらしい。ラフな部屋着から、フリルの可愛らしい水色の服に変化していた。カナはゆっくり近付いてきて、俺の横にちょこんと座った。俺は横目に写る細い肩を眺めながら、カナの小ささを改めて感じる。
「ねえ」
ふと、カナが俺に話しかけてきた。
「なに？」
「ママは？」
「急に仕事が入ったんだと。さっき急いで出て行ったよ」
「ふーん」
そして不自然に俺から目をそらした。
「コタローは？」
「俺は今日シフト入ってねえから」
「ヒマなんだね、フリーターって」
「……うるせ。夢追い人と呼べ、夢追い人と」
「それで、将来は漫画家に？」
「ああ、そうさ」

「コタローが羨ましいよ」
カナは遠くに向かって呟いた。だけどそれは別にイヤミというわけではなく、ただ単に淋しさを紛らわせようとしているだけなのだと、俺にはなんとなく分かった。
開け放たれた窓の向こうからお囃子が聞こえてくる。この家の近辺があまりにも静まり返っているためか、音はクリアに耳に届く。
「なあ」
俺はそれきり黙ってしまっていたカナに話しかけた。
「ふたりで祭りに行かねえか？」
「え？」
カナは目を丸くして俺を見つめた。そして、
「いいの？」
恐る恐る尋ねてきた。
「なんで」
「だってコタロー面倒くさがりだもん」
失礼なやつ。
「別にこの家にいても暇なだけだしな」
俺は祭りなんてどうってことないというふうに、うそぶいた。
「行きたいか？」
「――行く！」
カナは勢いよく返事をすると、ソファから降りてタタタと走っていった。
「……やかましいやつだな」
けど、そういうところが可愛いと思わなくもない。
「よっこらせ」
俺は気の抜けた爺さんのような気ぬるい動きで腰を上げる。
「はやくはやく！」
「へいへい」
そしてカナに急かされた俺は、ゆっくりと玄関へと向かった。

神社に着くと、そこは予想以上に混雑していた。人の流れで出来た川が、次から次へと熱気を運んでくる。だけどお天道様の角度を見るかぎり、暑さのピークはまだまた先という感じだ。
俺はめまいがして、その場にしゃがみ込んだ。
「……帰ろう」
「ええぇ！？　なんで！？」
カナは抗議するような目で俺を見る。
「人が多すぎて、気持ち悪い」
「夢追い人のくせに！」
「夢追い人は夢追い人でも、俺はデスクワークに夢を感じるタイプなんだ」
「意味分かんない」
ごもっとも。
するとカナは人ごみのあいだを縫って進んでいった。

「コタローも！　そんなとこでしゃがんでないで、早く来なよ！」
「おぅい、待てよぅ」
俺はカナを呼び止めようとするも、カナはさらに人の波をかき分けていく。どんどん小さくなるカナをなんとか見失わないようにしながら、俺はため息を吐いた。
そして、しみじみと呟く。
「遠いなぁ、夢」
そして俺も、夢まで延々と続く道をかき分けていった。
それにしても、人が多ければ多いほど屋台もまた多くなるわけで。道の両脇には屋台の列が、気の遠くなるほど隙間なく連なっていた。それはもう、一番端から押せばドミノみたいに倒れていきそうなくらいに。
カナはそのいくつもの店に目移りしながら、そして時々立ち止まったりしながら、どんどん進んでいく。そして俺は、それを付かず離れず一定の距離を保ちながら追いかけていった。
と――。ある屋台の前で、急にカナが立ち止まった。
その間に俺はカナに追いつく。
何か珍しいものでも見つけたのだろうか。俺はカナの見つめる先に目をやった。だがそこには、別になんの変哲もない、ただのリンゴ飴を売る店があるだけだった。
こんなモンを欲しがるとはカナもやっぱり子供だな、なんて少し思った。だけど俺はやがてカナが本当に見ているものは違うものだということに気づく。
俺はカナに近付くと、頭にぽん、と手を置いた。
「欲しいのか？」
カナは無言で頷く。
「分かった」
そして俺は屋台に近付いて、
「すみません、リンゴ飴ひとつ――」
しかし、少し考え直してから、
「――いや、ふたつください」
そう言った。
カナに勝手に走って行かないように諭してから、俺たちはふたりで並んで歩いた。それぞれの手には、リンゴ飴が握られていた。
カナはあのとき、親子を見ていた。
リンゴ飴を美味しそうに頬張る子供と、それを微笑ましげに見つめる親の姿を。
――別に同情するつもりはなかった。片親だったせいで、俺もほとんど親にかまってもらえなかったから。でも俺の場合は、いつも姉貴がいてくれた。だから。
周りから見て、俺たちはどう映っているんだろうか。たとえひと時だけでも、ちゃんとコイツの親のように振る舞えているだろうか。そんな思いを巡らせながら、俺は、細く永い石畳の上を歩いていく。
「さっきのリンゴ飴の人、すごく失礼だよ！　コタローのことカナのパパだと思って！」

カナはなぜかぷりぷりと怒っていた。だけどリンゴ飴だけはちゃっかりと頬張る。
「じゃあ、どう思われたら良かったんだよ？」
俺はとりあえずそう尋ねる。しかし、
「知らない」
俺の問いかけが気に障ったのか、カナはますますへそを曲げてそっぽを向いてしまった。俺は小さく息を吐いた。
「まあ、いいけどよ。次はどこ行く？」
しばらく唇をキツツキのように尖らせていたカナ。だが俺がそう問いかけると、不機嫌の仮面は被ったまま、けれども待ち構えていたかのように人差し指を突き出した。
「あそこ」
「ん？」
そこにあった屋台のひとつ。
子供たちが輪のように群がっており、その中心からはピチピチと水の音が聞こえる。
カナは半分ねだるような声で言った。
「……金魚すくい」
その答えに、俺は少しばかり眉をひそめた。
「あれ、やりたいのか？」
カナはこくん、と頷く。
すぐに判断を下すことはできなかった。姉貴はなんて言うだろうか。たぶん、いい顔はしないはずだ。
俺がまだガキだった頃、カナと同じように姉貴に金魚をねだって買って貰ったことがある。あの日の俺は姉貴の反対を押し切って、強引に金魚を手に入れたのだ。だけど金魚だって立派な命なんだぞと、帰ってきてこっぴどく叱られたのは俺じゃなくて姉貴のほうだった。
「世話とかしなきゃなんねえんだぞ？」
「ちゃんと育てるもん……」
カナは俺の袖をぐい、と引っ張って主張していた。
「絶対にか？」
「絶対、育てるもん……」
潤んだ瞳で、じっと俺を見つめ続けるその瞳。その瞳の奥にはどこか、姉貴と過ごしたあの日の情景が重なっていた。あの時の姉貴も、こんなふうに俺のことを映していたのだろうか。
その頑なな態度に、俺はついに観念した。
「しかたねえな……」
カナの顔がぱあっと華やいだ。その向日葵のような笑顔を見て、俺は今まで悩んでいたのが馬鹿らしくなってしまう。
……まあ、いいか。どうせ姉貴にしょっぴかれるのは俺なんだし。
そう考えてしまうのは、俺が甘いからだろうか。
「なら、俺が金魚すくいの極意を教えてやろう」

「コタロー金魚すくい上手いの？」
「ああ、これでも昔は金魚の救世主と呼ばれたくらいだ」
「どういうこと？」
「いいよ。分かんなくても」
俺はカナに手を差し伸べる。
「ほら、行くぞ」
「うん！」
カナは俺の手をギュッと握った。
俺はその温もりを感じながら、なんとなく、姉貴の手のひらを思い出していた。

いろいろと見て回っているうちにずいぶん時間が経ったらしい。太陽はもうてっぺんを通り過ぎていて、だけど今日一番の熱気を降り注いでいた。俺は思わず光を手で遮る。
カナは一匹の金魚が入った袋を携えて鼻歌を歌っていた。
一匹もすくえなかったのを見かねて、屋台のおっさんが譲ってくれたやつだ。
「コタローのアドバイスぜんぜん役に立たなかった」
「うるせえ、カナが下手くそすぎるからだ」
そんな取り止めのない会話をしながら、ふたりで歩く。
いつの間にか、神社の参拝道に出ていた。
先ほどの大通りと違って人はまばらだったが、それでもいつもより人の数は多かった。祭りってきっといい客引きになってんだろうな、なんて思いながら、俺は地面を蹴る。
陽の光が俺たちを鋭く照らして、二つ分の影を作っていた。
それを見て俺は思ってしまう。
小さな影と大きな影。それはまるで、昔の俺と姉貴の姿みたいだな、と。いまは少しだけ、立場が違うけれど。
「……なあ、カナ」
「なに、コタロー？」
「影踏みって知ってるか？」
カナは言葉の意図を図り損ねたという感じで見上げた。
「知らない」
「そか」
俺は、地面に映る影を指差す。
「影踏みってのはな、影を踏みあう遊びだ」
影が、夏の暑さに包まれてゆらゆら揺れる。
「ここに映ってるのはいままでの自分。それを超えてやるって思いで、影を踏むんだ」
ぜんぶ姉貴の受け売りなのだけれど。
「おもしろそう」
カナは瞳をきらきら輝かせて、俺を見た。まったく、血は争えない。
俺はカナより三歩だけ前へ踏み出してから、叫んだ。

「どっちがたくさん踏めるか勝負だ」
「……うん！」
これから色々なことが待っているだろう。嬉しいことも悲しいことも、全部、きっと波のように押し寄せてくる。だけど、夏はまだ始まったばかりなのだ。
今年の夏は、一体どこに行くのだろう？
そんな夢の続きに思いを馳せながら、俺たちは、夏の影を踏んだのだった。

世界の崩壊する確率

草津出

また、落ちたらしい。

何かが地面に衝突するような鈍い音と、耳を裂くような悲鳴。それを聞いた僕は心底うんざりした気分になる。

僕の座っている席。そこは窓のすぐ隣に位置していて、外の様子がすぐに窺える。だけどそれは否応なしに、おのずからそれが耳に入ってしまうということと同義だった。たとえそれが、地獄からの断末魔だったのだとしても。

このような悲鳴を耳にするのは、さほど珍しいことではなかった。いや、日常茶飯事と言ったほうが適切かもしれない。それほどに、頻繁にそれは起こっていた。そしてそれを聞くたびに、僕は思ってしまう。どうして自分は、窓側の席を引き当ててしまったのだろう、と。

窓の外の光景はもう、見るまでもなかった。僕の想像が正しいとするならば、それはすでに潰れたトマトのようにぐちゃぐちゃになっていることだろう。考えなければ良かったと思ったがもう遅い。頭の中の無残な肉片は、過去の映像（ビジョン）と重なってより現実的（リアル）な生々しさを帯び始める。

窓ガラス一枚を隔てた向こう側とは対照的に、授業は何事もなかったかのように進行していた。当たり前だ、たかがその程度のことで中断しているようでは、授業がちっとも進まないのだから。だけど、僕はもうそれ以上授業に集中することが出来なかった。

吐き気がする。しばらく赤いものは見たくなかった。今日の晩御飯がオムライスではないことを切に願う——。

放課後、校舎の外に出た僕は思わず鼻を覆った。

辺りから立ち込める臓物（はらわた）を引きずり出した臭い。そこはこの世のものでは形容しがたい異様な臭気で満ちていた。

これが屍者（ししゃ）の臭（かお）りだとでもいうのだろうか。だとしたら人間の本性というものは、あまりにも醜悪だ。

誰かが落下したであろう地点は既に綺麗に片づけられていて、見慣れた風景と同化していた。だけど僕には、そこがそれであることがはっきりと分かる。談笑する生徒たちの合間を縫うように透明な狂気が漂っていた。

この世界はイカれている。こんな腐敗液の染み付いた世界で、僕らは何を寄る辺にして生きていけばいいのだろう。——いや或いは、この世界はもうすでに終焉の時を迎えているのかもしれない。人間というものが死滅する何かが、そうさせる何かが、この世界には空気のように充満している。

僕はその場から校舎の屋上を見上げた。恐らくその誰かは、そこから飛び降りたのだろう。

以前どこかで衝動的自殺（ジサツ）病から生還した人の話を聞いたことがある。その人物は自分をその手にかけんとするその瞬間の記憶が、すっぽりと抜け落ちていたそうだ。だけど仮にその瞬間に意識があったとするのなら、その瞳で捉えていたものは、果たして何だったのだろうか。

今回の自殺者（カンセンシャ）はどんな世界をその瞳に宿しながら、その場から飛び降りたのだろう——。

——ふと、屋上に人影があるのを見つけた。

その影は、この学校の女子制服に身を包んでいた。どうやらここの生徒らし

い。けれど黒く艶やかな長い髪が顔を包み隠すように伸びており、その表情は見えなかった。

僕はなんとなく、彼女のことが気になった。今日同じ場所で人が死んだ。それはきっと彼女も知っているはずだ。それなのに、どうして彼女は誰もいない屋上でただ一人佇んでいるのだろうか。

彼女は屋上のフェンスに手をかけたまま、空の向こうを見つめているようだった。僕は一瞬彼女も感染者なのかと疑ったが、どうやらそうではないらしい。彼女には、それら特有の突発的な衝動性が感じられなかった。

僕は惹きつけられるかのように、彼女のことを眺めていた。

彼女の髪が、風を受けて大きくなびいた。それによって、彼女の顔が露わになる。

彼女の肌は透き通るように白かった。

僕はどうしてかその場から動くことができなかった。まるで僕が彼女の姿を目に焼き付けることが、世界の理(ことわり)なのだとでも言うように。

しかし僕と彼女は、やがて世界の帰結へと辿りつく。

彼女と目が合った。僕はそこから目を離せなかった。世界が僕と彼女以外のすべてを排斥しているかのようだった。

彼女に僕はどう映っているのだろうか。彼女は、この崩壊してゆく世界をどう見つめているのだろうか。

彼女は、ただ、小さく微笑んでいた——。

時々、この目で感じているものはすべて夢なんじゃないかと思うことがある。こんな狂った世界は全部幻で、これは僕の見ている夢でしかないんじゃないかと。次に目覚めた時にはきっと本当の世界に戻っていて、今まで通りの生活が始まるんじゃないかと。だけど新たな朝を迎えた時、そこはやはり血腥い息苦しさに満たされていて、僕はこの世界で目覚めたことを後悔する。

リビングに行くと、母が付けたであろうテレビからワイドショーが流れていた。どんな音楽が人気だとか、そういうくだらない内容が殆どだ。僕には、それが努めて明るく振る舞っているようにしか見えなかった。

いつからだっただろう、テレビで有名人の訃報を流さなくなったのは。そういえば新聞のおくやみ欄もいつの間にか消えていた気がする。でも考えてみれば当たり前なことなのかもしれなかった。今の御時世、死んだ人間をいくら載せたってキリがないからだ。それこそ紙(インク)の無駄だろう。

家族はまだ誰一人死んではいなかった。しかしそれが幸いだというには、僕には些か抵抗があった。何しろ生きているということはそれだけ他人の死を目の当たりにし、自分の死への秒読みを感じ取っているということなのだから。

僕は母の顔を見ないようにして足早に家を出た。自分の私的な空間が死の狂気に晒されてしまうのが、たまらなく嫌だったからだ。少なくとも、その死の瞬間には立ち合いたくなかった。

勿論学校にいたとしても、ジサツする瞬間に立ち会うことがない訳ではない。むしろ存在する人間が多いぶん、その確率は格段に高まるだろう。だけどそんなことは、僕には関係のないことだった。僕の知らない人間がいくら死のうが、それは所詮、赤の他人でしかない。

たとえ道に誰かの死骸（なきがら）が横たわっていたとしても、僕はそのまま通り過ぎるだろう。自分の知っている誰かが死ぬよりはずっと、マシだった。誰かが何時か見せたその表情が、呪いのように貼り付いてしまうよりは――。

教室に着いた僕は、永遠に空席となってしまった机の間を通り抜けつつ、自分の席に座った。

急いで来過ぎたせいか、授業開始までには少しばかり時間があった。僕は自分を外界から切り離すように、机に突っ伏した。世界が、暗闇に包まれてゆく。そして僕は、いるかどうかも怪しい神様というものに、願をかけるのだった。

次に起きたときには、どうか、夢から覚めていますように――。

――放課後、掃除当番だった僕は、淡々とそれをこなしていた。

僕は依然として夢の呪縛に囚われたままだった。授業中に喉を掻き切った生徒のこびり付いた血を見るたびに、それを嫌でも実感させられる。

掃除を終えて身支度を済ませた僕は、誰とも会話をすることなく教室を出た。誰かと言葉を交わすことは、同時に自分自身を傷付けるものだということを知っていたからだ。

辺りはすでに黄昏色に染まっていた。この場所と外界とを繋ぐ薄いガラス製の膜は、琥珀の空の光を溜め込み、それを限りなく僕へと注いでいた。

僕はこの夕暮時という時間が嫌いだった。この不完全な光源が作り出す、うすぼんやりとした幻想のような微睡みに、自分が溶け込んでしまうような心地がするからだ。

僕は鬱屈とした気分を抱きながら、校舎の出口を目指した。

しかしその途中で、僕の瞳はあるものを捉えた。――まるでこの奇妙な空間が作り出す、不可視の迷宮に身体を繋ぎとめられてしまったように。

それは屋上へと続く階段だった。

昨日、名も知らぬ誰かがジサツを遂げた場所。犠牲者が出るたびに厳重に封鎖しているはずなのに、何故かその生命を吸い取られてしまう者が後を絶たない、そんな場所。

そこへと続く階段の先には、一つの扉があった。

扉からは、光が漏れていた。日が傾き、校舎の内部により深く影を落とすこの時間帯において、その光は一際存在感を放っている。

どうやら半開きになっているようだった。普段は解放されていないはずなのに、どうして開いているのだろうか。

僕の足は自然とそこへと向かっていた。不自然に開いた屋上の扉。もしかしたら、この狂った世界を紐解く何かがそこにあるかもしれない。――そんな根拠のない意識が、僕をそこへ向かわせていた。

ドアノブを掴む。鉄でできたそれは、気温に見合わぬほどひんやりと冷たかった。押すと錆びついた音と共に、次第に視界が開けてゆく。

――そこにはひとりの女生徒がいた。彼女はフェンス越しにそこから望む町の風景を眺めていた。

その横顔を見て僕は、驚きを隠せなかった。血のように朱い光を浴び、艶やかに輝く長髪を押さえるその姿は、昨日見た彼女に間違いなかったからだ。いや、昨日は近くで見た訳ではないからもしかしたら別人なのかもしれない。だけど

そこに佇むその姿は、昨日の情景をそのまま切り取ったかのように、その場面をそっくりと描き出していた。

やがて僕の存在に気が付いたのだろう、彼女と目が合った。

昨日の焼き直しをしているようだった。彼女の顔を見つめたまま、離すことが出来ない。僕はなす術もなく立ち尽くした。

彼女は昨日見せたそれと同じように、小さく微笑んだ。

「――こんにちは」

その声は、馴れ馴れしい響きを持っていた。昨日の放課後を除けば僕と彼女は初対面のはずだ。それなのに、まるで僕のことを初めから知っていたかのような、或いは僕がここに来ることを予め知っていたかのような、――僕を待ちわびていたかのような、そんな声をしていた。

「君は、ここで何をしているの？」

僕は喉から絞り出した声で、彼女に尋ねた。

「何をしているように見えますか？」

彼女はからかうようにそう返した。僕は何も答えることが出来なかった。彼女と同じようにそこから広がる景色を眺めても、屍者（ししゃ）の血に染まる町並みが見えるだけだ。それは僕には、無意味なことにしか思えなかった。

「死んだ人の爪を、集めているんです」

彼女は言った。

「船を造るために」

僕にはそれが何を意味しているのか分からなかった。だが、少なくとも何らかの意味を孕んでいるということだけは分かる。彼女がそれを言った一瞬、表情に幽かな影を落としたことに、僕は気付いてしまったから。

「――冗談です」

彼女は妖しさの燈る笑みを浮かべた。でも、僕にはそれは暗い表情を隠すためのものにしか見えなかった。だとしたら――。

「どうして君は――」

普段は人と関わらないように生きている僕だけど、なぜか我慢できなかった。

「――君はこんなところにいるの？」

僕はいつの間にか口を開いていた。

「君も知っているだろ？　ここは何人もジサツしてる場所なんだ。現に昨日だって――」

「――見下ろしてみたかったんです。この町を」

彼女は視線をもう一度、視線を町へと戻した。

「町に住む人はどんどん減ってますけど、町はちっとも変わらない。こうして見ていると、自分たちがちっぽけな存在に思えてくるんです」

僕は彼女と同じように、町の姿を眺めた。町は僕の視線の限界を超えて、どこまでも続いている。だけど人の営みはもう、あまり感じられない。

感染は今も拡大を続けている。いや、感染症なのかさえも分かっていないのだ、本当は。この病について、人類は何一つ分かっちゃいない。

きっと僕等もそう遠くないうちに死ぬだろう。その時は誰にも平等に訪れる。僕が死ぬ確率も、彼女が死ぬ確率も、きっと、同様に確からしいはずだから。

「何だか、浦島太郎になったみたいですよね」
彼女は自虐的に笑った。
「周りにはもう自分を知る人は誰もいないんですから」
きっと彼女の周りの誰かが死んでしまったのだろう。僕にはそれが何となく分かった。自分が知っていたはずの世界が、人の死によって急速に形を変える。
僕等はいつ、玉手箱を開けてしまったのだろう。
竜宮城で乙姫様を殺してしまえば、きっとこんなことにはならなかったはずなのに――。
「そういえば、自己紹介がまだでしたよね、私の名前は――」
僕は彼女を手で制した。彼女は驚いたような顔をして僕を見ていた。けれど僕は、聞きたくなかったのだ。
それを聞いてしまったら、僕にとって彼女は、ただの屍になってしまうような気がしたから――。
それから放課後屋上へと向かうのは僕の日課になっていた。
彼女は多くを語らなかった。そしてそれは僕も同じだった。しかしそれで良かった。僕にとって彼女は唯一、死の狂気を感じなくて済む存在だった。
複製(コピー)みたいに僕の瞳に繰り返し映し出される代わり映えのない風景は、たとえ一時の間だったとしても、僕に悲惨な現実を忘れさせた。
「そういえばさ」
僕はおもむろに呟いた。
「今日、担任が死んだよ」
今朝、ホームルームの時間になっても僕のクラスの担任はそこに現れなかった。次第にクラスメートがざわつき始める。その光景の中で僕は、何の感慨もなくこう思っただけだった。ついに死んだのか、と。
だんだん僕の中の死という感覚が希薄になっているような気がする。誰かが死んでも、多少のことでは驚かなくなった。死を目の当たりにした時、それを単なる一事象としてしか見ていない自分がいる。だけど死の意味するものが完全に消失してしまった時、自分がどうなってしまうのか、今の僕には見当もつかなかった。
「君のところはどう?」
「私のところは、もうとっくに」
「――そっか」
もしかしたら彼女は、以前朝礼で壇上ジサツした教師のクラスなのかもしれない、となんとなく思った。
人々が死にゆく中で、他人の死を遠くから眺める。ただ、そんな日々だけが流れてゆく――。
――僕は多くを望まなかった。
たとえ世界が崩壊に至る病を抱えていたとしても、そんなことは僕には関係なかった。ただ僕を取り巻くごく小規模な関係性が崩れることさえなければ、その他はどうなったって良い。だからこれ以上人との繋がりを求めるようなことはせず、今ある状況を保てればそれで良かった。そんな日々が、続けばいいと思っていた――。

だけどそれも、そう長くは続かなかった。

朝起きると、母が死んでいた。

縊死(くびつり)だった。リビングに降りた僕を包んだのは、垂れ流しになった糞尿の臭い。その匂いのする先から僕は、目を逸らすことしかできなかった。糞と尿の凄絶な臭いにまみれた母は、醜く舌を突き出し、この世界に絶望した顔をしていた。

その時僕は、悟るしかなかった。僕にとって本当に安寧できる空間は、もう残っていないのだということに――。

――僕は横目で、そこにいる彼女の横顔を見た。彼女はいつもと同じようにフェンスの向こうの世界を、じっと見つめていた。

いずれ彼女も同じ運命を辿ってしまうのだろうか。いや、僕のほうが先かもしれない。しかしいずれにせよ、僕らはこの抗いようもない世界に黙って飲み込まれるしか術を持っていなかった。無力な僕等は、されるがままにそれを受け入れるしかなかった。

けれど、本当にそれで良いのだろうか――。

そう思った時、僕の手は無意識に動いていた。

「え――」

いきなり腕を掴まれた彼女は、目を丸くしたまま固まっていた。僕はそのままそれを地面に押し倒す。

そして僕は全力で拳を振り下ろした。肉の感触が拳を伝ってゆく。彼女の身体は、ボールのように跳ねた。追い打ちをかけるように反対の腕を振りかぶる。

いつか死んでしまうなら、死んでしまう前に殺してしまえば良い。そうすればもう、死の恐怖に怯えることはないのだから。

顎が外れる音と共に、見る見るうちに顔面が元の形を失ってゆく。それでもなお、僕は彼女を殴り続けた。口から血飛沫が舞い上がり、僕の頬を朱く染め上げる。僕はそれを袖で拭った。だけどその頬には、血液のぬるりとした感触がこびりついたままだった。

彼女は何も抵抗しようとはしなかった。ただ馬乗りになった僕から迫りくる拳を、なされるがまま受け入れているだけだった。

僕は不思議な解放感に満たされていた。なぜか僕の脳裡には、この女の殺せば世界の崩壊が恢復(おわり)に向かうのではないかという妙な確信があった。僕は殴る力を更に強めた。彼女の身体はもう既に、肉塊と言ったほうが相応しいほどに、醜く爛れていた。

そんな彼女の口の端が、微かに吊り上がった。

僕は力の限り叫んだ。

「何が可笑しい――」

「――何も変わってないじゃないですか」

背後から声がした。僕は声のほうへと振り返る。

「私を殺した、あの時と何も」

そこには彼女が立っていた。

「どうしてそこに――」

彼女は黒く長い髪をなびかせていた。つい先程まで僕から受けていたはずの

傷が、何一つ存在していない。
僕は咄嗟に視線を元の地面へと戻した。だけど僕の手によって滅茶苦茶に蹂躙された肉塊がまだ、そこにはある。
再び僕は立っている女のほうに視線を戻した。
「お前は何者だ」
「忘れたんですか？」
彼女は馬鹿にするような口調で言った。
「父親が父親なら、子も子ですね」
「どういうことだ」
「父親がどういう人物か、まさか知らないとでも？」
僕は彼女の意図が分からなかった。この場に父のことなんて何も関係ないことのはずなのに――。
「どういうって、父さんは普通のサラリーマンで――」
「本当に？　じゃあ、あなたは彼がどこに勤めていたのか知っていますか？　彼はどんな性格で、どんなものが好きだったか知っていますか？」
「そんなの当り前――」
だけど僕の口からは、それ以上の言葉が出てこなかった。何一つ思い出せない。父の勤め先も、性格も嗜好も。それどころか声も顔すらも思い出せない。
「何で――」
「当たり前ですよ。だって、あなたに父親なんて存在しないんですから」
僕に父親が存在しない――？
「冗談を言うな――」
「――正確に言えばあなたの思い描いている父親は存在しないといったほうが良いでしょうか」
この女は、何を言っているんだ。
彼女は不敵な笑みを浮かべながら、こう言った。
「あなたは――レイプ魔の子なんです」
僕はその言葉を理解するのに少しの時間を要した。レイプ魔――その単語があまりにも現実離れしたもののように思えたからだ。
「そんなでたらめを」
僕は言った。
「でたらめじゃないですよ。あなたの母親は、何者かにレイプされ――そしてあなたを身ごもった」
けれど彼女は僕の動揺を意にも介さず、ただ、淡々と言葉を続けた。
「お母さんは耐えられなかったんでしょうね。だって我が子が成長するたびに、恨んでいる相手に似ていくんですから」
僕は頭がねじ切れるような頭痛に見舞われた。それは頭を切り開かれて直接記憶を覗き見られているような心地だった。
「母親が死んだ後、それを親族から聞かされた、違いますか？　いえ、違う訳ないですよね？　だって今の私は、あなたの記憶から構成されているんですから」
「違う、違う――」
そんな訳ない。母が死んだのも彼女を殺してしまったのも、すべてジサツ病が

原因のはずなんだ。
「あなたももう気付いてるでしょう？　ジサツ病そのものが、あなた自身を肯定するためのただの妄想でしかないことくらい」
彼女は僕のほうに向かって歩み始めた。
「こっちに来るな――」
一歩、一歩とこちらに歩み寄ってくる。僕は彼女から逃れたい一心で、後ずさりし続けた。
来るな、来るな、来るな来るな来るな来るな――。
「あ――」
――突然、身体が足場を失って傾く。それと同時に、全身に生まれる浮遊感。
僕は一瞬で、自分が落下していることを悟った。
落下してゆく僕の目の前には、大きな建物が佇んでいる。それは学校ではなく、白い病院だった。
病室の窓が視界に映る。とある一室のベッドの上。そこには虚ろな目をした、かつての自分が、横たわっていた。

TAKERU

はるゆかり

楽しみにしていたさくら祭がおじゃんになって私はすっかりふてくされていた。もちろん彼氏と旅行などという色っぽいものではなく、女友達とノリで決めた日帰り旅行なのだが。

しかし宇宙旅行の予約ができるこの時代に強風で新幹線が運休するなんて、と己の運のなさに暗澹たる気持ちで大学の図書館に向かった。文豪たちの愛したこの町では休日はカフェ難民となってしまう。今日はお気に入りの喫茶店で甘さ控えめのキャラメルミルクティーを飲みながら読書はできないのだ。

歩いている間に、本当は旅行より本を読んですごしたかったんじゃない？と思えてきた。決して「すっぱい葡萄」じゃなくって。切り替えの早いのが私の特長なのだ。人は単細胞と言うけれど。

図書館に着くといつものかび臭い匂いとむわっとした熱気が一気に私の鼻に押し寄せてきた。

あぁ図書館だと思いました。

少し心が華やいだ。このカビのにおいを吸い込んだら咳き込むのはアレルギーなのかもしれないが気にせずにお気に入りの本棚を求めに行く。静かな空間の中に漂っているのはとても心地よいものだ。いつも通りステラおばさんによく似た司書さんと目であいさつを交わし、ヴィヴィアンのパンプスを鳴らしながらさみしげな通路を更に奥へと進んで行く。読む本はすでに決まっていた。村上春樹の『バート・バカラックはお好き?』である。国文科で「村上主義者」と言うのはどうも気が引ける。しかし中二病の時、『ノルウェーの森』を読んでから私は彼の奴隷になった。

大げさかもしれないけど、嬉しさも悲しさも全て彼故なのでした。正確には彼の小説なのですが。

期待に胸を躍らせながら目的地まであと少しというところで、ホチキス止めのある薄い紙束を見つけた。手に取ってみるとレポートのようだったが、名前が見当たらなくてどうしようかと思案していた。

題名は「ヤマトタケルの死について考察」。私は夏目漱石や泉鏡花といった近現代の作家ないし作品を中心に学んでいるので、古事記や万葉集といった上代の作品には中々お目にかかれない。ヤマトタケルの文字に興味を掻き立てられて、それを読んでみたくなった。数分の葛藤後に1ページ目をひらりとめくってみる。まるでTDLに来たようなワクワク感に負けて、思い切って全部読むという暴挙にでたのだ。

大学受験以来、短い文章は音読する習慣がついている。

でも図書館では声は出せないので、心の中で音読することにします。

ヤマトタケルの死についての考察

ヤマトタケルの死については諸説あり、様々な研究がなされているにも拘わらず定説と言えるものが存在していない。

ヤマトタケルは古事記では「倭建命」と、日本書紀では「日本武尊」と表記されている。両方とも名前に日本という言葉が入っていて、ヤマトタケルがいかに重要な人物であるかは容易に想像ができる。しかしヤマトタケルは天皇にならずに亡くなってしまう。しかも二度と大和の国を見ることもなく。日本を代表する英雄の死に方としては少々悲惨すぎるのではないか。

そこでヤマトタケルの人物像に注目してみた。日本書紀よりも古事記の方が文学的なので、古事記に焦点を当てて言及する。

古事記の倭建は「是に、天皇、其の御子の建く荒き情を惶りて」とあるくらいだから、相当気性が荒い武人なのだろう。その性格が災いして数々の遠征という名の追放にあったのだが、なぜ父である景行天皇は自分の息子をここまで恐れる必要があったのだろうか。

この理由は当時の政治体制に起因しているのではないかと考える。この時代は皇太子が何人かいて、その中で武勇に優れている者が、天皇になるという体制であったようだ。しかも天皇を退けて天皇になれる可能性もあった。皇太子を一人に決めるのは中国に倣ったものであって、当時は先述の体制であった。つまり景行天皇と倭建は親子でありながら政敵でもあるという複雑な関係だったのだ。景行天皇は政敵を追放した。

倭建の性格は伊吹山の神を打ちとりにいった時の場面からもよくわかる。なんと愚かなことだろう。草薙の剣をミヤズヒメのところにわざと置いて行ってしまうという最大のミスを犯してしまった。この霊剣がないととても人の身でありながら神に打ち勝つことなどできないというのに。そしてそのまま「この山の神は、素手でとってやろう。」というかの有名な言挙をしてしまった。これは倭建のおごり高ぶった性格を表しているとともに結末を読者に予期させている。神武天皇も熊野の山で言挙を行ったのだが、神武天皇は高倉下の霊剣を持っていたので無事であったことを考えると、倭建は見通しが甘かったのだ。

天皇であるには武勇に優れているだけでなくとっさの判断力や知恵を有することがとても重要で、ヤマトタケルはそれらに欠けた人物として古事記に登場させられたのだろう。

しかしヤマトタケルが単なる悲劇の英雄に収まらなかったのは、やはり彼がそれに見合う魅力的な人物だからだ。そしてこんな素晴らしい人物でも一歩間違えれば地獄行きだという日本一ハンサムな反面教師は、まさしくヤマトタケルなのだ。

何かが来ました。

動揺しながらしばらく放心状態でレポートを見つめていると、「あの、ちょっといいですか？」と言う声がした。顔を上げると男子学生が目の前に立っている。ハンサムとは言えないが背は高く、ファッションも今風の好青年スタイルでま

さに「感じの良い人」の代表のような人であり、品の良さを感じさせた。

しかし私の好みではありません。私はジャニオタなので。

慌てて「なんでしょうか！」と少し大きな声で答えると、彼は少し困ったようにはにかみながら「そのレポート僕のですよね…。」

きみにより思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらむ

業平

貴方に出会うまでわからなかった。誰がなんと言おうとこの気持ちが恋なのです。

なけなしの一欠片

八名井明

「先輩。動かないでくださいね」
友人に頼まれて引き受けたはいいが十分間同じポーズをし続ける苦痛を味わうとは思わなかった。
数人から受ける視線に梨本は耐えられなかった。いつも彫像はこんな思いをしているのだろうかと考える。
放課後の美術室には夕焼けの光が差し込んでいた。美術室から見える景色は格別であると噂で、放課後の美術室の殆どを占領している美術部の人が羨ましいとの話もあるほどだった。梨本はポーズを保ったまま、窓からの景色を堪能する。しかしそれはいい暇つぶしにはならなかった。
美術部には比較的仲のいい友人が居るのでよく遊びに来ていた。こうしてモデルを引き受けるのもよくあることだった。しかし、いつもは適当なポーズをとってそれをカメラで撮影してもらうことにしていたのだが、今回は違った。
「クロッキーだっけ。こういうの」
「楓太。手が動いてる」
吉田がすぐさま梨本のズレを指摘し、修正をさせる。彼こそが梨本に度々モデルの依頼をしている友人だ。
しゃかしゃかと鉛筆を動かす音と教室の外から聞こえる陸上部の掛け声だけが響いていた。先にウォークマンを取り出して、ポッドキャストでも聞けば良かったと梨本は後悔していた。携帯は鞄の奥底で眠っている。
「どうして俺なんですかねえ」
「梨本先輩、体のラインがわかりやすいんで」
「それはどうも。佳奈ちゃん結構見てるんだね。俺のこと好きだったりする？」
「しません。あと首動かさないでください」
辛辣だなあ、と漏らすがやはり鉛筆を動かす音ばかりだった。梨本を被写体として捉えている全員が、完璧に自分の世界に没頭していた。特に三隅は顕著で、一切の妥協を許そうとはしない。
また梨本は窓の外を見る。
学校の三階にある美術室からはまず自分の住む町が見えた。これが良い風景だと言われているらしい。何処でも見れそうなものなのに、と思う。
「……話してもいいんだよね」
何も言わせないような空気では居心地が悪いのか梨本は言う。
梨本の問いに答えたのは三隅だった。
「先輩、これでモデル引き受けるの何回目ですか。毎回言ってますけれど、口だけならいいんですよ」
「佳奈ちゃんありがとう。でさあ、これってクロッキー？　って言うやつであってるかなあ」
「……吉田先輩」
上手く答えられない三隅は吉田に頼る。吉田は自分の手元から視線を逸らさず答えた。
「厳密には違うけど、描いてるこれはクロッキー帳だよ」
「そのスケッチブック？」
吉田は梨本の正面に陣取っていたので、視線をずらすだけで彼が指している

ものを見れた。梨本には彼らがスケッチブックと呼んでいる物と、クロッキー帳とやらの違いがわからなかった。
首を傾げようとするとヤジが飛ぶ。
お手上げ、と梨本は言う。
ギブアップした梨本に説明しようと、誰よりも早く描き終えた吉田が立ち上がる。そして傍らに置いていたスクールバッグから一冊の冊子を取り出す。
彼は梨本に近づいて、その冊子と今まで彼が使っていたものを梨本に見せる。
茶色の表紙の冊子と橙色の表紙の冊子だった。
「こっちがクロッキー帳」
吉田が茶色の表紙の冊子を梨本の眼前にやる。梨本はずい、と勢いよく提示されたそれに驚いて後ずさりしてしまいそうになった。なるだけだった。首も動かなかった。
「セーフ」
「いや。動いてますよ、梨本先輩」
「えっ？　何処が」
「三隅さん言い過ぎ。動いてないよ、楓太」
「どっち？」
「動いてない。三隅さんがいじわるしただけだよ」
梨本は三隅を睨む。彼女は何も答えず、茶色の表紙——吉田が使っているクロッキー帳と同じものに視線を移動して、鉛筆を動かし始めた。三隅ちゃん、と彼女の友人である鹿島が口にすると三隅は小声で言う。
「梨本先輩、いじると面白いよね」
「佳奈ちゃん、聞こえてるから」
「あはは。そうだよね。楓太はいじると面白いから」
「お前まで言うのかよ。いや、そんなことはないって言うか……俺？」
「俺ですよ。だってなんか先輩って、うーん。震えてそうで」
「佳奈ちゃんってばサディスティック」
「梨本先輩の変態」
あはは、と梨本は笑ったが乾いた笑みだった。
まさか吉田まで同意するとは思っていなかったので、梨本は不安になった。指定されたポーズがぶれそうになる。机に置いていた右手が震えているように感じた。
その梨本の震えに気づいたのは友人だった。
吉田は一度持っていたクロッキー帳とスケッチブックをスクールバッグにしまってから、他の部員の邪魔にならなように梨本の背後にあった椅子に座る。そこから右を向くと石膏像があったので手に取った。久しぶりに持つ石膏像は重い。
「それで、クロッキー帳とクロッキーの関係なんだけど」
「クロッキーするのがクロッキー帳ってことでいいんじゃないの」
「そうだけど、クロッキーは速写って呼ばれるんだ。だから十分ぐらいで描いたものとか、描くことを意味するから、そりゃあ鉛筆で描きやすくないといけないよね」

「もしかしてそれ説明するために一番に描き終えてないよな？」
「僕、描くのだけは早いんだ。だから楓太のためじゃないよ」
へえ、と梨本が頷く。ヤジは飛ばなかった。右手の震えは収まっていた。
友人が臆病な人間だと気づいたのは夏休みに入る一週間前のことだった。
顔が整っている部類に入るらしい梨本はいつも女の子に囲まれていた。それでいて同性にも人気があった。ちゃらんぽらんでいじられ役。ボケとツッコミをこなし、よく笑う。よくある典型的な人間だと吉田は思っていた。
典型的な学校に一人は居るクラスメイト。
それはフィクションの話でも、現実でもそうだ。しかし梨本は少し異なっていたのだった。何が何でも、先頭には立たない。責任が大きいポジションにはなかなか立たなかった。指名をされても、上手く流していたのだった。
指名されたら、調子に乗ってやりそうなのに。
ぼんやりと梨本に対する印象が変わってきた頃に、運良く二人で話をする機会があった。そこで、吉田は彼に遠回しに聞いたのだ。
——梨本って、震えてるけど冷え性だったりする？
梨本は吉田の質問に刺されたような気がした。そのときばかりは本当に震えていただろうし、表情が繕えていなかったと反省している。自分は間違いなく臆病な人間で、だからこそ上手く人と深入りしない塩梅で接して、自分が傷つかないようにしているのに。
それまでの二人の関係はただのクラスメイトでしかなかった。しかしこの瞬間から一変した。梨本にとって吉田は必ず避けねばならない人物になりかけていた。
なりかけていたが、なりはしなかった。
「吉田ってなかなか見てるのなあ」
試すつもりで、吉田に言った。
彼はすぐには答えず、梨本を見つめていた。このとき彼は、梨本に親近感を覚えていた。
「フィクションの人物じゃないんだ」
「え？」
想定外の台詞だった。梨本の緊張は一気に抜けていく。
「こっちの話。梨本って遠い人物だと思ってたからさ」
「遠いって言われても、俺だってただの人間じゃん」
「そうじゃないって。僕も震えるんだ。もうこれでもかってぐらいに」
「……吉田も？」
「うん。あと名前で良いよ。僕も楓太って呼びたいし」
彼は、吉田はもう気づいていたに違いないと梨本は確信していた。自分が臆病なことをわかっていて、見下すこともせずに友人になることを選択したのだろうと思った。ただこれは梨本の想像でしかなかった。
しかしあれから半年以上経過した今でも、吉田と良い関係が続いているので梨本の想像は当たっていると言える。
そして、吉田は梨本が不安になると程良くこうしてフォローを入れてくれている。これは梨本にとってありがたいことだった。ただ、よく相談だと言って彼

女とののろけ話をしてくるのは困ったものだが。
「でさ。クロッキーとスケッチブックの違いの話に戻ると」
「あーやめやめ。その話は終わり。クロッキー帳は鉛筆専用で、スケッチブックはいろいろ使える。これでいいっしょ」
「違うんだけど……まあ、いいや。そんな感じに思ってくれればいいよ」
鉛筆を動かす音の中で梨本と吉田は話していた。次第に鉛筆を動かす音も消えていった。部員がクロッキーを終えたのだ。
「そういえば部長さん居ないじゃん」
「部長は先生と会議中だよ。なんか展示会がしたいんだって」
「へえ。ご苦労様……ところで全員終わってたりしない？　疲れてきた」
「そっちこそお疲れ様。みんな終わった？」
吉田が聞くと室内に居る全員が頷く。梨本は深呼吸をした後に左隣にあった椅子に座った。足下に置いてある自分の鞄からタンブラーを取り出すと中身を確認した。今日は麦茶を持参していた。まだ半分も飲んでいない。
梨本が麦茶を飲んでいる間に美術部員はいそいそと片付けを始める。今日の活動はクロッキーをして、それまでに部長と顧問による会議が終わればその報告。終わらなければ制作をしたい部員は残り、帰りたい部員は帰って良いということになっていた。殆どの部員が帰宅することを望んでいた。
十人余りの部員により美術室は数分もしないうちに片付けられた。とは言っても、梨本が居た位置を囲むようにして机を捌け、椅子を置いただけなので準備にもそこまで時間がかかっていなかったこともある。
美術部では交代制で美術室の掃除当番を決めていた。掃除当番ではない部員はそそくさと挨拶をして帰ってしまう。
「楓太も手伝ってよ」
「嫌だ。俺は部外者じゃん。あと顔的に似合わないじゃん？」
「そこで顔は関係ないってば」
運悪く今日の掃除当番は吉田と三隅だった。梨本は吉田とこの後喫茶店に行く予定があったので、どうしても待たねばならなかったが、三隅が居るというのが問題だと思っていた。
三隅は梨本の中の可愛い後輩の部類に属している。まず、外見に申し分が無いのだ。だが彼女の性格が苦手だった。
見透かす訳でもなく、ただ観察しようとする目と今にも自分の傷口を抉りそうな指。苦手だった。ナイフを向けられている気がしてならない。
しかしそれ以前の問題として、梨本には抉られるような傷など存在していなかった。これが梨本の臆病だった。刺された、刺されていることよりも、されるかもしれないことを考えてしまうのだ。だからそうならないように振る舞う。見つけられることを拒んでいた。
そんな梨本にとって三隅は天敵とも言える存在である。逆に三隅にとって梨本は興味深い存在だった。
三隅は人見知りをするタイプだ。本人も自覚している。だから仲の良い友人は限られ、仲の良くない——彼女にとっては自分に関わらない、あまり話さない、仲の良い友人以外の人物には冷たく当たってしまう。よって、悪い印象が次々に

自分に発生してしまうのが悩みの種だった。
悩んでいる最中に梨本が現れた。
初対面をそつなくこなされた。三隅は当然、冷たくなってしまった。彼が示したのはよく見る反応だった。「人見知りなんだ」そうやって適当な感想を言って、気まずそうに別の人との会話を始める。そこまでは良かった。
けれども彼はおかしかったのだ。三隅は聞いてしまったのだ。彼が美術室に訪れる、扉を開こうとするその瞬間に、まるで言い聞かせるかのように「大丈夫、大丈夫」と呟いているのを。そしてその表情は険しかったことを。
どうしてなのかは知らない。聞いてもいない。梨本と三隅はそれほど良い関係ではなかった。梨本からすれば友人の後輩であったし、話す機会は梨本が美術室にやって来なければ殆ど無い。どうすれば話す機会が増えるものかと考えているうちに、自分からつっかかるようにすれば良いのだと三隅は気づいた。
だから出来るだけ彼と話すように、探るようにしているのだが梨本が三隅を危険視しているので上手くいっていない。噛み合わさっていないのだ。
「ほら、梨本先輩も」
「俺は美術部員じゃないからごめんね、佳奈ちゃん」
今日ものらりくらりと回避する。
「俺からもお願い。早く終わらせてケーキ食べに行こうよ」
「お前から頼まれてもなあ……」
「ケーキ？」
がたん、と机に持っていた箒を引っかけながら三隅が反応する。反動で一つ椅子が倒れる。三隅は恥ずかしそうに椅子を直す。
梨本はぽかんと口を開けて彼女が椅子を直すのを見ていた。吉田は箒を教卓に立てかけて、彼女に駆け寄った。
「三隅さん大丈夫？」
「え、いや。大丈夫です。吉田先輩が心配することじゃありませんから」
「怪我がないなら安心だね。三隅さんも、ケーキ食べたい？　奢ってくれるって。楓太が」
「おいおい」
さらりと自分が奢ると言う吉田を梨本は彼が立てかけた箒でつつく。
「ち、違うんです。ケーキ、好きなだけです」
「女の子はみんなそうだもんね」
「お前の彼女はどうだか」
「えっとね、好き……なんじゃないかな」
「まじで答えなくて良い」
また始まった、と梨本が呟く。三隅もそれに頷いた。
「こいつののろけ話って部内でも有名だったりする？」
「はい。めっちゃのろけますよ吉田先輩。たまに作品のモチーフとかにしてるんです。彼女のさんのこととか」
「こととかって……どれだけやってんの」
梨本が問う。
「……ちょくちょく」

吉田は小さい声で言った。
「うっわ。この野郎。見損なったぞ」
梨本がまた箸でつつく。吉田は嬉しそうだった。そんな吉田の姿を見て、三隅はため息を吐く。
「佳奈ちゃん飽きれてるぞ」
「えー三隅さんはよく相談に乗ってくれるよ」
「それ相談なわけ？」
「私は話を聞いているだけです」
「だってよ。ほら、相談じゃない」
「そうかなあ……じゃあさ、これからケーキ奢るから行こうよ。相談もそこで乗ってもらおう」
ケーキに三隅は一瞬目を輝かせたがすぐに箸を握り直し、首を横に振る。大好きなものが食べれるというのはとても魅惑的だが、また冷たく当たってしまうのではないかと考えてしまう。
「でも佳奈ちゃんの財布を心配したりとかしないの」
「いいよいいよ僕が奢る。彼女が食べたいっていうケーキフェア見に行くだけだし」
「俺が奢るんじゃなかったのかよ」
「えー、だって僕の問題だし」
「じゃあ俺のも奢れよ」
「やだ。楓太は自分で払ってね」
「ほら佳奈ちゃん、こんな奴だぞ。いいのか」
「わ、私はえっと……」
三隅と同じように梨本も考えていた。もし三隅が行くと答えてしまったら今度こそ逃げ場が無くなってしまうのではないのだろうかと。
そんな二人を観察している吉田は、ふと思い立ったことを口にする。
「三隅さんは楓太が気になるの？」
場が冷え切った。
一番最初に動いたのは梨本だった。また箸を使って吉田をつつく。三隅はまだ呆けていた。
「痛いよ楓太」
「そうじゃないだろ。まずは佳奈ちゃんに謝れ」
「なんで」
「迷惑だろ！」
「迷惑だった？」
吉田が質問をすると三隅は首を横に振る。
「そうじゃないん、ですが」
「うん。でも三隅さんは楓太が気になるみたいだったから」
「ですけど」
「ていうか何で佳奈ちゃんが俺を——」
「やっぱり。ほら僕は間違ってなかったでしょ。楓太」
「あ、あの」

「おい。ちょっと」
次々に自分が思っていることを述べようとする吉田を止めなくてはいけないと梨本は思った。この場の被害者は間違いなく三隅だった。三隅は箒を握りしめて震えていた。
覚えがある風景だった。梨本は見たことがなくとも、よく体験していることだったのですぐに理解できた。思考が飽和しかけているのだろう。だから震えて、何も答えられなくなる。こうなってしまうのが怖くて、自分はいつも回避するように心掛けている。何を回避するのかと言えば、自分を不安にさせる要因からだ。
梨本が吉田の襟首を掴もうとする。
「あのっ！」
三隅が叫ぶ。
「私、あの、失礼します！」
箒を投げ捨てて自分のスクールバッグを持ち三隅は美術室から走り去っていく。
襟首を掴むのに成功した梨本は彼女を呼び止めようとしたが、予想以上に彼女は足が速かった。
「……楓太。知ってる？　三隅さんって体育祭でリレーの選手だったんだよ」
「もうちょっと早く言ってくれよ」
取り残された二人は、その後手早く掃除を終わらせ予定通りにファミリーレストランへ向かった。開催されているケーキフェアに合わせて、そして自分の彼女が行きたいと言っていたという理由からか、注文は全て吉田がした。だが注文をするまでに三十分が経過していた。彼は優柔不断だった。
彼がケーキフェアに行きたいと言ったのも優柔不断が理由だった。店に入るとどれを注文するのかを悩んでしまい、いつも彼女に指摘されてしまうから、先に行くような場所に目処をつけてある程度把握してしまおうと思ったのだった。
吉田はこのことをのろけ話だと思っていないようだったが、梨本にしてみればのろけ話の一つだった。
エスプレッソコーヒーを一口飲む。梨本のために渡されたシフォンケーキは八等分、綺麗にわけられていた。八等分になったシフォンケーキは一口サイズになる。器用なものだと梨本は吉田の手つきを見ていた。
「でさ、佳奈ちゃんのことなんだけど」
「……やりすぎた、よね」
「反省してるならいいんだけど、あれはなんていうか。ほら、あれだ。深入りしすぎだと思うんだよね」
縮こまりながらチーズケーキを同じように八等分しようとしている吉田は、ただひたすら彼の言うことに頷くしかなかった。自分が悪いことは自覚していた。だから梨本の言うことが沁みて仕方がなかった。
「今日は僕が奢るから……」
「いやいいって。俺も食べるし。後でサンドウィッチ追加する」
「楓太は食べるね」
「食べ盛りだし？　仕方ないって」

梨本は店員を呼んでサンドウィッチを注文する。彼の皿にあったシフォンケーキはもう四切れしか残っていなかった。

外は暗くなり、店内もそれに合わせているのかゆったりとしたジャズが流れている。会話をしている客は二人の他にも居たが、どうしてか小声だった。二人もつられて小声で話す。

「でも、さ」

「何だよ」

「楓太も楓太じゃないかなあ。わかってて、三隅さんのこと避けてるよ……ね？」

う、と梨本が唸る。

「もしそれがさ、好意とかじゃなくても楓太はなんだか避ける癖があるからなあ」

「ないない。絶対ない」

「ある。絶対あるよ。三隅さんの連絡先知ってるなら、今日してみれば？」

「俺のケータイ充電切れてるんだよね」

「なら充電してからすればいいじゃん」

「ここから帰ったら、もう日付変わるんだけど」

「三隅さんは居酒屋バイトだから日付が変わっても、一時までならきっと起きてるよ」

「十時上りなのに？　よく知ってるじゃん」

「頑張り屋さんだから。先輩は後輩のことを知ってるもんなんだって」

「お前の彼女が言ってた？」

「どっかの受け売りだとは思うけどね」

吉田ののろけ話を聞いているつもりがいつの間にか自分の相談に乗ってもらっている気がした。

「でもさ」

カプチーノが入ったマグカップをソーサーに置き、吉田は言う。これは梨本がふざけて注いだものだった。

「楓太のさ。その感じって三隅さんに似てるよ」

「佳奈ちゃんのとはちょっと違うと思うけど？」

「僕からすればみんな同じだよ。なんだろう。ハリネズミみたい」

「ハリネズミ？」

「触りたいけど触れなくて、みたいな。もういっそトゲ抜いちゃえば？」

「抜くって、どうやって」

「適当に。それに三隅さんは今だとフリーだよ」

「なんだよ、それ」

「僕からのアドバイス」

「嫌味じゃん」

最後の一切れのシフォンケーキを刺しているフォークを吉田に向ける。吉田はそうだよ、と肯定した。

「きっと三隅さんと話が合うと思うんだけどな。楓太と一緒に話したいって思ってるよ」

「推して推して、今日は引かないつもりだろ」

「そうだよ。楓太が頑張ってくれそうだから」
「期待の新人って訳？」
「それ以上だよ。頑張れー」
「棒読みのくせによく言う口は閉じてください」
吉田は梨本が会話を上手く流していると思っていた。しかし当の本人は想像以上に真に受けていた。梨本は単純だった。加えて、吉田は梨本が信頼している人物だった。震えを見抜きつつも、声には出さない。これが嬉しかった。だから梨本は吉田を信頼していた。
先程注文したサンドウィッチが梨本の前に置かれる。彼は急いで出されたサンドウィッチを食べる。それを吉田は目を丸くして見ていた。
「ちょっと早く帰るわ」
「やる気になった？」
「ほんの少しだけな。代金ここに置いとく。支払い任せたから」
「任せておいてよ」
吉田が笑ったのを確認すると梨本は店員にごちそうさま、と言って駅へ駆けた。現在の時刻は八時半。梨本が利用する駅まで走って十五分として、電車に揺られて一時間。そこからまた駅から自分の家にまで三十分はかかる。学校から電車を利用してここまで来たので、時間がかかってしまうのは仕方がない。だが、うまくいけば日付が変わる前には連絡がとれると思うのだが、充電が完了する時間も考えなくてはいけない。充電をしている間に風呂や明日の準備を済ませて、落ち着いてから彼女に連絡をしよう。梨本は決意した。
彼のプランは予定通りに進んだ。寧ろ予定よりも早く帰宅することが出来たのだ。まず最初に充電器にケータイを繋ぐ。きちんと繋がったことを確認してから風呂に入り、着替え、明日の準備をする。明日の準備が終わったときの時刻は十一時半だった。まだ時間はある。
ケータイを確認すると充電が完了していた。三隅との唯一の連絡手段であるメッセージアプリを開くと、吉田から連絡が来ていた。「ちょっと多かったから、明日返す」とのことだった。梨本はわざと多く金を置いたのだが、吉田はしっかり返すつもりらしい。返信をしてから、今度は金ではなく物で返そうと梨本は思った。
だが、まずはここからである。
三隅との会話から、彼に返さねばならない。無音が怖くなり、テレビを点ける。お笑い番組が始まるところだった。画面の向こうで芸人が笑う。梨本もそれにあわせて笑ってみようとする。うまく笑えなかった。緊張していた。
それでも話さなくてはいけないのだろう。とりあえずは自分のためだ、と彼は言い聞かせた。そしてその後に続く理由は、吉田への恩返しと彼女のためだ。彼女もある意味、自分と似たような人間なのかもしれないと思うと、どうも放っておけなかった。支える勇気もないくせに、震えながら文面を考える。
まとまったところで時刻を確認すると、日付が変わる直前だった。三隅へメッセージを送るために文章を打ち込む。文章と言っても、それほど長いものではない。
しかしこれでいいのだろうか、と思う。

――しっかりやれよ。男だろ。

最近のメッセージアプリには便利なことに通話機能も付いている。梨本は、とにかく震えながら、震えながらそのボタンを押す。

一言から始まる。電子音が通話の開始を告げる。

「どうしたんですか」

「あのさ――」

なけなしの勇気の一言から、彼の恩返しが始まる。

在処

八名井明

大事件だ。
そう言って白川は秋原の腕を掴んで走り出した。授業が全て終わった放課後。秋原がちょうど下校準備を整えたときだった。
白川は秋原を呼ぶなりしっかりと秋原の右腕を掴み、冒頭の台詞のみを発し走り出したのだ。突然の出来事に秋原は対応しきれず、引っ張られる形をとっている。本当は早く帰って姉と話がしたいのだが、言い切れずに居た。
ばたばたと掃除をしている他の生徒の間を縫うようにして二人は走り続ける。そういえば、白川の目的地はどこなのだろうか。ふと疑問に思った秋原は白川の後頭部をじっと見つめた。明るく染めた茶髪に交じる黒髪は染め残しだろうか。地毛が元々茶色の秋原にはそれが汚く見えた。
「おい白川。大事件ってどういう事だよ」
二階へと下る階段を進む途中に秋原はついに痺れを切らせて白川に問いかけた。茶髪に交じる黒髪が目立つ彼の後頭部がくるりと動いて、白川と秋原の視線が合う。腕はまだ離されない。
白川はにやにやと笑っていた。猫が獲物を見つけたときのような鋭さがどこかにある。
「大事件も大事件さ。すごいぞ。見て驚くに決まってら」
秋原は白川の笑い方がどうも気に食わなかった。恐らく白川が秋原にこの話を持ち掛けたのは自分が淡白な性格だからだろうと推測した。自分はどこか冷めている人間で、あまり表情を変えようとしないと思う。逆に白川は人を驚かせたり、笑わせたりするのが好きな人間だった。
見て驚く。白川に言われたが秋原には何の面白味の無いような話に思えた。大事件でも、学校で起きた事件なのだからたかが知れている。
走り続け、階段を降り続けた所。ついに白川は立ち止まった。職員室の隣にある資料室。職員室のドアには会議中の掛札がされている。
「資料室か？」
「そ。資料室」
「鍵が掛かっているはずだろ」
「掛かってなんかいやしないよ。たまにしか先生が入らないから、開けておいても平気なんだ」
それは先生に非があるのでは、と秋原は思ったが口には出さないようにした。ここまで来たのだから見てしまうことにしよう。
白川は何の躊躇いもなく資料室の扉を開いた。薄暗い資料室は冷えていた。一切の光が遮断されている部屋には、資料と思える書類で埋め尽くされ、人が入るのを拒んでいるようにも思える。
埃っぽい資料室を二人は進む。白川が手探りで電気を付けると、一気にそれらの資料が姿を現す。天井にまで届く。いや。天井ギリギリにまで積み上げられた資料の数々。教師や事務員は何をしているのだろう。こんなものを片付けずに他のことをするなんて、馬鹿ではないのだろうか。
「秋原は少し潔癖入ってるから、嫌かもなぁ」
「嫌どころか今にも帰りたい」
「あはは。でもあと少し付き合えよ。ここまで来たんだ」

白川は軽く言うが秋原はもう帰りたかった。興味はあるが、埃だらけの場所だけは苦手なのだ。過度の潔癖症である自覚はない。しかしこの散らかりようは許せなかった。それがきちんと積み上げられていたとしてもだ。

白川はまだ秋原の腕を掴んで離さなかった。振りほどくことも、恐らく出来る。ただ面倒なだけだった。秋原は白川に聞こえないようにため息をついた。

照らされた資料室は広かった。埃と資料さえなければ、どの教室にも優る広さだ。殆ど資料が占領しているのが勿体無いとも秋原は思う。白川と秋原は数少ない人が通るための隙間を進んだ。

ここに、一体何があると言うのか。

「秋原はさ、動物好き？」

白川が問う。

「動物よりかは人間が好きだな」

「へぇ。面白い返答だなぁ。初めて聞いた」

「確かに珍しい回答だろうな」

「でもそれを聞いて安心したよ。衝撃って程でもなさそうだし。良かったよかった」

先程とは違う笑いが資料室に響く。やはりこの笑い方も、秋原には気に入らなかった。

別に白川の笑い方に特徴があると言うわけでもない。何となく気に障るのだった。その何となく秋原の気に入らない笑い方で、白川はくすくすと笑っていた。

「あのさ」

「どうした秋原」

「白川はどうしてそんなに笑えるわけ？」

秋原は問いかけた。これは白川に対する秋原の最大の疑問とも思えるものだった。

何が面白いからと言って笑っているのでは無いような白川。しかし笑う。不思議で仕方がない。考えていくと、疑問符が飛び出し続けて収拾がつかなくなってしまう難問だ。常日頃積極的に表情筋を動かしていない秋原には、疲れてしまうことにしか思えない。

腕を掴んだまま、白川は秋原に向かい合った。

「どういう答えがいい？」

「そういうのは求めてない。本当のことを言ってくれ」

「わかった。一言で言うなら、これだ」

白川は掴んでいない方の腕を秋原に突き出し、人差し指を彼の鼻に押し付ける。秋原の少し花が脂ぎっているように感じた。

「面白いから。当たり前だろ？」

彼は当然のように答えた。笑った顔はまだ崩れてはいない。むしろ輝きを増しているとも取れる気がした。

質問者の興味は薄れてしまったらしく、頷くだけだった。「やっぱりつまらなかったかな」と白川が言うと、質問者は首を横に振った。

これは嘘だ。白川は確信する。

「じゃあ逆に質問だ。秋原は何がつまらないのさ」
ならこの嘘吐きの質問者はどのような答えを自分に言うのだろうと興味が湧いた。押しつけていた人差し指を引っ込めると、二人の立場は逆転する。
「姉貴が居ないから」
逆転した質問者に秋原は即答した。あまりの早さに驚いて、腕を掴んでいた力が緩む。その瞬間を秋原は逃さなかった。掴まれていた部分が生温い。やっとのことで、秋原の腕は解放された。すかさず掴まれていた部分を制服で乱暴に拭く。
白川の表情は少々ひきつっている。
まさかあの秋原がこんな回答をするとは思わなかったのだ。加えて、その制服で拭く行為にも驚きを隠せなかった。やはりこいつは潔癖症なのだと白川は思った。
「もしかして、秋原はシスコン？」
「シスコンでいいよ」
再度確認をしようとすれば、諦めを含んだ声が待ち構えていた。何とも言えない気持ちになり、秋原を見つめる。そこにはいつもと変わらない秋原が居た。
「……驚きだな。まあいいや。なんか仲良くなった気がするし」
「俺はそんな気も何もしないけどな」
「やっぱり？　だって拭いたもんなぁ」
「悪かったな。熱が気持ち悪いんだよ」
「そこは、友情の印として残しておくべきだって」
次は白い歯を見せて白川は笑った。この笑い方もむかついてしまう。
手は離された。腕も拭いた。だが、まだ白川がこの腕に居るような気がして気持ちが悪い。他者が自分の中に居る気がした。
「で、お待たせしました。大事件の正体だよ」
その顔を崩さずに白川は両手を広げて秋原を案内した。資料室の奥。ほんの少しだけカーテンから漏れ出す光のある、山積みにされた資料の誰も気にしないような隅にそれはあった。
秋原は何も言わずに眉間に皺を寄せた。
この、期待しているような白川の雰囲気は大嫌いだ。と秋原は思う。白川の口角は上がっていた。
視線は、それから逸れることを拒んだ。
「白川。これ」
「猫の死体だよ。それも新しいやつ」
「どうしてこんなところに」
「さあね。もしかしたら、先生方にバラバラ殺害が大好きなやつが居るのかもよ？　怖いねぇ怖いねぇ」
わざとらしく口調を変えて白川は言う。しかし秋原にはその口調がいやらしく、楽しんでいるように思えた。
照らされた資料室に肢体をもがれた三毛猫の残骸が横たわっている。何とも奇妙な光景だった。
赤い斑点が資料に飛び散っていた。訳がわからない。秋原は吐き気こそ感じな

かったが、苛立ちを覚えた。白川ではない、誰かに。
誰がこんなことをしたのかが予想できなかった。想像力を働かせようとしたが、そんな余裕は秋原には無かった。現状をひたすら分析する。分析をして、どうしてこのようなことになってしまったのだろうか。それだけを考えようとする。
白川はゆっくりとその場にしゃがみ、残骸に触れた。呆気なく毛が抜けては白川の手に絡み付く。それをはたき落とすと、彼は丁寧に残骸を赤い斑点のある資料で包んでいった。
秋原はただその一部始終を傍観していた。染めきれていない黒髪が目立つ白川の後ろ姿は何も語ろうとはしていなかった。
切り離された前足を元あったであろう場所の近くへ置く。次は後ろ足。頭と胴体は辛うじて繋がっていた。ただし、尻尾は見つからない。尻尾だけが行方不明だった。
「もしかして犯人は尻尾フェチだったりして」
「尻尾？」
「尻尾だけが重要で、他は要らないから切り落としちゃったんじゃないかなぁ」
ぼんやりと白川は呟いた。確かにその節はあり得る、と秋原も共感した。
「あ、でもそうしたら足を切り落とす意味はないよね」
「そうだな。バラバラ好きだろ、多分」
切り落とされてしまった足が四本。赤い斑点。
もしかしたら。淡い期待で資料室を秋原は探したが見つからなかった。彼が尻尾を探す姿を見て白川は苦笑した。一生懸命な秋原は表情こそはいつもと変わらなかったが、手を動かす速さに表れていた。
せめてフォローを、と白川は秋原に言った。
「別に見つからなくてもいいんだよ。見つからない方がきっといい」
その白川の言葉が、秋原には新鮮かつ残酷なものに聴こえた。
尻尾を探すのを諦めて秋原は白川の隣に座る。胡坐をかいている白川は、赤い斑点がついてしまった資料をかき集めていた。
尻尾以外の揃ったものを資料でくるむ。資料の一部が無くなっていることに先生が気づいたらどうすればいいのか、等ということは二人とも考えなかった。
白川は手先が器用だった。プレゼント用のラッピングのようにそれをくるむ。くるまれたものは、冷たかった。
「これ、猫？」
「猫だった。かなぁ」
「過去形なのは可哀想だろ」
「意外だなぁ。秋原から可哀想って言葉が出てきたよ」
まるで自分が外道と思われていたような言い方に秋原は腹をたてた。何か言い返してやろうと思ったが言葉が上手く見つからない。
「まだ外道にはならないっての」
これが秋原にとって精一杯の言葉だった。白川はそれを聞いて、首を傾げた。
そして秋原に対して
「ならない。じゃなくて、なれないよ、きっと。秋原だから」

と言った。白川の口調はどこか達観しているように感じた。くるまれたそれを持ち上げ、ぼんやりと眺めながらの台詞だった。未来を誰かに予測されることが秋原は嫌だった。何かまた言い返してやろうと秋原は模索する。

「じゃあ白川は外道になるのか。楽しみだな」

勝てた。秋原は直感した。心の中でガッツポーズをする。次に白川がどんな表情で、どんな言葉を口にするのかが待ち遠しかった。

白川は秋原に言われた瞬間、咄嗟に口を開こうとした。が、すぐにその口を閉じる。どうしたのだろうと秋原が白川の顔を覗き込もうとすると、白川の手にあったくるまれたものが差し出された。

彼の表情は笑っていた。秋原は血の気が引いていくのを感じた。恐怖を感じたわけでもない。どういうことか、白川がいつものように笑っている。こんな冷たいものを片手に持ちながら、何事も無かったかのように。にこり、と。

そして秋原は感じた。白川は、思っている以上の奴だと。

「そうやって楽しみにしててよ。ゲームみたいにさ」

白川からくるまれた猫だったものを秋原は受け取った。他愛のない会話に、何の接点もない重さがのし掛かる。が、意外にも軽かった。軽すぎるかもしれない。尻尾の重さは大きなものだった。

秋原はそれをさらにもう一枚適当な紙で包んだ。何も書かれていない白紙の紙だ。器用に紙を折り、包んでいく。他人が見ればただの白い小包にそれはなった。小さな拍手が資料室に響く。

「すごい。カモフラージュは完璧だ」

「カモフラージュって言ってもだな。どうするつもりだよ」

「血の付着した資料は全部使ったし、もう毛も何もこの資料室にあった証拠は、無い。あってもゴミとか、そんな風に扱われると思う」

「証拠隠滅だな」

白川が頷いた。

「お前が第一発見者だったの？」

「多分ね。先生が見つけたらすぐに片付けるだろうし、生徒が後々嗅ぎ付けてどっちにしろ、噂になってただろうね」

答える様子から、元から白川は誰に伝える気もなかったようだった。秋原の手にある包みをそっと白川は撫でる。

明るく照らされた電球があったとしても、二人の心は暗いままだった。じわじわと足の方から喰われている気分になっている気がした。気持ちが悪い。

「……で、何がしたいんだ」

今にも走り出したい気持ちを抑えつけて秋原は言う。もう右足が食切られてしまったような気がする。むず痒い。

包みは重さを増さずに、秋原に冷たさを教えていた。一刻も早く、この包みを秋原は手放したい気持ちにもなった。自分が持つには軽すぎて、誰かに教えるには重すぎる内容量。

そんな秋原の心情を知るはずもなく、白川は一度目を瞑った。「寝やしないだろうな」と秋原が言うと、「こんなところで寝たら、絶対悪夢しか見れないよ」と返した。

白川は目を瞑ったまま提案した。
「……弔おうよ。弔ってやらなきゃ」
とても小さな声で白川は言う。視線は確かに秋原を捕らえて離すことはなかったが、その声だけは一直線に秋原の耳に届くことは無かった。
秋原はもう一度包みを見た。どこから見ても白い紙に包まれた何かだ。ただし何かでしかない。中身を知っているのは、秋原と白川の二人だけであって、その本当の重さを他人は知らないのだ。そしてこれから先も、二人しか真実を知らない。知ることも無い。あってはならない。
包みに視線を落としたまま秋原は頷いた。次に聞こえたのはまたしても白川の小さい「ありがとう」の声だった。
二人は静かに資料室から出た。来た道を言葉も交わさずに歩く。包みを持っている秋原が先頭に立つ。今の白川の表情を見る勇気が彼には無かった。
教室に戻ると吹奏楽部員が集まっていた。どうやらミーティングの最中だったようだが、運良く二人の鞄は廊下に除けられていた。秋原が「鞄に入れるか」と提案したが白川はそれを嫌がった。「鞄に入れるなら、持つよ」と、白川は声量の小さいまま、強く言う。重さは白川へと渡る。
ただ、弔うにしろ問題があった。校門を出て二人は悩んだ。どこで弔ってやるのか。墓を作ってやりたいが埋める場所もない。それほど大きいわけでもないが、埋められるような場所が学校付近には存在しなかった。
「困ったな。ここまで連れ出してやったのに」
「考えてなかったのかよ」
「うん。とにかく連れ出してやりたかったんだ」
白川らしい考え方だと思った。考えるより先に行動するタイプなのだろう。やはりこの考え方も笑い方と同じで秋原は気に入らなかった。
白い包みは白川の手に動くことなく存在していた。動いてくれたら、いっそ楽なのに。そう思ったがそれも叶わない。
「埋められないなら火葬だな」
「どこで火葬する？」
「俺の家」
明確な意志のある声だった。白川は秋原を見る。彼は仏頂面だった。
秋原は包みを白川から奪うと歩き出した。その行動に白川は笑いたくなるのを堪えた。案外、秋原も熱い奴のように思えたのだ。
二人は足早に秋原の自宅へと向かった。包みは交代で持つことにした。向かう途中、誰も包みに目を止めるものは居なかった。
自宅に到着すると、二人は庭に向かった。家の庭は母の趣味であるガーデニングによって綺麗に整えられていた。花を燃やしてはいけない、と二人は腐葉土のある一角でそれを弔うことにした。
秋原が部屋からライターを持ってくるまでの間、白川は腐葉土に包みを置き、広げた。尻尾の無い猫だったものが確かにそこにある。三毛猫だったものの毛は先程より抜け落ちていた。抜け落ちてしまった部分から桃色の肉が見える。こいつが生きていた証だ、と白川は思った。
腐葉土の色とは違う鮮やかとは言えない色のそれは、温度だけは腐葉土と等

しかった。
「お待たせ」
「秋原遅い。早くしてあげなきゃ可哀想じゃないか」
適当に思い付いた文句を白川は口にした。秋原は一言、「悪い」と言ってライターを白川に渡した。
ぜえぜえと呼吸を整えている秋原は、相当急いでいたようだった。
ライターを受け取ると、白川はライターを猫だったものに近づけた。着火してしまおうかと考えたが、近づけたライターを腐葉土に落としてしまった。落としてしまったライターを秋原が拾おうとすると、白川がそれを制止する。
「弔った後、こいつどうなるかな」
「……そりゃ、腐葉土の肥料になるだろ」
「違うよ、秋原。こいつの話だって。こいつ、どうなるかな」
不思議なことを言い出すものだと秋原は思った。もうこの猫は死んでしまって、尻尾の無い猫だったものになっている。どうなるもこうも、このまま燃やされたら腐葉土の肥料になるとしか言えない。だのに白川は別の後があるのだと考えているのだ。
お互いに理解しあえない感性を持っているものだと秋原は思った。
死後の世界が本当にあるか、秋原は知らない。秋原の持っている答えは一つだった。
「弔われたって、こいつにはどうもこうもない。俺たちが救われるだけだ」
救いたかったのは目の前に居る三毛猫ではなく、自分達でしかない。秋原はそう言い切った。
その答えに白川は目を丸くした。少し考えて、ライターを拾い上げる。
白川は頷いた。
ライターの着火と同時に、風が吹く。三毛猫の毛が、皮膚が、炎に飲まれていく。
呆然としていた。言葉を発することもなかった。じわじわと燃えていくのを見つめていた。二人が何をせずとも、その炎は勢いを増していった。そして何も言わないうちにそれは消えていく。
炎が消えると、脱力感が秋原を襲った。それは白川も同じようで、二人は同時にその場に膝をついた。
有機物の焼けた臭いと、小さな燃えかすがそこにあった。焼けた臭いは心地よいものではなかったが、それでも二人は救われていた。
「……なぁ白川」
「……何」
「どうして、俺にこれを見せたんだ？」
数秒前までそこにあった包みを思い出しながら秋原は問いかけた。白川は視線を空に向けた。灰色の空に不釣り合いな白い雲が一つあった。なんとなくその雲に手をかざす。
口を開こうにもいつものように動きはしなかった。一度深呼吸をして、白川はまた口を開く。やっとの思いで薄く開いた口で言葉を紡ぐ。
「……どうしてだろうね」

理由なんて無かったのかもしれない。白川はそう言った。本人にも謎らしい。

――資料室を久しぶりに覗いたらあの三毛猫が居たんだ。どうにかしてあげたくて、いや、したかっただけだったけれど。そう思ったら見かけた秋原の腕を掴んで走ってたよ。それだけさ。

白川は雲が流れていくのを見た。そしてかざしていた手を下ろす。もうこの手にあの冷たさは無いが、染み付いてしまっているのだろう。十分な熱を持っているはずの手が非常に冷たく感じる。

先に立ち上がったのは白川だった。秋原は驚いた。白川のことだから、まだ座り込んで感傷に浸ると思っていたのに。

「そんなセンチメンタリストじゃないよ」

苦笑された。秋原も立ち上がろうとすると、手を差し伸べられた。掴むと、熱さを感じる。あの内容量に反した冷たさのようなものは、微塵もなかった。

「ありがとう秋原。今日は迷惑かけちゃったな」

「別にいいって。驚きはしたけど」

「あはは。ごめん」

立ち上がっても、秋原は腐葉土を見つめていた。まだそこに包まれた三毛猫が居るような気がした。白川の手を握った部分だけが熱い。

「あいつ、どんな鳴き声だったんだろうな」

「にゃーお。こんな感じ？」

「そんなに野太くはないな。絶対に」

白川の鳴き声は野太く、低いものだった。あの三毛猫が、そのような声を出すとは思えない。

秋原は白川の手にあるライターを見た。元は自分の部屋にあったただのライター。どのようにして手に入れたかさえ覚えていないライターが今、自分達にとって重要な役目を果たした。これからは大切にしなくては。

「じゃあ、帰るよ。ありがとう秋原。本当にありがとう」

「ああ」

「もう、こんなことは二度と無いとは思うけど。付き合ってくれたが秋原で良かったよ」

白川は笑った。困ったような、心の底から喜んでいるような。しかしまだ悲しんでいるような。よくわからない笑顔だった。

でも、この笑い方は好きだと秋原は思った。今までの笑顔の中で一番白川に似合って居るような気がしたのだ。

「じゃあね秋原。また明日」

「じゃあな。また明日」

二人は手を振る。白川は秋原に背を向けていた。白川の後ろ姿は、染めきれていない明るい茶髪に交じる黒髪がやはり印象的だった。先程まで汚く見えた染残しの黒髪も、今は何故か綺麗だと思う。

秋原は先程まで白川が見ていた空を見た。灰色の空に一つだけ、不釣り合いな白い雲が流れている。太陽は雲で隠れてしまっていた。

「ただいま」

ライターを取りに来た時にも言ったのだが、一応と思い言い直した。

玄関に入り靴を脱ぐ。姉は自分よりも早く帰宅していた。リビングで紅茶を飲んでいる姉は秋原を見るなり、あら、と呟く。

「どうしたの。さっきもばたばたしていたでしょう。珍しく悲しそうな顔ね」

「……猫が、居たんだ」

鞄を置き、姉に向かい合うようにして椅子に座った。そういえば白川の茶髪は姉と似ている気がする。姉には汚く感じる染残しなど全く無いけれども。

今までのいきさつをオブラートに包み秋原は話した。猫が居たこと。それを白川と一緒に連れ出したこと。最後まで見守ったこと。真実と大きく違う点を一つ挙げるとしたら、生きている設定になっていることだ。

「ねえ、その猫ってどんな鳴き声だったのかしら。えっと、みゃーお。こんな感じかしら」

姉による高めの鳴き声。その鳴き声に違和感を覚える。みゃーお。

「確かあいつは、野太い鳴き声だったよ」

どこかでみゃーお、と野太い猫の鳴き声が聞こえた。そんな気がした。

インパチェンスの箱庭

八名井明

病院はいつからここまで彩りのあるものになったのだろう。

自分が思い描く病院というものは、真っ白い、すこぶる窮屈な場所であり、例えるならば開放的な檻と言ったようなものであった。

それがどうであろう。どうやら自分の思い違いであったらしい。

檻は檻でも開放的すぎる檻だった。

白くもなかった。

主な色彩は観葉植物の緑だ。本物かどうかは近づいてみなければわからない。春先になれば花粉症を患っている人々が耳鼻科に押し掛けてくるだろうから、この観葉植物は本物ではないのだろう。県内で最も大きく名医が集結していることで有名なこの病院は、休日であっても平日であっても常に人が居る。その中にどれほどの花粉症患者が存在するのかは、わからない。だから本物の植物が病院におけないのかもしれない。

しかし、見舞いに行くときには花を持っていくものだと思ってしまい、そのつもりで花を用意してしまったのだから、どう処理するべきか。これは前にも思っていたことであるのに、うっかり忘れてしまっていた。もうこれは渡してしまおう。

私は近所の花屋で購入した桃色で統一されている花束を持ってある人の見舞いに向かった。両親も誘ったのだが、きっぱりと断られてしまった。その人は両親にも縁がある人であるのに、彼らは行くまいと決め込んだようであった。非情とは思わない。まるで冷やされた金属のような視線で両親は私を見た。病院に着く頃には花は少し萎れてしまっていた。

病院を訪れたのは平日の午後だった。人の数は休日に比べてみれば明らかに少ないのだが、それもよく比較すると、という話であってさほど差を感じなかった。

目的の病室に向かうため受付を通り、エレベーターの前に立つ。すでに病院は私の知らぬものへと変化を成し遂げていた。私が病院に色彩を感じたのはその瞬間である。病院内にある植物と人間が絵の具になっていた。カンバスは白い壁だろうか。

外来の人々の衣服など喪に伏しているわけでもないから色とりどりであるし、看護師の制服も個々によって異なっているように見えなくもない。淡い桃色と、淡い青。極めつけの絵の具は先述した植物であった。花はない。葉と幹のみがあった。その葉の緑と葉に見え隠れしている土と同化してしまいそうな幹の茶色は白い壁に映えていた。

それでもまだ足りない。

足りないのだ。鮮やかと呼ぶには暖色が足りない。冷たいと表現するにも寒色が足りないのだ。

ただ、残念ながら私は色彩感覚と言うものをよく理解していない。絵に関することに疎いのだ。だから名匠の名を挙げられても歴史的な部分しか答えることが出来ない。絵画の感想を求められようものなら、適当にその作者の歴史を織り交ぜて誤魔化すのだ。

久しぶりに病院へやってきたところで発見した色彩に想いを馳せながら私はエレベーターの到着を待った。エレベーターが自分の居る階に到着すると、私よ

りも前から待ちかまえていた先客がまず乗り込んだ。続いて私も乗り込む。小太りな男性であった。丸眼鏡をかけ、細い目でエレベーターのボタンを睨んでいる。

男性は私が目指す病室のある階のボタンを押すと、ポケットから青いタオル素材のハンカチを取り出して汗を拭いた。首を拭き、次に前髪を巻き込んで顔を拭いた。私はその動作を何となく見つめていた。私は汗をかいていなかった。まだ寒い季節だったので、着込む程だった。着込んでいるとしても汗をかくほどの運動はしていないし、私は暑がりでもなかった。それでもこの男性が汗をかいてしまっているのは、その体格故か。

エレベーターが動き出した。内部は少々蒸し暑かった。暖房も冷房も機能していない。人間の体温のみが空間を温めている。天井の隅にある鏡に目を向けると、男性も同じように鏡に視線をやった。鏡の世界で視線が合う。私よりも早く男性が照れくさそうに会釈をした。反応が遅くなったが私も会釈を返す。男性は笑うと顔にたくさんの皺が出来た。

明るげな電子音がエレベーター内部に響き、目的地に到着したことを知らせた。扉が開く。代わり映えのしない病院の壁があった。私は扉の開放ボタンを押して先に男性が出るよう勧めた。また男性が照れくさそうに笑う。本日二度目の会釈をして彼はエレベーターから出て行く。彼は右に曲がった。私はエレベーターを出て左に曲がった。曲がったところで後ろを振り返ってみると、トイレの標識があった。

目的の病人が居るのは〇一七号室であった。私と同じ目的と思われる人が幾らかこの階におり、唯一携帯電話の使用が許されているスペースで一心不乱に指を携帯電話に走らせていた。そこは病院では無かった。

私はまた別の受付で用を済ませ、面会の許可を貰った。「病室に入る際には、入り口付近にある消毒液を使用なさってください」と念を押された。はて、あの人は免疫などに関わるような病気であったか。だがここは、一応、病院なのである。言われたのならばしっかりと実行しなくては。

しばらく歩くと〇一七と書かれた扉の前に立った。〇一七の下には患者の名前が記されている。秋原澪名――あきはらみおな。間違いない。

看護師に言われたとおりに準備されてあった消毒液で手を消毒してから私は白い檻の扉を開けた。

「あら、いらっしゃい」

白い壁に白いカーテンがあり、窓の向こうには都市らしく高層ビルが並んでいる。本日は快晴であった。白い雲が散り散りに浮かんでいて、水色の空にスパッタリングを施していた。綺麗だとは特別思わなかったのだが何となく目に止まった。

白が飛び交う病室に明るい茶色を置き、病人らしく灰色で厚手のトレーナーを着ている女性はまさしく私の目的であり会いたかった人であった。

目的の女性は私に微笑む。手元にはＢ４サイズのスケッチブックがあるが白紙のままだった。ベッドに備え付けてある机には何本かの黒鉛筆と百円均一で売っているのを見かけたことがある安っぽい色鉛筆が置かれていた。

私は扉を後ろ手で閉め、ベッドの隣にある椅子に腰掛けた。今日は少々低めに

調節されているベッドで上体を起こしている彼女と視線が見事に合致する。彼女の瞳は相変わらず黒いくせに、じっと見つめると透き通っているようにも見えるような気がしてならない。見透かされる。彼女の前で嘘を吐くのは容易ではない。

「おはよう姉貴」

「おはよう、椎名。今日は早かったのね」

「朝から暇だったから」

女性――私の実の姉である秋原澪名――はまた笑った。姉のこうやって話の返答に困るとすぐに口元に手を当てて笑う癖はわかりやすすぎる。

姉は入院中である。両親にも縁のある人物であることは間違いないし、寧ろそのような言葉のみで終了させてしまうのはおかしいような関係なのだがどうしてか両親は面会を拒絶している。誘っても頑なに拒むのだ。普通、拒絶をするのは入院している側の話だろう。しかし私たちの両親は逆らしかった。

残念ながら、両親の行動にも一理あると私は思う。姉の病状が病状であるため、どうしようも無いのだ。それでも私は姉が好きであるからこうして足を頻繁に運んでいる。

姉は精神を煩っている。

どうしてそのようになったのかは家を暫く留守にしていた私にはわからない。かと言って両親も把握していなかった。私の家は、所謂芸術一家と言うやつで、両親と姉は絵の方面で活躍をしている。どうやら姉が病気だとわかったのは、両親が県外で活動をし終えてからだったらしく、いきさつも無いのだと言う。そんなことで人を入院させてもいいものなのだろうか？

一方私はそんな芸術一家に生まれた類なきリアリストであるらしかった。元の考えが異なるからなのか。絵の才能などからっきし無かった――訳ではないらしいが、人並み程度であった。人並み程度で絵を売りにして食っていけるわけもないので、私は何か絵ではない他の才能を見出そうと奮闘していたのだが上手くいかず、唯一持って生まれた勉強のよく出来る頭でどうにかのらりくらりと生きていた。人並みに、人並みに。

ひっそりと平凡であることのみが取り柄だと散々言われていた私だが、それも仕方あるまいと考えていた。だが姉は私にも何か才能があると諦めなかった優しい人であった。そして彼女が無理矢理こじつけるようにしてそうであると決めつけたのか、私に一つの才能を見出したらしい。

それは物事を完璧にそのまま表すことらしいのだ。姉の感性はいまいち理解出来ない範疇にあるので、私はあまり信じていないのだがそうであるらしい。姉曰く「リアリストだからそのまま写せる」とのことだ。姉の考えはよくわからない。納得できるようで、出来ない。

弟に才能を見出した姉は自分のように嬉しがり、次に今思い返せば悪魔のような一言を私に囁いたのだった。

――描けないのなら、書けばいいのよ。

そのときの私は自分に才能がある。やっと自分も両親や姉のようになれる、と思いこんでいたので姉の言葉を鵜呑みにした。姉の言葉に確証は無かった。才能だと何だの言われたのがきっかけで功を奏したのか。暇つぶしに書いた情景描

写が積み重なり、数日もしないうちに一本小説を書き上げては、適当な一番締め切りの近い小説賞に応募した。その結果についてはまた今度。それ以上に緊迫した話が目の前で展開されているのだから。

実際、帰宅してからは笑う話など何処にも存在しなかったわけだが。

「ねえどうしたの？　顔色が悪いわ」

「何でも無いよ。花を移し替えようか」

私の纏う雰囲気に気付いてしまった姉が言う。

「あら綺麗な花……」

「一押しって言うから買ってきた」

「椎名が選んだんじゃないのね。ちょっと残念」

「俺にはセンスが欠片も無いから選びやしないよ」

私は立ち上がって花の無い花瓶を手に取り、水分補給のために購入していたミネラルウォーターを少し注いだ。水道も一応この部屋に備えてあるのだが、花もミネラルウォーターがいいだろうとこちらを選んだ。どうせ水に代わりない。桃色の花束の形を崩さぬよう花瓶に飾ると姉は顔を綻ばせる。色彩センスの無い私には彼女の感覚など知ることは出来ないのだろうと思い、彼女にはどのようにこの花が映るのかと考えていた。

姉はニコニコと笑っていた。

穏和だ。彼女を形容するに最もふさわしい。滅多なことでは彼女は怒らない。私が彼女の部屋に忍び込んで、お小遣いを盗もうとしたときでさえ笑って私を宥めたのである。思い返すと、寛容的であると言う枠組みを超えて、あり得ないとも思う。海より広大かもしれぬ姉の心に私はなす術が無かった。飲み込まれるしかなかった。聖母か、と友人に突っ込みをされたのを思い出す。

それと同時に私は姉を理解することに苦しみを覚え始めた。彼女は私が何をしても受け入れる体制が整っていると言っても過言ではなく、それでいて自己を貫いていた。自己を発するのは大抵が芸術方面の場合でしかなかったが、それでも彼女は私にとってかなりの影響力と決定力を持ち合わせていた。

端的に言えば惚れていたのである。

彼女の芸術への熱意、感性。自分には無いものをまるで補うようにして姉は存在していた。逆に言えば、私は彼女の補いとも言えよう。

だからこそ私だけは彼女を見捨ててはいけないと思っている。父や母のように捨ててはいけない。たとえ、干渉することも、せめて観察だけは続けねばならない。

「姉貴はこの頃はどうなの」

「どうかしら。それはお仕事の話？」

「仕事の話はやめてくれよ。俺はちゃんとしているさ。締め切りだって守って、生活してる」

「いい子になったのね」

姉はぼんやりと白紙のスケッチブックを見つめながら言った。いい子と言われて悪い気分はしないが私も大人である。いちいち喜ぶような年でもなくなってしまった。

ふいに姉が肌色の色鉛筆を手に取り、スケッチブックに一本の直線を描く。私

はその様子をじっと見つめていた。何かを話せばこのような沈黙は生まれないのだろうが、私には姉に語って気分を良くさせるような話題など持っていなかった。しかも、今日に限って。今日の澁蓄はストックされていない。そこで気づいたのだが、私の世界はある意味、彼女で構成されていたのかもしれない。

「椎名はどう思うのかしら」

「何を」

「あたしが病気だってこと」

「どうだろうなぁ。俺は正常だとは思うよ」

「正常とか、そういう話じゃないのよ」

スケッチブックにもう一本肌色で直線が引かれた。繋がるわけでもなく、二本の線は平行である。

彼女の病気は精神に関するものだが、私にはどこが異常なのかがよくわかっていない。彼女は私とは異なる感覚を持っているし理解が出来ないのは確かだ。しかしそれだけで彼女が精神を患っているかと問われれば私は違うと思うのだ。加えて、彼女に常識が備わっていない訳でもない。彼女は私よりもまっとうな生活を送ってきたのだと私は考えている。

だからこそどうして姉が入院する羽目になってしまったのかがわからない。それに関しては一番理解しているであろう両親も閉口したままであり、姉自身もよく理解していないので今のところ医者しかわからない、ということになる。が、私は姉の担当医と話したことが無かった。そもそも担当医は存在するのだろうか。彼女の病気には名前があるのだろうか。

しっかりとした段階が見えない。

これは私の憶測でしかないが、両親は姉を隔離したかったのではないのだろうか。

姉は本当に、本当に少々ベクトルのずれた思考をしている。姉弟であるし長年そのことを理解しているつもりではあるが、未だに驚かされることは多々ある。両親はそんな彼女を厄介と感じ、また彼女の自分たちにはない芸術の才能に嫉妬でもして、それで病院に追いやってしまったではないか。どうやって彼女の精神が患っている、と判断させたかについては何と無く想像がついているが、確証がないので口を開けなかった。人間は裏で何を考えているかわからないし真実も本人からしか告げられない。よってその本人が多数の人間から異常をきたしていると判断されてしまえば、覆しようがなくなってしまう。それも多くの患者を救ってきた、名医の診断となれば尚更だけれども。

姉は白い箱に収納されてしまったのだ。もう二度と開くことのないように、念入りに蓋の辺りを点検してから押し入れへと追いやられてしまった。

もうきっと押し入れに入って蓋を開ける以外に彼女に会う方法は無い。

両親のことは許せない。

「違うのよ。あたしはね、椎名がどう思うのかを知りたいの」

懇願するかのように姉が言う。

私が姉に持つ感情とは、世に言えばシスターコンプレックスの部類に入るものだろう。　私は自分の姉を綺麗だと思うし、自慢すべきだとも思う。恋愛感情にも似た何かを抱いていたときもあったが、それは一瞬で引き潮のように消え

ていった。だから姉は思慕していることには代わりないが、最も近い言葉で言うならば崇拝と言えよう。だが彼女を神の如く崇め奉るつもりは無い。しかし彼女の持つ世界観に魅入られてしまった私は彼女の世界からは逃げられないのだ。思い込みにより自分が救われたのにもかかわらず、それを神の恩恵とする信者と私は同じと感じてしまう。

姉の質問には答えられなかった。沈黙は長い。姉は何も答えない私を見つめ、声には出していなかったが何かを呟いていた。もぞもぞと唇が動く。まるで子供のようだった。大きな子供がそこに居た。その何かを言って欲しい。私はどうすればいいのかわからない。

答えられないのにはもっともな理由があるからだ。今の質問で彼女は、自分が狂っているかいないかを確かめようとしたのだろう。両親は彼女を狂っているとした。が、私はそうは思わない。彼女は、見ている世界観だけが人と異なっているだけでどこもおかしな場所などありはしないのだと考えている。彼女の期待しているであろう回答を読み上げることは私には不可能だった。おかしいところなど何もないのだから堂々としていればいいものをこの姉はそうしようとはしない。黙って、周りを見ようとする。そうすることで、彼女はまた求めている人々が離れていくことを彼女は知らない。

自分でもどこか変だと薄々気づき始めてしまったのだろうか。そんなことはないのに。そうさせた人物が居るというのに。その人物さえどうにかしてしまえばどうということもないのに。

「姉貴は価値観が人と違うってだけだよ。そんなの普通にあることじゃないか」

苦し紛れの答えだ。

「それはそうだけれど。やっぱり気になるわ。誰も話してくれないのよ」

「話してくれない？」

「あたし、不甲斐無いわ。自分のこと、何も知らないんだもの」

ならば、私も同じように知らないだろう。届きそうにもない。

「医者も看護師も話してくれないってことか」

「ええ。悲しくなるわ。好きでここに居る訳じゃないのに」

突然押し入れに追いやられて誰が喜ぶと言うのだ。姉は何本か線を引いたスケッチブックを閉じ、色鉛筆をこれまた安そうな鉛筆削りで削り始めた。彼女は仮にも画家である。ならば簡単に画材は準備出来ただろうに。だがここでも、きっと両親は彼女自身だけでなく彼女を取り巻くものを全部押し入れの中に入れてしまったのだと勘付いた私は、またしても彼女にかける言葉を見失ってしまった。

彼女は二回ほど色鉛筆を回してから鉛筆削りからそれを引き抜いた。たいして削れていないように見える。そして姉の視線は私を捕えた。私も顔を背ける。床を見つめた。床は白い。

「椎名」

姉が私の名前を呼ぶ。

私は顔を上げることが出来なかった。顔を上げれば彼女と視線が交わることも、そうすることで真剣に話を聞いているように見えることも理解していたしそうするべきであるともわかっていた。が、考えているだけであった。ここで動

いてしまえば彼女の世界に引きずり込まれてしまう気がしてならなかった。
姉は好きだが。同時に、彼女の見る世界は精密で繊細であった。
私が入っていけるような場所ではない。
あくまで私は外の人物だった。
「姉貴」
「ねえ椎名」
「……ごめん。姉貴」
「どうしてなのよ……」
唇を噛みながら姉が言う。姉と同じように私も唇を噛む。
「教えてくれたっていいじゃない！」
叫んだ。必死に彼女は叫んでいた。
けれど私がどうしようもない場所に立っているから。何も出来やしない。
静まった病室に姉の荒い呼吸が響く。眩暈がしそうだった。姉を困らせた事実がそこにあった。
「ごめん」
「……ごめんなさい。いいのよ。もうそろそろ時間だものね」
何故か彼女との面会時間は三十分とされていた。深く干渉をさせないためだろうか。
彼女が視線を下ろしたのを確認してから私は顔を上げて表情を窺った。姉の表情は曇りもせず、逆に清々しく感じた。取り乱した後でも彼女はしっかりとしていた。きっぱりと彼女の感情を見極められない私は何も言わずに立ち上がる。早く帰らねばならない。
私はそのまま姉に会釈をして立ち去った。扉の前に立ち、あと一歩のところで病室から出られるところになって、思いとどまったりもしたが私は後悔することなく病室を立ち去った。がらがらと扉に備えてある車輪が回る音がざわつく病院の廊下と彼女の病室に響く。何故だか責められている気分になり、目を伏せた。
ぱたん、と呆気なく扉が閉まると私はくるりと向き直って彼女の病室を見た。無機質である。白いプレートに書かれた名前だけが彼女を表していた。秋原澪名。彼女の名前だ。その彼女の名前さえも、親と縁を事実上切られてしまっている彼女には何の意味も無く、秋原澪名はただの澪名となっているのか、それとも親につけられた唯一の名前も同時に奪われて名無しの人間となっているのだろうか。
では私はどうだろう。
私は相も変わらずに秋原椎名である。
親にどうしてか気に入られた。その理由は私が彼等の活躍する方面——美術において勝っていないからである。
空気を取り込む。すっとした感覚が生まれる。それだけで良かった。
呼吸を終えてから私は病院から出るために歩き始めた。またあのエレベーターに乗らねばならない。どうしてか私はエレベーター内で人に会いたくなかった。それが知人であっても他人であったとしても嫌であった。私はエレベーターに向かうと、誰も居ないことを確認してからエレベーターに乗り込み、一階のボ

タンを押してから閉じるためのボタンを連打した。が、警告音が鳴った。
私は狼狽した。見てみると扉の閉まりかけているところに手が生えていた。咄嗟に差し込まれた手だった。僅かではなく、手首までこちらに侵入している手を気味悪く思いながら、私は扉を開くためのボタンを押した。
そこには先程の小太りな男性が居た。私が姉と面会している間ずっとトイレに居たと言うのだろうか。しかしそうには見えず、彼の片手には萎れている花束があった。私たちは無言で会釈をし、男性がエレベーター内に収まったのを確認してからまたボタンを連打した。
扉が閉まる。
「また会いましたね」
エレベーターが下降しだしてから男性は私に話しかけた。彼は私がボタンを連打していたこと、それによって自分の腕が挟まれたことには触れなかった。汗ばんでいるのは変わらず、萎れかけている花束を大事そうに抱えており、それが人形を抱いて離さない子供のように見えた。
「これが気になりますか」
私が問いかけるよりも先に男性は私の視線に気づき、花束についての話をし始める。エレベーターが目的の階に着くまでにこの話は終わるだろうかと心配になった。が、私はその話におとなしく耳を傾けることにした。
――この花束は妻の病室にあったものでして。彼女にはやっぱり綺麗な花をいつまでもあげたいものなのです。それで毎日こうして花を渡しに来ている訳なのですが、今日に限っては妻の友人が花束を持ってきてくださいまして。私はこうやって元あった花を再利用しようと持って帰ろうと、そういうわけでございます。私が持って来た花は、その……。
男性の声は想像以上に柔らかった。物腰の低い印象。高慢な態度よりは良かった。私はその萎れている花束を見つめた。桃色の鮮やかな花であったことだろう。私が姉のためにと店員に勧められて買ったものよりそれはずっと立派であった。花に詳しくはないが、この花は花束には向いていない形状をしていると思った。あまり花束で見ない花であったからだ。
私はふと、姉の病室に飾った花束のことを思い出した。あの花束を彼女は気に入ってくれたのだろうか。
「その花は何と言う名前なのですか」
「インパチェンス、と言います。花束にあるような花ではありません。ですが、彼女にぴったりな花であると思いまして」
「インパチェンスですか」
「ええ。インパチェンスです。花言葉はあざやかな人」
あざやかな人。
どうしてか私は姉のことを思い出した。現在の姉はどちらかと言えば色彩を失っている。鮮やかであるかなど外から閉じ込められてしまえば、それが鮮やかであるとわかるはずもなく。ただされるがままに白い箱に入れられてしまっているから彼女の色は見えやしない。だが私の知っている秋原澪名という女性は、とても鮮やかな世界を持ち輝いていたことは間違いない。
シュレーディンガーだろうか。猫ではない。それに、そんなに難しく考える話

でもない。
そして重い揺れが起こり、エレベーターの扉が開いた。私よりも男性は早く移動し、一歩先に出た。彼が私に深々とお辞儀をしてから箱の中から出て行こうとしたのを、私は呼び止めた。呼び止めてしまった。
「あの。貴方の今日準備した花は、どうなさったのですか」
そして聞いてしまった。
「今日の花ですか。ええ。彼女は気に入ってくださいましたよ」
「ですが貴方はそれを持ってはいないじゃありませんか」
私は彼が用意した花を知りたかった。男性はふむ、と困ったような表情をしては口をもごもごと動かす。明らかに声にして発されたものでは無かった。が、私は彼の厚ぼったい唇を凝視して彼が発しようとした言葉を考える。彼は一生懸命になる私に何を思ったのか笑い掛け、出て行ってしまった。
残念だ。今回ばかりはどうしても知りたかったのに、と愚痴を心の中でこぼすとエレベーターの扉が閉まりそうになったので慌てて開放ボタンを押す。
出て行く際に彼の持っていた花束から、萎れて茶色くなりつつある花弁が一枚落ちているのに気付いた。あざやかな人の花だ。私はそれを踏まないようにしてエレベーターから出た。辺りを見渡すと三十分前と代わり映えのしない風景が広がっていた。
白い、白い世界である。

炎の町

佐藤翔

『鹿児島県南大隅町、晴れ、南南東の風、風力一』

蒸し風呂のような農協の事務室で吉見はノイズ交じりの天気予報を聞いていた。このノイズ交じりの放送は彼に五年前に退職した研究職を思い出させるものであった。

（「このノイズは何の所為だろうか。気象台のマイクが悪いのか、こちらの受信が悪いのか、それとも昨日の入道雲の生き残りの所為だろうか……。」）

「何を考えているのだ。そんなことはもうどうでもいいじゃないか。」

吉見は自己嫌悪の念からやめた前職の癖を意識的に追い払うようにラジオのスイッチを切った。

「仕事で使っているのだから、つけておいて頂戴よ。」

窓の外から同僚でかつての同級生の浅村が昔と変わらぬ口調で話しかけてきた。

「ん……すまないな。」

「にしても暑いね。冷房は……そうか、つけられないんだっけ？」

「ああ。七月からは行政からの要請で節電に協力している。なんにも都市部の電気が足りないそうだ。」

「ふうん。にしても都会の人ってどこにそんな電気を使うのかしら。」

「パソコンとかコンビニとかだな。」

「昔から思っていたけど、テレビとか、ネットとか、ＳＮＳとか興味ないのよ。そんな夜までだれかとつながっていたいのかしら？」

「どうもそうらしい。それでいて、実際に会ったりしている人は犯罪となっている。」

「会うことが出来ない人と会話しているの？どんな内容を、どんな気持ちで話しているかしら？」

吉見は昔の思い出を思い出そうとした。それは容易なことだったが、同時に彼を苦々しい思いにさせた。

「東京にいる私の友人は――友人“だった”人はこういう風に語っていたな。『現実ではいきなり見知らぬ人に声をかけたら犯罪だ。だが、ゲームの中ではそれをしなければそのゲームの世界が成立しなくなる。つまり、私はゲームから必要とされているんだ――。』とね。」

浅村は明らかに嫌悪を示した表情で、また悲しそうな表情でつぶやいた。

「変なの。まるで実社会から必要とされてないってみたいな言い方じゃない。」

「ああそうだ。彼や彼の仲間は、社会から見捨てられた人も数多くいる。もちろん中には自分から社会を捨てた人もいる。」

「自分から社会を捨てる？まるでお坊さんね。」

「だが、彼らは僧や神官とは真逆の存在だ。彼らはむしろ、ただ一日を欲望のみに従って生きている動物、といった方がいいのかもしれない。」

「その暗いネットの世界も、この大隅に来つつあるのよね。」

「止められないだろうな。」

「中学の時、音楽の授業が嫌で学校を抜け出して、あの公園で教えてもらったあの曲みたいにみんなが仲良く暮らせればいいのに。」

「ああ。そうだな。」

吉見は多彩に輝くネオンの下で働く無表情の人々を思い出しつつ再びラジオ

のスイッチを入れた。
『阿蘇気象台、午前六時をおしらせします。昨日の可部首相の動向をお伝えします。』
この時、ドアから彼らの恩師で、この近くでピーマンを作っている上坂がはいってきた。
「いやあ、今年も凶作だよ。実のつきが悪い。」
「なんだか吉見さんがきてから凶作続きじゃない？」
「私の所為ですか？！」
とばっちりのようなものをうけた吉見は持ちかけていたお茶を少しこぼしてしまった。
「そんなことを言ってはだめだよ。浅村君。吉見君が来る少し前から――そうだ。この人が首相になってから大概の年は凶作だったな。良くて平年どおりだ。」
「そうだったんですか、でもそれって平年どおりというのもなんだかおかしいような気がしますね。」
吉見は務めてこの暗い話題を明るくしようとした。しばらく三人は見つめあってから小さく「ははは」と作り笑いをした。
『可部首相は一年の折返しの月を迎えるにあたり、東京国際フォーラムにて新鋭の起業家を前に演説を行いました。
「親愛なる、そして勇敢な日本人のみなさん。私たちは、一身独立して一国独立する”の言葉を思い出す必要があります。従って誰かに頼ろうとする気持ち、甘えた感情は捨てなくてはなりません。強い日本を作るために私はあらゆる面において聖域なき規制改革をします。あらゆる抵抗勢力、既得権力、農家、労働組合……これらを粉砕します。これらにかけられている無駄な補助金はすべて廃止します。とくに農産物。これは我が国の農業は優れています。ところが怠惰な農業従事者の為に重要な国益が損なわれています。これは国家の基本定理に背いています。そのためこれらを生き返らせるため、正しめるためにあらゆる関税を撤廃します。おそらく彼らからは中傷が来るのでしょうが、全く問題なく世界で戦えると確信しています。」』
次の日、吉見は雨交じりの朝を昨日のことを思い出しつつ浅村の家に向かって歩いていた。
ただただ、上坂の、そんなことをされたら死ぬしかなくなる！とか、信じていたのにどういうことだ！という怒号だけが彼の耳で鳴り響いていた。
そんな上坂の怒りに満ちた声を来たのは中学の時に浅村と学校を抜け出した時ぐらいしかないと、彼は混乱する頭の中でさえも確信していた。
「吉見君。」
前の方から浅村が近づいてきた。
「浅村さん。今会いに行こうと思っていたんだけど。」
「じつは私も吉見君に会いに行こうって……。」
「ちょっとあの公園にでも行こうか。ここらへんはなんだか空気が重い。」
「うん。」
二人は無言で歩き続けた。その公園にたどりついて二人でブランコに座っ

てからもしばらく無言のままだった。
「お父さんが、もう駄目だって。もう路頭に迷うしかないって。農協の人もみんなそんなことを、言ってたって。上坂さんも。」
「……。」
吉見は日本の農産物の値段が高くなっているのは関税の為だということは理解していた。しかしこれほどまでにそれが現実にそれが直面しようとは思ってもみなかった。
「あなたの所為なんだからね。あなたがマイクを研究して、性能を良くしたから、あいつのクソみたいな言葉もよく聞こえるようになってしまったんだ。」
「……。」
「おかげで、いまこうして、沖縄の人も私たちを恨んでる。港にくる沖縄の人も冷たくなった。そしてなにより、私の大切な人がいま苦しんでるの！」
「……ごめん。」
「大体、あなたはいままでなにをしてきたの。ロシアとの友好が何とか～とか言って政治家になるといいっておきながら一回落選しただけで簡単に諦めてさ。結局自分の大切な人も守れてないじゃない。」
吉見には何も言い返せなかった。現に企業の要請でマイクの研究をしていたのは事実だったからだ。思えばその仕事を辞めたのもそのマイクが国民をだます道具に使われているということを再確認したからだった。だが、そんなことを口にしても眼前にある事実は覆るわけがない
「とりあえず、事務所に行こうよ。何か分かるかもしれない。」
「うん。ごめんね。あなたに起こってもしょうがないことは……。」
「いいんだよ。私には非がある。責められて当然だ。」
再び二人は歩きだした。が、そこでもまた無言だった。
「ねえ、みて。あれ。」
浅村が指さす方向に目を向けると上坂が傘もささずに山積みにされた枝のようなものを雨の中、何とか焼こうとしているのが見えた。なんだかアルコールのような匂いもしている。
「行こうか。」
二人は駆けだした。かれらもまた雨の中、傘も差さずに。
「上坂さん。」二人同時に声をかけた。
「ああ、吉見君、浅村君。」
上坂はうつろな眼を彼らに向けた。
「何を燃やしているんですか？」
「……。」
上坂はただうつろな目を彼らに向けている。
「これ浅村さんのピーマンじゃないですか！　なぜ……。」
「もうピーマンは売れんよ。浅村君。関税がなくなれば、海外から安いのがもっと入ってくる。今でさえ大量生産している国内の農場企業の格安品に負けているというのに。」
「でも焼かなくてもいいじゃないですか！」
浅村が悲鳴のような声を上げている間、吉見は予想以上の出来ごとにただ立

ちすくむことしかできていなかった。
「これもどれもみんなしているよ。あれを見てみなさい。」
上坂さんの目の方向に目をやると、彼ら二人は地面に座り込み火をただ眺めている複数の人が見えた。
「……。」
二人はただ黙ることしかできなかった。
「でもあのピーマン野郎の思いどおりにはさせん。格安で売るのは我等のプライドが許さない。」
「……。」
「もう、二人に会うこともないだろう。帰ってくれ。」
「上坂先生、もしかして……！」
「いいんだ。もう先はない。諦めるさ。」
彼ら二人は上坂の焦点を失った目を見て、何も言い返すことが出来なかった。

翌日、彼ら二人は何も言わずとも昨日の公園に集まった。
「上坂さん、今日の未明に猟銃で死んだって……。お父さんが……。もしかするとお父さんも……！」
「……もう一度、政治家になろうと思う。遅すぎるのかもしれない。でも立ち上がらないわけにはいかない。」
「吉見君……。」
「今、大切なことを思い出したよ。東京で忘れてしまった事を。ひとを愛し、他人を自分と思い、生きていかなくてはならないということをね。」
「……。」
「誰かが、今も死のうとしているのかもしれない。それを救うために立ち上がらなくてはならないんだ。私はマイクの研究者だ。そのための使い方の定理や公理に関して引けをとる者はいない。だからその仕事は決して約に立たないものではない。演説の方法やすべてを学んだつもりだ。今度は諦めずに挑戦しようと思う。」
「……。」
「だが、この運動は私一人ではできない。浅村、いや花音。私に協力してほしい。誰かを、いや、を救うために。」
「……。」
花音は黙ったままだがその目はＹＥＳと頷いていた。
二人はしばらく見つめあった後、あの歌を同時に歌いだした。

立て飢えたるものよ　今ぞ日は近し
醒めよ我が同胞　暁は来ぬ
暴虐の鎖絶つ日　旗は地に燃えて
海を隔てつ我ら　腕結びゆく
いざ戦わんいざ　最後の戦いを
嗚呼インターナショナル　我らがもの
いざ戦わんいざ　奮い立ていざ

嗚呼インターナショナル　我らがもの

彼らを力強い夏の太陽が照らし出していた

穴は二つある
～Revenge～

鏡上怜

ついこの間まであれだけ人の目を引き付けていた桜の花はもうとっくに散り、穏やかな風を受けた少し気の早い鯉のぼりが絵に描いたような青空を優雅に泳いでいる。

まだ少し肌寒い春の昼下がり、俺はどこにでもある、古びて薄暗い団地の敷地内を歩いていた。通りかかった公園というか広場では、丁度砂場の脇に置き忘れられた週刊誌の表紙を飾る若手グラビアアイドルによく似た女が、自分の子どもだろうか、ようやく歩き始めたくらいの赤ん坊と一緒に遊んでいた。その姿が微笑ましい。

葉風団地十七街区。自宅から電車を乗り継ぎ、二時間かかったこの場所が、俺の目的地だ。あいつは、ここにいる。

建物に入る直前に何の意図もなく見上げた空はマンションに遮られていた。陰になって暗い螺旋階段を一段一段、努めて落ち着いた歩調で上がっていく。大丈夫だ、あいつは俺がどういうつもりでここに来ているかなんてわかっちゃいない、じゃなきゃこうして俺を呼んだりはしないだろう。事を済ませたらすぐに出る。その為の用意も一応はできている。普段エレベーターやエスカレーターで慣れている肺と腿が文句をたれているが、心の準備を十分にしておきたかった。三階……四階……五階。ようやく着いた。

「……待ってろよ」

俺は誰にこの言葉を言ったのだろう。これから訪ねるやつだろうか、それとも、もう手の届かないところにいる人だろうか。それとも単純に、まだ残っている躊躇を呼気と一緒に吐き出すだけなのか。宅配の青年が上擦った声で部屋の中の住人と話している後ろをなるべく自然に通り過ぎて、『５５３』という赤茶けたプレートが汚らしい部屋の前に辿り着く。まさかここに、それも呼ばれて来ることがあるとはな。握った拳に思わず力が入る。そのままドアを殴りつけてやりたくなったが、目立つわけにはいかない。深呼吸する間すら恐ろしくて、あれだけ準備してきたはずなのに、ろくに気も落ち着かないままでインターホンを押すことになった。

「はーい」

その間延びした声を聞いたとき、俺の心の中にしつこく巣食っていた躊躇が一切合切吹き飛んだ。いる……。あいつの声だ。ドアの向こうから、スリッパでパタパタと走ってくる音が聞こえた。

もしかして急な用事が入ったとかで今日会えなくなったりしたら、それはそれで構わないと思っていた自分がなりを潜めていく。俺は、ここに来るべくして来た。そしてこれから、……。

タメもなく開けられたドアの内側から現れたのは、忘れもしない、内野祥子だった。最後に見たときとほとんど変わらない、緩くウェーブのかかったショートカットに、薄い化粧の中でやけにグロスの艶が目立つ顔、穏やかそうな垂れ目。学生時代から変わらず好んでいるらしいゆったりした服の上からでは、相変わらず体型はわからない。ただ一つ、決定的に以前と違っていたのはその左薬指に嵌められたプラチナの結婚指輪。こいつと最後に会ったときから確かに時間が経っている証拠だった。

「お久しぶり。わざわざ来てもらっちゃってごめんね、竹下くん。さ、入って入って」

無防備にも俺を招き入れる内野。俺も黙って後に続く。

アロマが香るリビングルームのテーブルには、中途半端に作られたビーズアクセサリーがいくつもある。中央に置かれた小さいバスケットの中に置かれているのは完成品だろうか。テーブルには四人分の椅子が用意されている。予想通りだった。

「じゃ。ちょっと飲み物持ってくるから、どこか適当に座ってて」

屈託のない――とまではいかないが影のない笑顔を残して内野は台所に引き上げる。俺はドアを正面に見られる椅子に座る。四人分のウーロン茶を持ってきた内野は俺の真正面に座った。喉が渇いていたからか、喉に流し込んだウーロン茶が不思議とうまく感じた。

今日内野が俺を呼んだのは、役員を務めている地域祭りの景品作りを手伝わせる為……ということだった。内野から簡単な指導を受けて俺も作業に入る。間を持たせようとしてどうでもいい世間話をしている内野の声を聞き流しながら、タイミングを図る。そして、内野が話を切ったときに話を切り出した。

「なぁ内野。初めて会ってから今までのこと、覚えてるか？」

「えっ？　どうしたの急に」

「俺は正直いうと覚えてない。たぶん、大して内野のことを意識に入れてなかったんだと思う。だけど今考えるは、お前のことばっかりだ」

「ふぅん……」

俺の意図することを、そして俺がここに来た目的を察したのか、少し声のトーンを変える内野。それは困ることのはずなのに、不思議と焦りはない。どうにでもなれ、というやつだろうか。

壁に掛けられた時計の針が飽きもせずに一定のリズムで動く音が、ほんの少しだけ耳に心地よくて、こいつと出会ってからの時間を遡る……。

内野と出会ったのは、大学三年で入ったゼミのコンパだった。年度が始まって二ヶ月ほど経った梅雨の晴れ間、なかなか打ち解けずにいる学生たちが親睦を深める機会を設けようとかいって、まだ若い助教授が駅前のそれなりに広いバーを貸しきって学生を数時間集めたのだ。もっとも履修している学生、少なくとも俺にとってそのコンパは、もっともらしい口実を盾に酒を飲める機会だった。俺はあらかたのゼミメンバーと挨拶程度の会話を交わし、残り少なくなった時間を気にしながら、普段なかなか飲めないような高い酒を味わっていた。そこで声をかけてきたのが内野だった。

体型よりもだいぶ緩いのだろうことが窺える服装をしたその女子大生は、酔っているのか元からなのか、妙にテンション高くどうでもいい話を振ってきた。曰く、『出身地どこ？』とか『学部何？』とか。学部なんて知ってんだろ、同じ学科のゼミなんだから。そんなことを考えながら適当に返事して適当に質問を返しているうちに意気投合して、コンパが終わった後、一度だけ近くの安ホテルで寝た。酒に酔った勢いだったことはお互いよくわかっていたから、その翌日からは特に何の抵抗もなく単なる友人知人になれた。その二ヵ月後のことだった、

とりあえず友人の一人として付き合いの続いていた内野がいわゆる「共通の知人」として彼女と、凛奈と引き合わせてくれたのは。

梶谷凛奈。内野とは高校時代からの友人だという彼女は、何というか、俺の理想像をそのまま形にしたような、じゃなければ俺の理想の方を書き換えられる感じの娘だった。俺の方は一目惚れして、凛奈の方はというと、初めのうちは「友達の知り合い」くらいの認識しか持ってくれていなかったらしく、初めの数回はかなりよそよそしい感じだった。敬語で話さなくなったのが会って数回、そこから二人だけで色々遊びに行ったりするうちにようやく付き合う段階に漕ぎ着けることができた。『しょーちゃん（凛奈は内野のことをそう読んでいた）の「お友達」なのかと思って』告白されても断るつもりだったらしいことを聞かされたときには、そのとき内野とは何の関係も無かったとはいえ、若干肝を冷やしたのを覚えている。

付き合い始めてすぐに就活が始まってなかなか会えなくなったけど、その分会える日はできるだけずっと一緒にいた。雨の日にはどっちかの家に集まって何てことのない会話をしてるだけで十分すぎるほど楽しかった。そして晴れた日にはどこかに出かけて観光したり遊んだりした。そこでわかったのは、凛奈が思った以上に格ゲー廃人だったことだろうか。俺もそれなりにやってたゲームのはずなのに、対戦してみたら手も足も出なかった。むきになって数千円を両替機とゲーム台につっこんでようやく諦めた頃には財布の中から野口がすっかり駆逐されていた——なんてことは数回どころじゃない。我ながら懲りないものだ。凛奈にも呆れられた。つーか指の動き人間じゃねぇだろ絶対。時々は喧嘩してしばらく電話すらしないなんてこともあったけど、それでも俺にとっては凛奈といられる時間は何よりも大切だった。

それなのに、いつしかそれがずっと続くと錯覚して甘えていたのかも知れない。それが自分の思い込みでしかないと気付いたのは、取り返しが付かなくなってからのことだった。

大学を卒業して、それぞれ違う会社に就職して二ヶ月半くらい経ったその日は、朝からひどい雨が降っていた。

日付も変わろうかという頃になって俺のアパートに来た凛奈は、部屋に入るなり俺に抱きついてきた。今まで一回もそんなことがなかったから、俺はそれに対してただ戸惑うことしかできなかった。

『り、凛奈っ、ちょっ、どうした!?』

何が何やらわからなかった——何もわかってなかった俺に凛奈は、

『理緒くん、……今夜ずっと一緒にいて』

と消え入りそうな声で囁きながら、俺の背中に回した腕に力を込めた。背骨が軋みそうな圧迫感に思わず声が出そうになったけど、いつもと余りに様子が違う彼女に痛みを訴えていいのかもわからなくて、抱き返した。そのとき俺は、何もわかっていなかった。それを境に凛奈が俺から離れていってしまうことも、次にその姿を見たときに俺がこの日を本気で後悔することも、事情を知ったときに何もかもをぶち壊したくなる怒りを覚えることも。

凛奈が自分の住んでいるマンションの屋上から飛び降りたのは、それから二ヵ月後の暑い夏の昼間だった。頭から真っ逆さまに落ちて即死だった。

何が彼女をそうさせたのか、二ヶ月に渡って連絡すら取り合えなかった俺にはわからなかった。葬式で顔を合わせた凛奈の親父さんに散々問い詰められて、怒鳴られて、殴られて、凛奈の友達や同僚と話して、心ここにあらずな日々が始まって、考えることはいつも最後に会ったあの雨の日のことで、どうしてあの時もっと色々聞かなかったのか、話そうと思えるだけの信頼を俺は築けていなかったのか、たとえ何か話してくれたとしても俺なんかに何かできたのか、そしてあの日何があったのか――――。そればかり考える日々が続いて、思考はただの堂々巡りになって、そんな中で口と手と足と表情筋は日常の反復を試みて、内臓器官は俺の生命活動を維持し続けた。死のうかと思っては思い直す毎日の中、何をしていいかもわからずに凛奈と歩いた道を歩いていたとき、突然何かが弾けた。

俺は、初めて知り合ったときからずっと内野が住んでいる葉風団地を訪ねて、凛奈のことについて何か知っていることはないかと尋ねた。俺が知る中で一番凛奈と仲のいいやつが内野だったし、多少は付き合いがあったから話しやすいというのもあった。

『……そっか。ウチも気になるよ、それは。でも、もうずっとここには来てなかったよ。最後に来たのって、いつだったろ。卒業してからは、たまに電話で愚痴を聞くくらいのことはあったけど会ってはなかったから……』

突然やって来た俺を驚いた顔で出迎えた内野は、申し訳なさそうにそう言った。その顔を見て、俺は少なからず後悔した。そういえば、俺なんかより凛奈との付き合いが長かったじゃないか、と。凛奈が死んだとき、俺よりもっと辛かったんじゃないか、と。そう罪悪感を覚えた俺は、そこで話を切り上げて団地を後にした。それ以来今日に至るまで、内野とは会っていない。

そして年が明けて一段と冬らしくなったその日、俺は会社の昼休みを使って凛奈と仲の良かった、佐々木と名乗る同僚に会った。

終わってしまった冬休みの面影を路肩に寄せられた雪の塊に求める学生の談笑をＢＧＭに、凛奈とその佐々木の勤めていた（といっても佐々木の方は現役なのだが）会社に程近い場所にある噴水前のベンチに並んで座った。少し緊張した様子でちらちらこっちを見ながら凛奈の話をする彼女のスーツ姿に、同じ服を着た凛奈が重なる。平静な表情を繕いながら聞く。その話は、少なくとも俺がある嘘に気付くきっかけにはなった。

そして、今日。俺は全てを、確証は無いながらも悟った気になってこの場所に――葉風団地十七街区にある内野の部屋に来ている。正面に座って軽い笑みを浮かべている内野を見つめ返す。

「……ウチはわりとはっきり覚えてるよ？　初めて会ったときのこと。あの積まんなそうな顔に、あのがっつきよう。そんなつもりはないけど、忘れようとしても無理そう」

「それはお互い様だろ。……なぁ、内野」

その先を口にしていいのか、俺は迷った。少なくとも確証のないままに口にしていい言葉だとは思えなかった。たとえそんな状態だったとしてもその先を言ってしまえば、これまで続いてきたものが壊れかねないから。今までの関係も、

必死に修繕を繰り返してきた感情の留め金も、全部台無しにしてしまいかねないことを、俺はこれから言おうとしている。目の前にいる、少なくとも今はまだ気のいい友人として見られる、内野の静かな顔を見る。

「……なぁ、内野」

「それ二回目だよ、竹下くん」

俺は、覚悟を決めた。

「去年の六月頃、凛奈はこの部屋に来てたんだよな？　何で来てないって言ったんだ？」

佐々木が教えてくれたのだ、仕事が終わって帰り支度をしているときに凛奈の携帯が鳴って、その相手を「しょーちゃん」と呼んでいたこと。そして、その日を境に様子がおかしくなったこと。そしてその日はひどい雨が朝から続いた日で、恐らくは俺が生きていた凛奈に会った最後の日であろうことを。

そしてそれから数日経った休日、俺は葉風団地を訪ねた。凛奈は部屋に来ていたのか、そうでなくても何を話したのか、それを聞きたくて部屋の前まで来たのだ。しかしたまたま内野は留守にしていた。そのときだった、コンビニ袋を左手にぶら下げた若い男が『その部屋ヤバいですよ』と話しかけてきたのは。

予感があった。隣の部屋に戻ろうとするその男を引き留めて携帯のメモリーに保存してある凛奈の写真を見せると、少し唸ってから、六月の半ばから八月の初め頃まで毎日とは言わないまでも頻繁に内野の部屋を訪ねていた若い女によく似ていると答えた。

『で、この部屋の何がどうやばいんだ？』

『この部屋に住んでる内野って人、何かの団体のお偉いさんみたいで、よく仲間うちで集まったりしてるんですよ』

『……やけに詳しいな。それに、仲間うちで集まることの何がやばいんだ』

二年くらいの付き合いがあるはずの内野だが、何かの団体に所属してるなんてことは全く知らなかった。そんな一面を聞かされたことに驚きつつ、頭の中で浮かび上がりつつある嫌な符合に向かうように、先を促す。

『そうやって集まったところに一人だけ知り合いとかを呼んで、かなり強引な勧誘をするんですよ。僕も一回それに引っかかったんです』

その男は、隣に住んでいた内野に下心込みで色々と、たとえば団地で暮らしていくうえでの心構えみたいなものを聞き、何かと世話になる流れを作っていたらしい。そんなときに内野に呼び出されて、喜び勇んで部屋に行ったところ、自分たちが入っている団体に入会するように誘われたという。

『途中でたまたま近所の人が来たとかで隙を見てどうにかなりましたけど、その直前そばにいた男の人数人がかりで押さえつけられたときは、ほんと殺されるかと思いましたよ』

それだけ言って、『もういいですか』とだけ聞いて部屋に戻って行った男の顔は、蒼白だった。

それが本当だとしたら、凛奈に何が起こっていたのかを想像するのも恐ろしい。いや、まさか……。内野が凛奈にそんなことをするなんてありえないと、そ

う思いながらも考えずにはいられない。押し留めようとしても不吉な想像が止まらない。閉まった二つのドアの前でしばらくの間立ち尽くしていた俺は、なすすべもなく、逃げるように日常の中に駆け戻った。

そして今、俺の問いに返ってきたのは気の狂いそうな沈黙だった。

「……内野」

その沈黙に、俺は期待した。あの男が単なる失礼な嘘つきで、佐々木が聞いた電話もただの世間話で、内野が黙っているのは単に俺の言ってる意味がわからないからじゃないかって。だって、内野は凛奈の親友だったんだぞ？　ついつい嫉妬しそうになるくらいに。それに葬式に来たときだってあんなに泣いてたじゃないか。その内野が、凛奈にそんな真似するわけがない。今更ながら、ここに来て、散々疑ってきた内野に期待した。信じようとした。だから、返事を促す声が強くなる。

「なぁ。……何か言えよ、内野！」

お前を疑った俺を軽蔑する言葉でいい。何か言ってくれ。怒ってくれていい。笑い飛ば……せることなら笑い飛ばしてほしい。泣かれるのは正直嫌だが、俺の不安を、自然に湧き上がるもしかしたら見当違いかも知れない怒りを、どんな言葉でもいい、どんな方法でもいい、否定しきってくれ。完膚なきまでに、徹底的に。こんな疑いを持った俺を、俺の目を覚ましてくれ。そうすれば俺はこれ以上、お前のことをこんな目で見なくて済むんだ！　頼むよ、内野……っ！！

「なぁ、内野！」

「はぁ――うるさいなぁ。わかったよ、話すから。だからそんなに凛奈凛奈って馴れ馴れしく連呼しないでくれる？　ずっと、ずっとずっとずっと、そういうの嫌だったんだよね、ほんとに」

そう言った内野の顔は、言葉ほどうんざりした風ではなく、その代わり親の仇を見るような目つきになっていた。突然の変化について行けずに困惑する俺に構わず、内野は言葉を続ける。

「うんうん、来た来た、来てくれたよ凛奈ちゃんは。ウチが呼んだらいつだって来てくれてたから。そういう人だったから。学生時代にはたぶん竹下くんよりもウチの優先順位高かったんじゃないかな。あの日だって、あんな雨の中なのに仕事が終わったらすぐに来てくれたんだよ。だから頼んでみたんだ、ウチらの会に入ってほしいって」

……急に何言ってんだ、こいつ。

「絶対幸せになれるから、って勧めたのに何回頼んでも断られちゃってさ。まぁそれはしょうがないかなって思ったから、せめて物を買ってもらおうと思って……、ほら、あそこにあるでしょ？　あの石を買ってくれるように頼んだんだけどそれも駄目だって。何でだと思う？」

……は？

『理緒くんとの結婚資金貯めてるから』だって。竹下くんに会って変わってたんだね、凛奈ちゃん。ウチより竹下くんみたいなオス猿のことを考えるようになってたんだね。正直あんたが憎くなったよ。でも、それよりも凛奈ちゃんの口からそんな言葉が出たことがショックで、思ったんだ。そんな凛奈ちゃんは一回壊

してリセットしようって。だから、一緒にいた人たちにちょっと壊すのを手伝ってもらったんだよ。竹下くんよりそういうの上手そうな人だったからさ。途中あんまり可愛く泣き叫ぶもんだから注射もしてさ。足の付け根とかに痕なかった？」

……頭がうまく回らない。こいつは、凛奈を。

……何を楽しそうな顔して話してんだ、こいつは。

本当に、凛奈にそんなことをしたのか？　こいつが？

「でもあの手の薬ってほんとよく効くよね。打ったら別人みたいになっちゃってさ。しかも、一週間会わなかったら自分から来てくれたんだよ？　まぁ、ウチってより薬目当てだったみたいだけど。まぁ、竹下くんなんかじゃ見られないような姿も見られたし、それに、そんな理由でもウチに依存してくれたから別にいいんだ。凛奈ちゃんが薬の為に何したか想像できる？　さすがにあれは引いたなぁ、だって、」

「あああああああああああああああああああっ！！！」

何を考えていたかなんて、わからない。ただ胸の奥が焼けるように痛くて、喉が熱くてひくついて、体の中にドロドロの鉄を流し込まれて空気循環が止まったみたいで、とにかく息苦しかった。破裂しそうに記憶と感情が溢れて、行き場もなく俺を掻き乱していく。待ち合わせ場所に先に着いてヘッドフォンの音漏れに気付かずにアイドル曲を聴いていた楽しげな後ろ姿が、ホワイトタイガーが名物な動物園でしきりにキンシコウを見たがっていた姿が、自信満々に趣味の悪いキャラクターストラップを二つ買ってきたときのドヤ顔が、さも簡単そうに見せてくれた人間業じゃない指捌きが、リクルートスーツを着たときに初めてちゃんと見たうなじが、自作のＤＴＭを初めて披露してくれたときの緊張した顔が、何気ない会話で楽しげに笑っていた姿が、映画のワンカットのように浮かんでは消えていく。凛奈が死んでからたぶん初めて、今更になって、止まらないくらいの涙が流れた。

普段のすまし顔が好きだった。たまに見せる、喜んだり驚いたり焦ったり照れたりする表情が、風に吹かれて柔らかくなびく髪が、大人しそうに見えて実はかなり強かな性格が、何かを頼むときに見せる計算しつくされた上目遣いが、たまに俺の存在を忘れてるんじゃないかと不安になるくらい趣味にのめり込むくせに俺がそうなりそうだと拗ねる理不尽さが、長所らしいところならもちろん、他のやつなら短所になりそうな部分も全部長所に思えるほど、俺は凛奈に心底惚れぬいていた。これからも、きっとそうだったろう。

もう凛奈は、彼女と関わったことのある誰かの記憶にしかいない。

……何故？　それは、俺の下で倒れてるやつが凛奈を追い詰めたからだ。

フローリングの床に押し倒された状態で俺を見つめ返す内野の顔も、重力に従って服が背中の方に流れてわかるようになった相変わらず形のいい肢体も、そしてこいつが凛奈にしたようにその心も命もぶっ壊してやりたかった。こいつが存在していた事実も、痕跡も、空間も、こいつにまつわる全てが憎い。両手が別の生き物みたいに内野の白い首に回る。

「凛奈には、……っ、何で凛奈にやりやがった！」

「だって、そ、すれば、あの薬なら、凛奈ちゃんだって、ウチ、を、求め、」

その声が耳障りで、左手を首から離して口を塞ぐ。
もがいて俺の下から逃れようとする姿が、地上に投げ出されてのた打ち回る鯉みたいで見苦しい。更に動きを封じる為に四つん這いだった腰を内野の上に下ろす。……凛奈も、こんな風に体の自由を奪われたのか。こんな風に叫んだのか。だがそれでも、一番信頼していた親友であるはずのこいつは凛奈を逃がさず玩具にした。首を潰す右腕に力が籠もる。左手で塞いだ口は内野の涎と唾で生温く濡れて、いっそのこと切り落としてしまいたいような嫌悪感に襲われる。
「――ぅ、ふ、くっ、」
「……黙れよ」
何かを言おうとした舌が手に当たる。気持ち悪い。右腕に体重を乗せる。腕を引き剥がそうとする両手の爪が食い込む。割と痛い。くそっ、先に両腕折っとけばよかった。やむなく左手を口から外して手を剥がす。……、どうやら口からはもう空気を吐き出すことくらいしかできないらしい。安心した俺は、脈を止めてやろうと思って剥がした両手首を掴む。明らかに普通ではない脈拍が指に伝わってくる。さっさと止まれよ気持ち悪い。そう念じながら右腕をより深く落としたとき、あることが気にかかって力を緩めた。
「――――っ、こほ、かはっ、」
か細くなった声で咳き込む内野の両手を押さえて、尋ねる。
「凛奈の葬式に来たときに、お前、随分泣いてたよな。あれは演技だったのか」
それは単なる確認事項だった。こいつを完全に殺しきる前に、未練になりそうなことを無くしておきたかった。腐ってもこいつは凛奈の友達だったのか、それともそうでないのか。それを聞いたら心置きなく殺すつもりだった。長く絞めすぎたのか、内野はしばらくひゅー、ひゅー、と掠れた息を吐くことしかできないみたいだったが、回復を待っているのも煩わしくて「さっさと言わないと殺す」と言ってみた。もちろん言ったら殺さないとは言わない。怯えた顔をして口を動かし、耳を口元に近づけてやっと聞こえるくらいの声で、
「そ……んなわけ、ない、でしょ。あんたに奪われたまんまで、凛奈ちゃんを失ったんだから……」と悔しげに言った。
悔しい……、と掠れた声で呟く内野の目は恐らくここにある何も見ていなかった。じゃあ何も見ないまま死ね。首を絞め直そうとして正面に見たその虚ろな目がどこか恐ろしくて、ただ呟くしかできないはずなのに、俺を一瞬躊躇させる凄みがそのときの内野にはあった。
そうやってできた隙は小さくなかった。急に起き上がってきた内野に胸を強く押されたときに反応できなかった。背中を打ち、一瞬息が止まる。
「いいよね、竹下くんは」
さっきとまるっきり逆の体勢になった。仰向けに俺の上に馬乗りになった内野が、俺の耳元に口を寄せて囁く。まだ赤黒い顔と掠れた声は、とても学生時代美人で通っていた内野とは思えない。凛奈にせがまれて買った何かの童話本の挿絵に出て来た、井戸の底に潜んで雪を降らせる老婆みたいだった。その姿が恐ろしくて逸らそうとした顔を両手で掴まれて、血生臭い息が頬にかかる。
「だって、あんなに凛奈ちゃんに、思われて、さ……。そんな幸せなことって……、きっと、ないよ?」

涙声で同じような言葉を続ける内野。うるさい、と言おうとした口は恐怖で動かない。

殺されるのか、俺は？　そう考えた瞬間、俺は全てを忘れた。ただ本能のままにもがいた。凛奈のことも、凛奈の仇が目の前にいることも忘れて、必死に体をよじらせて、逃げようとした。内野の軽い体は、あっさりと俺の上から落ちた。立ち上がった瞬間、気力が萎えた。もうこいつを殺す気力がなかった。それに気付いたのは、内野の方に歩み寄ったときだった。とどめをさす為ではなく、倒れたまま動けないでいる内野を助け起こす為だった。

何やってんだ俺。違う、俺はそんなんじゃない。絶対に、まだ、俺はこいつを殺したい。そのはずなのに。くそ、くそくそくそっ！

掴んだ腕をできるだけ乱暴に振り解く。必死に気力を振り絞ってやっとできたのは、「覚えとけよ内野、この先お前に何かあったらそれは俺の仕業だからな」という不様を十乗した分には惨めな捨て台詞を吐くことだけだった。正常な呼吸を取り戻したばかりの荒い息遣いを聞きながら、逃げるように部屋を後にした。部屋を出たときに見た空々しい晴天が自己嫌悪を煽って不愉快だった。

こうして、俺の中途半端な復讐は惨めな終わりを遂げたのだった――。

窓の外から飛び込む電車の音に叩き起こされる。まだ八時半前だが、寝直すのも無理だろう。前の部屋を引き払ってここに越して来てから二ヶ月近く経つけど、まだこの騒音と振動には慣れることはできない。夏特有の蒸し暑さに息が詰まりそうだ。肌着が汗で濡れて肌にまとわり付く感触が気持ち悪い。硬いベッドから見上げた空は目に毒なくらい眩しい青で、遠くの方にはグラデーションをまるで無視した白い積乱雲がそびえ立っていた。

……八月下旬の日曜日。凛奈が死んでから一年経った。もう一年なのか、まだ一年なのか……。どっちとも整理が付いていない。きっとこの一年で俺が何の決着もつけられていないからだろう。四ヶ月前に会った内野に対しても、俺は何もできずにただ逃げ帰っただけだった。何もできていない。何もできていないまま俺は、何も変わらない日常にのうのうと戻っていた。

いや、正確には変わったところもある。内野のマンションに行った日から妙に気分が落ち着かない。もちろんそれは仕事にも支障をきたしている。辛うじて業績に響かずに済んでいるが、苛つくことが多くなったせいで人間関係の方は正直どうしようもなくなりつつある。入社当初からちょくちょく飲みに連れて行ってくれていた先輩からも誘われなくなった。入ってきて一ヶ月の間にわりと仲良くなった新入社員からも距離を置かれるようになった。もう会社で俺と話すのは、同じ大学出身の同期一人だけだ。もちろん俺だって「こんなんじゃいけない」という意識はある。だが、自分を抑え込みながら会社にいるのは予想以上に疲れることで、そんな俺にとって休日は天恵と言っていい。

伸びをすると背骨の方からごぎゅっ、と怪しい音がするが、別に折れるなら折れても構わない。冷蔵庫を漁る。近所のディスカウントストアで買った薄っぺらい食パンに納豆一パックと適当な量の青海苔をかけて温めただけの朝食を二、三枚口に入れて水で喉に流し込む。着替えてから洗面所に向かう。安価に目が眩

んで買った歯磨き粉の不味さに頭が覚醒したところで、携帯の不在着信に気付く。履歴には、最近やりとりが多くなっている佐々木の名前がいくつか並んでいる。

佐々木あかね。今年初めに訪ねた凛奈の同僚だ。内野が凛奈を呼んだあの電話について聞いたときに「他に何か思い出したら」ということで連絡先を交換して以来、わりと頻繁に電話でやりとりしていて、何度か会ってもいる。初めて会ったときは凛奈の姿が重なって本人に対しては目も暮れていなかったが、何度か会ううちに佐々木のことが少しずつわかってきた。

佐々木は、特に飾った表現を思いつかないので率直に言えばかなり美人だ。その上性格もいい。すぐに打ち解けられる気安さがある。ついでに選ぶものの趣味もいい。正直、何でこんな女が凛奈と仲良くしてくれていたんだろう、と何度も不思議に思ったものだった。

電話をかけてみたら佐々木はすぐに出た。こんな朝っぱらからよくそんな元気な声が出せるな。「もしもし」

『おはようございます、竹下さん。今日も暇ですか？』

「今日『も』っていうのに相当嫌な感じが籠もってるから暇じゃない」

『せっかくの天気ですから、一緒に出かけません？』

「すっげー元気だな、佐々木って」

盆休みにも散々二人で出かけたと思うんだが。意外にもこの近辺は行き尽くしている俺としては、出かける度に凛奈のことを思い出してしょうがなかったが、その思いで自体は幸せな頃のものだったし、凛奈のことを思い出せることは今の俺にとっては数少ない救いでもあった。まだ過去になら幸福を見つけられる。それが俺の生きる原動力になっていたように思う。そういう意味では、いやそういう意味でも、佐々木と出かけるのは悪くないことだった。

ただ……、一日を通して体が持たないという難点がある。佐々木の求めるままに動いていると最後の方には体力が抜け落ちていくのを感じるし、それが数日続くとリアルに精根尽き果てる。本当に同い年なんだろうか、と疑いたくなる。何の差があるんだ、一体。

「俺はどうやら長くないみたいでな、佐々木の若さには付いていけそうにない」

『竹下さんだって若いし、普通に元気じゃないですか。しょうがないですね、これからそっち行きますから。それでいいでしょ？』

拒否権もないくせに。そうは言わずに返事しておく。そういえば、凛奈と付き合う前ってこういう感じの温度差の中で会話してた気がする。今の佐々木みたいなテンションで話す俺に対して、どこか鈍い反応をする凛奈。だけど会話を拒まれていないというのを盾に、それでも十分過ぎるほどガチガチに緊張しながら話をしていたのは出会ったばかりの頃だった。付き合い始めてからも、さすがに部屋に行くとかいうときには少しばかり緊張して、だけど部屋に入って凛奈と話とかゲームとかしてるうちに段々いつもの調子を取り戻して。

……あぁ、駄目だ。やっぱ駄目だった。さっきは思い出せることは救いだ、なんて思ったのに、凛奈が隣にいてくれた日々を思い出すのは死にたくなるほど辛かった。凛奈が内野の手にかかったとき傍にいられなかったこと。追い詰められていくのを助けられなかったこと。自殺を止められなかったこと。そして内野

に対して何もできず逃げ帰るだけだったこと。そういう目を背けたいことも一緒に思い出すから。もう隣に凛奈がいないという事実を受け止めなければならなくなるから。未練がましいのだろうか。それは俺自身にもわからないし、きっと誰の答えも求めていない。むしろ答えようとしたおせっかい者を俺は確実に疎むに違いない……。

「竹下さん、起きないとイタズラしちゃいますよ？」

頭上からの声で、自分が寝ていたことに気付く。起床時特有の微妙に霞んだ視界の彼方に、本当に何かやりそうなにやけ顔で俺を見下ろしている佐々木が見えた。上体を起こす俺を見て残念そうな顔を作る彼女に気の利いた反応を返せるほど頭がはっきりしていないから、本音がそのまま言葉になる。

「今日は持ってきたんだろうな、全部」

「開口一番それですか。……けっこう傷付きますよ、そういうの」

佐々木の人を食ったような笑顔がなくなって真顔になったところで、まだまだ油断はできない。

俺がこうして、知り合いでも何でもなかった佐々木と会い続けているのには、ある厄介な理由がある。下手をすれば致命的な理由だ。

佐々木は、俺が内野を殺そうとした瞬間の写真を持っているらしい。

らしいと曖昧に言っているのは、そんな風に脅しているだけで佐々木がその写真を見せたことは一回もないからだ。もしかしたら佐々木が何かいい加減なことを言って俺をどうにかしようとしているのかも知れない（そっちの方が危うい気もするが）とも思ったが、内野を殺そうとしたことを知っているのは確からしいから、強ち嘘だと言うこともできない。

ゴールデンウィークに呼び出されてそのことを聞かされた俺は、佐々木の望みを聞いた。俺にできることなら何でもしようと思った。何をしてでも、少なくとも内野が何ともなく平穏無事に日常を送っているうちに捕まったりするのを避けるつもりだった。そんな俺に対して、佐々木は言った。

『じゃあ、私と二人で出かけて下さい。そのときに全部お渡ししますから』

その言葉を信じるしか、そのときの俺には選択肢がなかった。

しかしその後、「忘れた」とか「間違えた」とか、挙句の果てには「お盆休み中だから」なんて訳のわからない理由を持ち出して、渡そうとしない。それか渋々渡されたものに俺が内野を殺そうとした証拠のようなものはなかった。そんなことがずっと続いて、今に至る。今、俺は佐々木のことを内心で恐れている。佐々木は、恐ろしいやつだ。何なら鬱血した顔で俺の上にのしかかってきた内野よりもある意味で恐ろしい。憎悪と恐怖は別のベクトル上にあると実感せざるをえない。

特に脅迫の知識のない俺だが、こういうことをするからには何か実利的な要求があるものだろう。しかし佐々木はいつまで経っても「また会ってくれますか。そのとき渡しますから」と言うこと以上の何もしない。目的が、一向に見えてこない。それが何より怖かった。

そんな感情の中で続いているこの関係は、まだ終わる気配を見せない。そのぬ

るま湯みたいな中で目的を忘れまいとしているつもりでも、いつの間にか佐々木がデータを持ってこないのが当たり前になってきている自分に気付いて自己嫌悪に陥るときがある。確かに佐々木は一緒にいて普通に楽しいやつだ、だけどそこで落ち着いてどうする？　俺には目的があるだろうが。向こうの目的はさっぱりわからないにしても、こっちの目的まで見失ったらしょうがないだろうが。

今回はＵＳＢメモリーを受け取る。最初はカメラを受け取ったが、その中には佐々木のいう証拠――俺が内野を絞め殺そうとした瞬間の写真や映像は入っていなかった。次の使い捨てカメラにも、佐々木の家に行ったときに差し出されたフォトアルバムにも、佐々木の家に泊まった夜に盗み見た自室にも、『パソコンに入れちゃったのかも』ということで持ってくるようになったＵＳＢにも、今のところ俺が内野を殺そうとした証拠は入っていない。

本当に、佐々木はまだそれを手元に残しているのだろうか。もしかしたらもう誰かに売り飛ばしているのではないか。腹の中ではそんな風に絶えず疑っているくせに、表では佐々木の軽口に笑って応えている自分に若干の嫌気が差してきた頃、インターホンが鳴った。出てみると、ドアの向こうには真新しいスーツを着た知らない男が立っていた。

「竹下理緒さん、ですか？」

三十歳を少し過ぎたくらいのその男は、きっと外回りで培ってきたのだろう不自然にならない程度のにこやかな表情でそう聞いてきた。そのくせ口調はかなり確信を持っているようで、俺は無駄な抵抗を試みようとはせずに正直に頷いておいた。すると、「ここではちょっと……」と言いながら、半ば強引に部屋の中に入ってきた。

「ちょっ、あんた何なんだよ！」

「外ではしにくい話なんですよ」

その言葉で、俺は覚悟した。

あぁそうか。こいつは俺が内野を殺そうとしたことを知っている。もしくは誰かから――たぶん佐々木あたりから聞いている。そして自分にとって最も都合のいいタイミングで俺を強請りに来たんだ。もしかしたら美人局も兼ねてるかも知れない。搾れるだけ搾ろうって腹か。ところが、その男は佐々木には目も暮れずにいきなり頭を下げて言った。

「お願いです。これ以上妻を苦しめないでやって下さい」

重く、深々と土下座する男の言っている意味がさっぱりわからなかった。えっと、妻？　苦しめる？　何言ってんだこの人。俺とこの男は初対面で、つまりそんなやつの嫁さんなんて苦しめるどころか知るわけがない。そもそも、そんな人聞きの悪いことを言われるいわれはない。

「な、なぁ。それって人違いじゃねぇか？　俺はあんたの奥さんなんて、」

「何言ってるんだ！　君じゃないのか、最近祥子の周りをうろついて彼女を怖がらせているのはっ」

……しょうこ？　祥子。忘れがたいその名前を聞いて、全てに合点がいく。

「あんた、内野の旦那か？」

だったら冗談じゃない。逆だ。俺があいつに苦しめられてきたんだ。大切なも

のを全て台無しにされて、それ以来ずっと自己嫌悪と憎悪の中で生きているこの苦しみが、あんたにわかるのか!?　……怒鳴りたいのを堪える。怒りをぶつけても仕方がないと必死に思い直して、テーブルに座るように促す。暑い時期にわざわざ訪ねて来た人間に対するもてなしの精神が無意識に刷り込まれていたのと、俺自身も喉が渇いていたのが相まって、冷蔵庫から飲み物を持って来ようと思ったのだ。

「わー、いつ来ても竹下さんちって烏龍茶だらけですね」

「前に信じられないくらいうまいのを飲んだことがあるんだ。それ以来探しても全然見つからないんだけどな」

それが内野の家で出されたものだと思うと気分が悪くなるが、それでもあのウーロン茶が飲みたくて堪らない。なかなか飲めないと思うと尚のこと飲みたくなる。たまにあのウーロン茶を飲めるなら何をしたっていいと思っていることに気付いて恐ろしくなる。それがあいつの家にあると思うと気に食わない。

内野の旦那は、佐々木とウーロン茶について話している俺に焦れたのだろう、苛ついたように咳払いをして、視線を忙しなく動かしている。佐々木と目が合ったときに気まずそうに目を逸らしてから、口を開いた。

「祥子が……妻が、最近言うんです。このところずっと誰かに見張られていると。私自身は見たことがないんですが……」

声には、腹立たしいほどの疑念が込められていた。

それはとんでもない誤解だった。凛奈の自殺以降俺が内野と会ったのは、一回目に行って騙されたときと、今年の春に行ったときだけだ。あの失敗以来どうにかしてあいつを殺してやりたいと思って何の得もない妄想をする頭は回っても、それを実行する為に足を動かしたことはこの四ヶ月間一回もない。だから、内野を見張っている誰かがいるとしてもそれは俺じゃない。

もちろん、そんな説明をするわけにはいかないので、とにかく葉風団地には近づいてないということを色々――九割以上の嘘を交えて――説明した。こうして自分の感情を抑えながら嘘を吐き続けることができるようになっていた。佐々木と過ごした日々の賜物だろうか。嬉しくも何ともない。

さっきも言っていたように、内野の旦那本人は俺の姿を見ていない。ゴールデンウィーク前あたりから、何か失敗したりするとそれに対して「どこかに俺が潜んで、先回りして嫌がらせをしている」という妄想に取り付かれているらしい。探してもそれらしき人影はなくて初めのうちはあまり取り合っていなかった旦那も、エスカレートしていく内野の怯え様に不安を覚え、こうして俺の部屋を訪ねてきたらしい。

しばらく話した後、やはり自分自身は見ていないというのが大きいのか、俺が葉風団地には来ていないということに対して納得したらしい内野の旦那は、何度か頭を下げながら帰っていった。俺は、彼を見送りながら、あることを考えていた。

事の次第によっては、今の内野の状態には俺が関係あるのかも知れない。

思い出すのは、ゴールデンウィーク前の少し肌寒い昼下がり。あの日にあった出来事が、生々しくよみがえってくる。手に沁みこむ頚動脈の感触、左手の平を汚す唾液の温度、鬱血した顔、そして――――。

『覚えとけよ内野、この先お前に何かあったらそれは俺の仕業だからな』
無様この上ない捨て台詞。気力を失くした自分を認めたくないだけの悪足掻き。自己欺瞞の塊。誰一人騙せない嘘。そんなものにも、思わぬ効果があったということなのか。どういうわけか知らないが、俺のあの言葉は死に瀕した内野の精神に深く染み入ったらしい。そして数ヶ月に渡って内野に影響を及ぼしている。そうわかった瞬間、胸のどこかが軽くなるのを感じた。こんなに気分がいいのは久しぶりだった。
「竹下さんが本気でにやけるとそんなに気持ち悪いんですね。新しい一面を発見しましたよ。嫌な気分になります」
「そんなに酷い顔してるのか、俺」
「鏡見ます？」
そう見せられた竹下理緒二十四歳の顔は、何のことはない、普通に何かいいことでもあったのかなという、どこにでもあるにやけ顔だった。
「そういう顔って私の前じゃしないじゃないですか。一緒にいるよりも人の不幸を聞いてる方が嬉しいみたいな感じですね」
「そ、そんなことはない……、ないさ」
「ないのが普通ですから。しかもどもってるし」
恨みがましく言い放つ佐々木に、心のない笑いで返事をする。慣れてきたといっても、まだまだ俺も嘘を吐くのが上手くはないらしい。佐々木の声を聞き流しながら見上げた空はどこまで見てもただ芸のない青と白で、いつまでもこの安穏で無為な日々が続くことを改めて宣告された気分になった。
せっかく上がっていた気分に水を注された俺は腹立ち紛れに、思った。
もしもう一人の俺なんてものが本当にいるなら、凛奈の死に関わったやつを皆殺しにでもしてくれないか、と。

数ヶ月経ったある日、俺は葉風団地にある内野の部屋を訪ねた。
呼ばれたわけではない、俺の方から行ってみようと思ったのだ。夏に聞いた惨めな内野の姿を一目見ておこうと思いついたのだ。約七ヶ月ぶりに会った内野は、やつれるというような見た目の変化はなかったものの、無防備にドアを開けて俺を見た瞬間の表情は、それだけで満足できそうな代物だった。
「内野、久しぶり」
自然と口角が持ち上がるのを感じながら、まるで演じているみたいに穏やかな口調で声をかける。それに対する内野の返事は、震える息遣いで空気を吸い込む音だった。次の行動が想像できたから、その口を塞ぐ。
「駄目だろ、内野。大声なんて出したら近所迷惑になっちまうじゃないか」
まさか内野のこんな顔を見られるなんて思ってなかった。顔だけ見て帰ろうと思っていたはずなのに、それまで感じたことのなかった思いが急に首をもたげてくる。まだ帰りたくない、あと少しだけここにいたい、もう少しこの内野を見ていたい、もっとこいつを怯えさせたい。突如芽生えた欲望の命じるままに、俺は強引に内野の部屋に入る。閉じようとしたドアに足を挟まれて痛むけど、少しも気にならない。目に涙を溜めて命乞いをする内野は、今まで見た中で一番綺

麗に見えた。
そのまましばらく部屋にいただろうか。啜り泣きながら向こうの方で横になっている内野は放っておいて、俺はぼんやりとテレビを見ていた。どうやら今日は今年初めての雪が降るらしい。しかもけっこう勢いよく降るとかで、夕方くらいには道路も雪に覆われるらしい。……そろそろ帰るか。電車が止まっても困るし。椅子から立ち上がる。やっぱこのウーロン茶うまいわ。
「じゃあな、内野」
返事は返ってこない。別に望んでもいない。
ここしばらく味わえていなかった満足感に頬を緩ませながら、俺は内野の部屋を出た。その夕方、内野が死んだ。
どうやら自室のベランダから落ちて死んだらしい。周囲の部屋に聞こえる大声で何かを叫びながら。最後には悲鳴をあげて落下したという。それを教えてくれたのは新聞記事やニュースではなく、夜に俺の部屋を訪ねてきた警察官数人だった。
『内野祥子さん、ご存知ですよね？』
部屋を訪ねたことは認めた。そこで嘘を吐いても仕方ない。しかし、警察が聞きたかったのはそこではなく、望みとしてはどうやら俺が内野を殺したというボロを出させたかったようだ。違うと言っても、警察は執拗に俺を疑った。
内野の肌に俺の汗が付いていて、服の肩や腕のところにも押さえつけるように俺の指紋があったという。それについて心当たりのありまくる俺は、線は薄いとしながらも容疑者の一人くらいには数えられていたようだ。しばらくすると警官は来なくなったが、事件から二週間後くらいに風評被害を恐れた大家にアパートから出るように言われたし、会社でも風当たりが強い。内野の死からしばらくは変わらず接してくれていた佐々木とも、最近連絡がとれない。
その頃、ある可能性を考えていた。内野が死んだのは他でもない、内野がしきりに言ってたらしい「もう一人の俺」の仕業だと。夏空を睨みながら呟いた願いが脳裏をよぎる。まさか、本当に……？　考えるのが恐ろしくて、それ以上「そいつ」のことを考えることはできなかった。
事件から一ヶ月。俺は今、閑散とした郊外の高架下で座っていた。夢や幸福なんてものは元より、生きる目的すらも「俺」に奪われた虚しさが、そして強いて言うなら激しい渇きが俺の中に渦を巻いていた。ストレスからか、時々誰かに後をつけられているような錯覚に教われるようになった。それこそ、俺に首を絞められた後の内野が物陰に俺を見たように。
それにしても、喉が渇いた。思い出すのは、内野の家で飲んだあのやけにうまいウーロン茶だった。内野が死んだ日もあの部屋で飲んだ。飲むと気持ちがスッとして、何でもできそうな気がした。今飲めばきっとこの苛立ちも、段々実感を増してきているこの錯覚も綺麗に治まるんじゃないか。
「ふはっ……」
笑えてきた。思わず噴き出した。やっぱり俺は惨めなんじゃないか。タガが外れたように笑いが止まらなくなる。
内野が死んだ。想像もできなかったくらいあっさりと。俺がやったわけではないのに、あいつはもうこの世にいない。

――じゃあ、俺はこれから何をすればいい？

そう思ったのと同時に、自分がもう凛奈のことをあまり思い出さなくなっていたことを思い出した。今更になって思い浮かべようとしても、記憶が霞んで像を結ばない。彼女がどんな顔で俺を見て、どんな声で俺を呼んで、どんな風に日々を過ごしてきたのか、あんなに一緒だったのに、あれだけ想っていたはずなのに、もうはっきり思い出せなくなっていた。

じゃあ俺は、何であの日内野の所に行ったんだ？　そうだ、ただ惨めな姿とやらを見に行ったんだ。そこには、もう凛奈を想って、彼女の仇をとろうとしていた俺はいなかった……。

周囲の景色も滲んで像を結ばない。「おい、大丈夫か？」前からいきなりそんな声がして、視界いっぱいに手が伸びてくる。

「ひっ……！」

咄嗟に後ずさりする。声をかけてきたコート姿の禿げた中年男が不愉快そうに立ち去る。親切心で声をかけてくれたのだろうか。それを無碍にしたのには多少の罪悪感がないでもないが、とりあえず感じていた視線からは解放された。あのおっさんだったのか。ならよか――また視線を感じた。今度は、花壇に座り込んだ足の間から。反射的に見ると、そこには見覚えのある女の体がそこにはあった。鬱血した顔で血走った目が見開かれて俺を見ている。

「――――――っ！」

それも一瞬のことで、次の瞬間には死体は消えていた。その日はもう、死体は現れなかった。

朝目覚めると、窓の外を何かが落ちて行った。下を覗くと何もない。

街中を歩く。クリスマスセールをやっているらしい駅前のケーキ屋では、サンタ服を着た若い娘がホールケーキの宣伝をしていた。寒い中ご苦労なことだと形ばかりの気遣いをしてみせてから、それをすぐに忘れて雑踏の中に紛れ込んでスクランブル交差点に足を踏み入れようとしたときだった。

「――――人殺し」

その声がどこから聞こえてきたのか、わからなかった。次の瞬間には、そんなことはもう問題ではなくなった。

「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」

……違う。

「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」

……やめろ。

「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」

俺じゃ、ない。

「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」「人殺し」

「俺じゃないっつってんだろ！　黙れよっ！！」

叫んでも声は止まない。突然叫んだ俺を呆けた顔で見ている通行人の口だけが別の生き物のように蠢いて「人殺し」。堪らず俺はその場から走り去る。途中で何人にぶつかったかはわからない。何度転びかけたかもわからない。どれくらい走ったかなんてわかるわけがない。とにかく俺は逃げたかった。誰もいない所へ。誰も俺を人殺しと罵らない場所へ。さっきから目に付く、携帯電話で俺を警

察に突き出そうとしているみたいなやつのいない所へ。――っ、駄目だ外にいたら見つかる。近くにあった建物に駆け込んだ。

所々変色したコンクリートの壁に手をついて息を整えながら、薄暗い廊下を移動する。ひそひそとした話し声がそこかしこから聞こえてくる。まさかとは思うが、そんなわけはないと思うが、俺を捕まえて通報する算段でもつけているのかと思うと不安が心を捕らえて離れない。もっと誰もいない所に行きたかった。だけど、今更外に出るのも恐ろしかった。階段を上がる。

まだ聞こえる。まだ終わらない。俺じゃないんだ、もうやめてくれ。叫びたいのを必死に堪えて階段を上がる。かなり上の階の踊り場ですれ違った子どもに怪訝な顔をされた。まずい、ここじゃまだすれ違う。視線と声に対する不安に煽られるように、俺は鉄錆の目立つ非常階段に出る。走る度に錆びた鉄が嫌な音を立てる。まるで警報だ。まさか、そういう用途で作られたトラップか？　そもそもこのビル自体が、俺を捕まえる為に用意された罠なのか？　いや落ち着け、一ヶ月やそこらでビル一棟が建つわけ――――、いや俺を捕まえる為であって住居用でないのならそれも可能か？　いや落ち着け、一体何やってんだよ俺は。

考えてもみろ。何で通行人が俺を捕まえようとするんだ？　政府要人とかならともかく、俺と内野の関係どころか内野祥子という人間が殺された事件すらよく知らないだろうやつらが。ちょっと考えればそんなことわかる。それなのに俺は、通行人を押しのけて走った挙句に全く知らないマンションに逃げ込んで、ただの日常会話かも知れない声に怯えて、小さい子どもに怪しまれるほど不審な様子で歩き回っている。いや待て、じゃああの交差点は何だ？　いやいや死体だって見えるくらいだ、あれも幻覚だったのかも知れない。

……ふと、あることが気にかかった。記憶と現実との齟齬というべきか、俺にはよくわからない。だけど、急にクリアになった頭が訴えかける。「もう一人の俺」なんて曖昧なやつじゃない、もう一人。

あいつは一体、

「人殺し」

背後から、聞き覚えのある声が聞こえた。振り向いた先に立っていたのは、俺だった。俺の姿があった。……内野が言っていた、もう一人の俺が。

中途半端な思考が吹き飛ぶ。声が出ない。ただ少しでも離れたくて、後ずさりする。背中に何か当たる。やばい、逃げられない。後ろ。後ろ。後ろ。後ろ。後ろに。後ろに。とにかく後ろへ下がる。何かを乗り越える。バランスが崩れる。背中が重力の流れに乗る。天地が逆転する。あっ、地面だ。

あ、そっか。あのとき俺も「力にならない」「止めない」って形で凛奈の死に関わってたんだな。……ごめんな、凛奈。それに、さｓ

竹下理緒が死んだことを新聞記事で見るまでもなく、私は知っている。何故なら彼が頭から落下するのを目の前で見たのだから。やつは、内野祥子が、彼女なりの復讐のつもりなのか、烏龍茶に混入させていたのだろう薬の中毒に陥り、錯乱して死んだのだ。私は一言二言彼に囁いただけだ。

その内野祥子も、竹下理緒の死ぬ一ヶ月以上前、狙ったようなタイミングで死んだ。私が自分で殺すつもりだったが、お蔭で手間が省けた。さすがに人を直接殺すのには抵抗があったから、尚更ありがたい。それで私の目的は一応果たされたのだから。当初の想像以上の、二人の死亡という夢のような結末で。

内野祥子と竹下理緒を破滅させる。

それが私の目的であり、ここ数年はその為に生きてきたようなものだった。

大学三年。当時大学寮に住んでいた私には、同じ部屋に住む無二の親友と呼べる人がいた。恋人やバイト先の人間との関係に心身ともに疲弊していた時期だったのもあってか、彼女といられる時間は誇張でも何でもなく、人生に価値を見出せる唯一の時間だった。あるいはそれは、私が一方的に彼女に依存していた関係だったのかも知れない。彼女に話を聞いてもらえたらあっという間にそれまで心の中にたちこめていた暗雲も晴れるような心地だったし、彼女と二人でいると、世界が少しだけ鮮やかに見えるような気さえした。

忘れもしない、三年前の七月——大学三年の夏まで、その幸せは続いた。いや、正確にはもう四月の時点で終わりに向かっていたのかも知れない。新年度の授業が始まったばかりのその日、彼女は一つの致命的な出会いを果たしてしまった。

彼女は、誰にも分け隔てなく接することのできる性格の持ち主だった。それは彼女の美徳だったし、むしろそれがなければ彼女と私の出会いはなかったかも知れない。しかし、その日そのときだけは、もっと警戒するべきだった。彼女がそのとき出会ったのは、竹下理緒だった。

私は二人が出会ったときのことを、今でも印象深く覚えている。確か学部共通科目のグループワークのときだった。彼女がその眩しいような純然たる善意で人を惹きつけるのだとしたら、梶谷凛奈と出会って以降は別として、当時の竹下理緒は策を弄した手練手管で獲物を引き摺り込むような印象だった。初めて見たときから何となく恐怖して距離をとった私とは対照的に、彼女の方はいつもの通り、私に声をかけてくれたときのように彼に話しかけた。それが彼女を追い詰めることになるとも知らず。

今にして思えば、彼女は余りに清すぎた。そして、そんな彼女が接するにはあの竹下理緒は危険だった。

付き合おうと言い出したのは竹下理緒の方からだったらしい。授業中に留まらない友人関係の中で彼に心を許し、そして惹かれていた彼女の浮かれようといったらなかった。今思えば、私はそのときに言うべきだったのだ。『それでいいのか』と。竹下理緒を警戒していたのに、彼女の嬉しそうな顔に何も言えなかった。

そして、その日が来た。梅雨も明けない時期には珍しく晴れた日曜日。彼女は「竹下さんとデートして来るね」とまだ布団から出られずにいる私に弾んだ声で言って、浮かれた様子で部屋を出て行った。

夕方過ぎになって『ちょっと遅くなるね』というメールが来た。絵文字がふんだんに使われているのは、機嫌がいい証拠だ。安心した私は、寮の夕食に付いてきたゼリー（彼女の好きなライム味だった）を取っておいて部屋で待っていた。その日、彼女はとうとう帰って来なかった。メールを送っても返信はなくて、電

話も繋がらなかった。

朝方になって帰ってきた彼女は、私が何を言っても管理人に叱られても他の友人たちから話しかけられても、ずっと上の空だった。いつも彼女の傍にいた私でなくても彼女の様子がおかしいことはすぐにわかっただろう。もう、かつて周りを明るく照らしていた彼女の姿はどこにもなかった。はっと気付いたように、以前の姿を取り戻そうと必死に繕った笑顔は、見ているのが辛くなる痛々しいものだった。そんな彼女が私に本音らしい本音を話してくれたのは、春学期が終わって帰省支度をしているときだった。

『笑う門には福来るって嘘なのかな。だって、毎日こんなに笑ってるのに、最近全然幸せを感じられない。何も楽しくなくなってきちゃった。あっ、でも理恵ちゃんといられるのは嬉しいよ。だって、わたしがこんな風に本音を言えそうな人って、理恵ちゃんだけだから』

本音と言ったくせに、彼女がそのとき私に見せてくれたのは明らかに無理をした、泣き出しそうな笑顔だった。夏の帰省から帰ってきたとき、私は彼女が春学期を最後に自主退学していたことを知った。その後の足取りについてはわからない、と管理人は言った。電話も通じず、もしかしたら地元に戻っているのでは、という根拠のない言葉を当てにして彼女の地元まで新幹線で行ったが、手がかりはそこでは掴めず、逆に彼女の自主退学を知らなかった御家族をただ驚かせるだけの結果になってしまった。

秋学期が始まってからも私は思い当たる場所を探した。彼女と仲のよかった人に彼女の所在について聞いてみた。聞いた全員が、彼女の御家族と同じ反応をしていた。そしてかなり迷ってから、竹下理緒に話を聞くことにした。

そもそもこの男と出かけてから彼女はおかしくなったのだから、最初に聞いてみてもいいくらいだったが、どうしても気が進まなかった。しかしそれでも彼女の為と割り切って、探すまでもなく学食にいた竹下理緒に話を聞くことにした。隣に座る女子を相手に緊張した面持ちで話している姿に、竹下理緒がその相手――彼女が梶谷凛奈だった――に対して並々ならぬ好意を寄せているらしいことが窺えて、元から彼に抱いていた嫌悪感が強まる。

彼女のことはどうした。お前と出かけることになったらその度に浮かれていたあの女の子を、お前は忘れてしまったのか。感情が私の脳髄を占拠して、危うく言葉になって迸りそうになったところで竹下理緒が私を見つけた。隣の女子に断りを入れてから、物陰に入っていく。どうやらこっちに来いというつもりらしい。

結果として、彼は彼女の居場所については知らなかった。自主退学については知っていたらしい。軽く嫉妬する。しかしそれ以上のことは――あの日彼女の身に何があったのかは聞けなかった。暗くなった頃には帰した、という言葉を私は信じた。このときだけ、私は彼の術中にあったのかも知れない。恥じ入る限りだ。

しかし、その翌日のことだった。必修で休むわけにはいかないということもあって形だけは出席していた講義の最中、大学の敷地にある雑木林の中に入っていく竹下理緒を見つけた。タイミングよく回ってきた出席簿に急いで名前を書き、三百人は収容できようその大部屋を抜け出した。

そこで聞いた会話が、私の進むべき道を決定することになる。

雑木林の中には一つの東屋があるのだが、どうやらそこで待ち合わせをしていたらしい。近くで隠れていた私が見たのは、その前日にいた梶谷凛奈とはまた違う人物――内野祥子だった。

『どうしたんだよ内野。もうお前とは関わりないだろ？　あれで最後だ』

『最後って……。たった二人だったよね。それに、その話じゃないし。あっ、凛奈ちゃんのこと心配してるの？　大丈夫だよ、ウチもそこまで見境ないわけじゃないから。でも、竹下くんもひどいよね。仮にも自分のことを好きになってくれた人をあんなにボロボロにしちゃってさ。夏頃のあの娘も……』

何の話をしているか、わからなかった。ただ、「ボロボロ」と「夏場」という単語が、認めたくない何かと符合するような気がした。耳をそばだてる。

『しょうがないだろ、他にちょうどいいのがいなかったんだから。金もないし知り合いも少ないんだよ。内野だって知ってんだろ？』

『あの娘、退学したんだっけ？　自分から。その後は会ってあげてるの？』

『ったく最近そればっかだな。いや、昨日も同じこと聞かれてさ。……会ってないな。退学することにしたって電話もらったきり音信不通で居場所もわかんねぇから』

『あっそ。まぁいいや。でもどこかできっと、薬漬けの日々なんじゃない？　だってあれだけ強いのを入れたんだから』

『しかも回数ごとに値段を吊り上げやがってな。まったく、「あの娘、退学したんだっけ」じゃねぇよ。あれじゃ学費払うとか無理に決まってんだろうが』

……この二人は、何の話をしてるんだろう。耳を塞ぎたくなった。二人を殺してやろうと思った。しかし、どちらもできなかった。しかし、わかったことがある。「退学」という単語は、前の二つと一緒になって彼女を――私の無二の親友だった佐々木あかねを連想させた。

何をしたのかは知らない。だけど、彼女が別れる前に見せたあの悲しい笑顔があいつらによるものなのだとしたら、私はこの二人を絶対に許さない。

それから、私の新しい日々が始まった。

まず初めにすべきことは、内野祥子に近付くことだった。

話しかけるきっかけさえあれば、後は簡単だった。最近親友と会う機会が減っていることがフラストレーションになっているらしいことも、既に知っていたから。そこに付け入るだけでよかった。あかねが紛れもない善意で昔の私にしてくれたのと同じやり方で、泣きそうになりながら、悪意で終わることを前提に私は内野祥子の心をこじ開けた。そして、簡単に内野祥子は私を信頼するようになった。しばらく、あかねに合わせる顔がない思いだった。

就職した年の六月初め、内野祥子からある相談を受けた。どうやら自分が幹部を務める宗教団体（といっても本人に信仰心はないらしい）の六月までの入会者ノルマがどうしてもあと一人足りないのだという。どうでもいい。しかし信頼関係維持の為にも、聞かないわけにはいかない。半分以上うんざりしながら聞き流していた。

しかしそのとき、私は内野祥子が学生時代から梶谷凛奈に対して執着とも依存ともとれる友情を抱いているということを思い出した。そして相変わらずあまり会えていない不満を募らせていることも。そこで思い浮かんだ賭けに、私は

乗ってみることにした。
『じゃあ、ちょっと嫌かも知れないけど、誰か友達とかこういうときに頼れそうな人とか誘ってみれば？　昔からずっと一緒にいた人とかさ』
数日後、内野祥子は仕事が終わったばかりの梶谷凛奈を電話で自室に呼び、それを境に時折何もない所を見て怯えるなど様子がおかしくなった梶谷凛奈は、八月初めに自宅マンションから投身自殺を果たした。
梶谷凛奈の葬式に参列した竹下理緒は、どこか空ろな顔をしていた。義務のように周りの者と話し、父親らしき初老の男性に殴り飛ばされても何も返さずに弱々しい無表情で立ち尽くすだけだった。
それからしばらくの間は特に動きがない。竹下理緒はもちろんのこと内野祥子もしばらくの間は茫然自失の状態で、この二人がどれほど梶谷凛奈を愛していたのかが窺えた。彼女が、あかねが消えた後の私も同じだったのだと何度言いたくなったことかわからない。先にその状態を脱したのは竹下理緒だった。
私が次に竹下理緒と会ったのは、まだ寒い一月のことだった。この頃にはもう次の一手が決まっていた。
『そういえばそれくらいの日、仕事が終わった後に電話がかかってきたんですよ。たしか梶谷さん、その相手のこと「しょーちゃん」って呼んでたような気がします。あ、あとですね、様子がおかしくなってたんですよね、それから』
まさか亡くなるなんて……、と付け加えるのは忘れない。
私はここである試みをしてみた。自分のことを『佐々木あかね』と名乗ったのだ。自分がかつて傷つけた女性を覚えているのか、名前を見たらどんな反応をするのか、それを見てみるつもりだった。もし反応したらどうするつもりだったのか、私にもわからない。結果として彼はあかねのことなど覚えていなかったようだったので、そんな想定に意味はない。
内野祥子が、自身に対する疑惑を募らせているとも知らずに竹下理緒を自室に呼んだ。もちろんこれも私の提案だ。それでも一応用心をするくらいの頭はあったらしく、前日に部屋を訪ねたときに調べてみたら生意気にも遅効性の睡眠薬がキッチンに用意してあった。もっと色んな薬を溜め込んでるくせに。
内野祥子の後ろ向きなのに自信過剰気味な性格上、薬がすり替えられている可能性など考えまい。そして当日、様子を窺いに行った私が見たのは、鬱血した顔を覆って咳き込んでいる内野祥子の姿だった。来訪者が私だと認識する前の怯え様といったらなかった。笑いを堪えるのに必死だったその一方で、計画の失敗に歯噛みした。二人を同士討ちさせるつもりだったのだが……。
仕方なく、私はゴールデンウィーク頃にありもしない証拠写真で竹下理緒を脅迫した。しかしこのとき「一緒に出かけること」を提案したのは、何故だろう。このときの彼に対してなら、私と同じ位置に落ちてきた彼になら、違った感情を持っていられるのではないかと思ったのかも知れない。
しかし、それで自分の目的を忘れられるほど私は楽観的ではなかった。竹下理緒にはしつこくつきまとってみせる以外には何もしなかったが、内野祥子には定期的にある仕掛けをしていた。絞殺されかけて芽生えたらしい恐怖を煽る為に電話で言うのだ、『誰かが物陰から内野さんの部屋の方をじっと見てるよ』という旨のことを。たったそれだけのこと。計画が事実上頓挫していることを認め

ていないだけの悪足掻きと見られても仕方のないものだったが、これが思わぬ効果を奏したらしい。八月下旬の日曜日、内野祥子の夫が竹下理緒を訪ねて来たのだ。

そのとき内野祥子の現状を知ったときに浮かべていた嗜虐的な笑みを見てなんとなく予感していたが、都心で初雪が観測された日に竹下理緒は彼女の部屋を訪ねたらしい。そしてその日の夕方、内野祥子は死んだ。

それ以降の竹下理緒について語るなら、悲惨、の一言に尽きる。警察の嫌疑に対するストレスか、それとも内野祥子が一服盛ったのか、睡眠がとれずにいる彼の独り言で目を覚ますことも一、二度ではなかった。いつも周りを鬼気迫る様子で見回していた。

そして竹下理緒がいつの間にかアパートを出ていたことには少なからず動揺した。これでは、全ての後始末ができない。もう内野祥子が死ぬ以前から私に復讐は必要ではなくなっていたが、いつ彼が私の正体に気付くかわかったものではない。それに、あの夏に浮かべた嗜虐的な笑みを見たときに感じてしまったのだ。この男はやはり殺しておくべきだ、と。

竹下理緒を見つけたのは偶然でもなんでもなく、『久しぶりに会いません？』と電話で呼び出して先回りしていただけのことだ。見ていて眠くなるほど遅々とした足取りでスクランブル交差点を渡ろうとする彼の耳元で、一言囁く。

『――人殺し』

その直後、何かに怯えるように辺りを見回して『俺じゃない』と叫んで走り去っていく竹下理緒を追いかけた。本人は全力で走っているつもりなのだろうが、意識が朦朧としてでもいるのかほとんど千鳥足で何かから逃げている彼には歩いていても追いつける。彼が何かを警戒しながらビルに入っていくのを追いかけながら、私は最後の準備を済ませる。さぁ、もうすぐだ。もうすぐ、私たちを脅かすものは全ていなくなる。

竹下理緒は、非常階段で息を整えていた。あーあ、そんな逃げ道のない所まで来ちゃって。まさか、自分がこんなに意地悪く笑うなんて。そんな一面に気付かされたことに対する怒りも相まって、私には躊躇がなくなっていた。

『人殺し』

そう囁いてから、大きめの鏡を顔の前に構える。それだけだ。内野祥子の一件でぽつりと口にした『もう一人の俺、か』という竹下理緒の言葉から思いついたことだった。案の定、振り返って鏡に映った自分の顔を見た彼は過剰に怯えて、檻とでも思ったか、鉄柵が自分の命綱であることも忘れてそれを勢いよく乗り越えて、馬鹿みたいにあっさりと地面に向かって落ちた。頭から綺麗に落ちた。私は、ようやく復讐を遂げたのだ。

ビルの前は騒然としていた。それはそうだ、上から一人の男が落ちてきたのだ。だけどそれもどうでもいい。早く家に帰ろう。あかねが待っている。

あかねを見つけたのは、十月の初め頃だった。立ち寄ろうとしたコンビニからちょうど出てきたのがあかねだった。一目見てわかった。泣きそうになりながら話しかける。あかねの方は始めこそピンと来ていなかったようだが、少し考えて

からとても懐かしそうに笑ってくれた。その後、大学時代の思い出ではなくそれ以降の近況についてあかねが話してくれたのに、私の方からは特に話せることがなくて戸惑った。

竹下理緒と内野祥子があかねにつけた傷の深さを、すぐに知ることになった。どうせ待つ者もいないのだからと、もちろん本人の了解をとったうえであかねの家に上がって泊まった夜中、私はあかねの悲鳴で目を覚ました。幼い子どものように泣き叫ぶあかねの口からは時折「竹下さん」「内野さん」という名前が漏れていた。私が揺さぶり起こすと、あかねはまた泣いた。

その後もあかねのフラッシュバックは続いている。あの二人が彼女に何をしたのかは知らない。だが、それも関係ない。私が癒すと決めたのだから。

忌まわしい過去なんて消してしまえばいい。これから積み重ねていく未来で塗り潰せばいい。その門出が今日だ。あの二人が、あかねを苛む悪夢の元凶がこの世からいなくなったのだから！

「――やったよ、あかね」

そう呟いたとき耳に入った野次馬の声。

「おい、こっちの女はどうだ！?」

「駄目だ、意識がない！　救急車、早く救急車を！　くそ、運がないなこの娘も。落ちてきたやつの真下にいたなんて……っ！」

えっ、真下に人が？　他人を巻き込むつもりなんてなかったのに。動揺しながら、恐る恐る人垣の中心を覗き込む。

……え？　……。

バッグから携帯を取り出して、かけ慣れた番号へ電話をかける。呼び出し音が聞こえた。聞き慣れたメロディが私の耳に届いてしまった。すぐ近く、私の視線の先、人垣の中心、うつ伏せになって倒れた、見覚えのある若い女の手荷物から。膝から力が抜ける。

私の目的は、一応は果たされた。想像もしなかった悪夢のような結末で。

アビゲイルの唄

鏡上怜

ねぇ、知ってる？

何でも願いを叶えてくれる黒い服の人の話。

Track1：厄束―ヤクソク―

胸に秘めた願い、想い。それはきっと、誰にだってある。

とある聖夜。募る想いを約束に託した少女の、出会いの話。

見上げた円い夜空では、何者の視線を構うこともなく黄金の満月が輝いている。時折、空を流れる黒い雲に覆い隠されることでその妖しさが一層際立っているが、彼――松嶋蓮にはそれを見ている余裕などなかった。

豪奢なネオンと喧騒に満ちた、都内有数の大きさを誇る目抜き通り。立ち並ぶ店舗には、もう秒読みとなったクリスマスに向けてプレゼントをあれでもない、これでもないと選ぶコート姿が、個を失った暗色の濁流となって店内から溢れそうなほどに密集している。子どもたちの人気を集める玩具やゲームソフトの登場、外国を拠点とする大手服飾ブランドの立て続けな日本上陸、更には長年注目の的となっていた日本人作家を期待する下馬評を裏切ってノーベル文学賞を受賞した新人作家の第二作の発売などが重なった今年ならば、それも仕方のないことと言えるだろう。

蓮もそんな、個を失くした濁流の一滴となって大手ブランドの新作バッグと冬物のコートを忙しなく探していた。円形の天窓を見上げる吹き抜けの近くで、彼は視線をさまよわせる。

正直、蓮には近所の安い店で買ったものとその店で買ったものとがどう違うのかよくわからないところもあるのだが、今年の秋終わり頃にこのブランドの支店ができてからというもの、彼女はずっと欲しがっていたのだ。こんな日くらい、奮発してプレゼントをしたっていいだろう――蓮は、そう思っていた。

バイトの掛け持ちで生活をしている学生の身には手痛い出費になるのはわかっていたが、それを手渡す大切な人の顔を思い浮かべて、自分で使う為に貯めておいたバイト代を切り崩すことにしたのだった。

――これでしばらくは、ちょっと苦しい生活になるかもな。

公共料金や家賃、年金の積立は別にしてあるから滞ることがないとしても、食費は大幅に削ることになるだろう。店を選ばなければ買い物はできないのは今と同じなのだが、財布の残金を考えるとそうしてですら毎日の食事は大変になりそうだ。うまくいけば週三日はバイト先のレストランで夕食をとれるだろうか。あとの二日もコンビニの廃棄で――いや、確かそれはもうできなくなっていたか。

そんな風に、後に控える少し辛くなるだろう生活について少し表情を曇らせて考えていた蓮だったが、目当ての商品を見つけ、そして同じ物を狙う人の中を掻き分けてやっとのことで手に入れると、たちまち顔を綻ばせた。

『ありがと、蓮くん！』

恐らくそう微笑むだろう彼女の姿を想像しただけで、蓮は少し穏やかな気分になるのを感じた。

包装された二つのプレゼントを持って店を出た大通りには相変わらず人間で満ちていて、無数の静かな声が集まって一つ騒音を形成している。煌びやかに見えるが品のないネオンライトが、遥か上空の月光を拒むように地上を照らしている。

各々の幸福な情景を想像する人々の波の中で、蓮もまた幸せそうに微笑みながら家路につくのであった。

空では月が、薄い雲のヴェールの向こうで輝いていた。

そして訪れたクリスマス・イヴ。

厚い雲の向こうで、下弦の月が輝いている。蒼白い月に見下ろされて、同じ色に染まる家並み。その中の比較的小さな家で、蓮はある大切な人と聖夜を祝っていた。

「メリークリスマス、綾」

目に優しい明るさに調節された照明の下、クリスマスツリーやリースなど、その他にもクリスマスに因んだ装飾が至る所に付けられた部屋は、蓮の住むアパートの部屋より一回りほど広い。きっとこの広さには物理的なことよりも心理的な要素が大きく関わっているのだろうと蓮は思った。

春先まで彼女を――自分の目の前で嬉しそうな笑顔を浮かべている寺枝綾を取り巻いていた環境を思って、蓮は改めて綾の嬉しそうな顔を見られてよかった、と安堵する。

「このバッグほしかったんだ～！　ありがとね、蓮くん！」

包装を解いて自分のほしかったバッグを見つけたときの綾の笑顔には、もう翳りがない。かつて泣いてばかりいた頃の彼女を知る蓮としては、彼女の姿にそれこそ涙を流しそうな感動を覚えてしまう。

おめでとう、綾。もう、君を取り巻く不幸は終わったんだ。

蓮としてはむしろ、自分は信じてなどいない神の御子の誕生日よりも、彼女が今年の春先まで続いた状況から抜け出したこの一年全体を祝いたいようだったが、それを綾に言うわけにはいかなかった。

たとえそれで変わった状況があったとしても、決して祝うようなことではないのだから。

綾の両親が不慮の事故で命を落としたのは、今年の春先。綾が県立高校への入学を決めて中学校を卒業した翌日のことだった。葬式や告別式で涙一つ零さずに喪主を務めた綾の姿を、手紙くらいの付き合いしかなかった、もしくは結婚前の両親とだけ付き合いのあった参列者のほとんどが気丈だと言った。

しかし、幼い頃から彼女を知る蓮と、あとは寺枝家の状況を知っている者は、綾は気丈でもなんでもなく、二人の死に対して悲しみの情など抱いていない可能性を理解していた。

『きっと天罰が下ったんだ』

『これで綾ちゃんも楽になるかね』

そんな囁き声に、表立って同調することはなかったものの、蓮も心の中で頷いていた。その日の、そしてそれまでのことを思い出すと、今でも気持ちが波立つのを感じる。

死んで当然なんだ、あんな奴ら……！

「蓮くん？」

「――――」

不意に声をかけられて、蓮ははっと目を覚ましたように意識を薄暗い部屋に戻す。目の前ではテーブルに身を乗り出して、綾が不安そうにこちらを窺っている。

「どうかしたの？」

「え、な、何が」

慌てて聞き返すと、綾は蓮の眉間に細い人差し指を当てて「しわ寄ってる」と言った。

「何か、凄く難しい顔してたよ？　あっ、もしかして誰かと約束とか、あった……？」

そう言うと、綾は申し訳なさそうに表情を曇らせる。蓮は慌てて「そ、そういうわけじゃないんだ！」と言いながら綾の小さな両肩を掴む。

「違う、そうじゃない。俺はただ、今年は綾にとってどんな一年だったのかって、」

そこまで言いかけて口を噤んだ蓮だったが、しかしその反応が却って綾に彼の言わんとしているところを悟らせてしまったようだった。綾は「そう、だね……」と小さく呟いてから、目を伏せる。

実際のところ、綾にとって両親を同時に亡くしたことは蓮が思っている以上に彼女の心に、確かな感情となって影響を及ぼしていた。

しかしそれは、その点においては蓮が思っていた通り悲しみの感情などではなく、むしろ空虚感だった。恐らく、その当時抱いていた感情がずっと続いていれば、彼女は命を絶つことくらいしてしまっていただろう。しかし……。

「でも、蓮くんがいてくれたから、大丈夫だったよ」

今までも、そしてこれからも。

あの頃も、一人になった後も。

その言葉は綾にとって、申し訳なさそうに自分を見つめてくる蓮に対する取り繕いの言葉というよりは、自分に向けた言葉だった。しかし、蓮はあくまで綾の優しさを思い、そんな言葉を言わせてしまった自分を責めるより他にできることがない。

だけど、と気を取り直す。

綾がそこまでしてくれたのだから自分がいつまでも気まずい雰囲気を引きずっていてはいけないと思った蓮は、少し下手な笑顔を作って改めてクリスマスパーティーを再開した。

凝った料理を作れないという綾の頼みで蓮が持ち込んだ節約レシピ料理があらかた片付いて、夜も更けてきた。

リビングでは綾が「おー入る入る」と楽しげに言いながら、早速バッグに小物を試し入れしている。その無邪気な反応に、蓮は心が和むのを感じた。幼い頃から兄妹同然に過ごしてきた彼女にはこんな風に笑っていてほしいと、彼はずっと思ってきたのだ。それが、決して喜ばしいきっかけではなかったが、叶った。これからはずっと今の無邪気な笑顔が続く――蓮はそう思うとやはり喜びを隠

せないのであった。
蓮は鼻歌交じりで、残った料理を適当な容器に詰めて冷蔵庫にしまう。少し自分の分にも持って帰ろうと思いついたところに、背後で止まる足音を聞いた。
「蓮くん」
足音の主は、当然のことながら綾だった。
しかし、振り向いた蓮の顔は心配そうに沈んでいる。というのも、かけられた綾の声が先ほどまでの楽しそうなものではなかったからである。
「どうした、綾」
「……」
やや俯いて黙りこくる綾の顔は、垂れ下がる前髪に遮られてよく見えない。しかし、蓮は綾が何を言おうとしているのか何となくわかっていた。
「大丈夫だよ、綾」
幼い頃よくそうしたように、柔らかい髪に手を置いて蓮は綾の頭を撫でる。
「俺は、綾の傍を離れたりなんかしないから。綾には幸せになってほしいんだ。俺はずっと、綾の傍にいるよ」
「そっか、うん。ありがとう、蓮くん」
綾が心の底から安心したという表情を浮かべる。その表情を見て、蓮もまた安堵する。二人の関係は、恐らく出会った頃からずっとこのような確認と共に続けられてきた。
傍から見て、二人の関係は綾の蓮に対する過度な依存と束縛に近いものだった。
家庭環境のせいもあってか塞ぎがちで友達もうまく作れなかった綾にとって、「仲がいい」と言えるのは四つ年が離れた蓮だけであり、高校に入ってからも毎日の報告から友達の作り方まで、かなり頻繁に綾は彼に電話やメールをしていた。そして最近こそなくなったが、彼女は両親の存命中はほぼ毎日、時間を問わず蓮に会いたいと言って聞かなくなることがあった。蓮が修学旅行に行っているときなどは、勝手に学校を抜け出して後を追おうとするほどだった。
『あの子、ちょっとヤバいんじゃないか？』
『あんまり甘やかすと付け上がるぞ』
中学・高校時代、友人たちからそう言われることがあったが、蓮本人が彼女の言動に対して何かを思ったことは、彼が覚えている限り今のところ一度もない。
恐らくそれは、蓮が幼い頃――近所の公園で独り泣いている綾を見てから彼の中に芽生えたある思いのせいだろう。当時の彼は幼心に思ったのである。綾のことを守れるのはきっと自分しかいない、と。
だからだろう、多少彼女が蓮に依存しているとしても、それを受け入れこそすれ拒むという選択肢は、彼にとってありえなかった。周囲の声も気にならなかったし、彼女との関係を苦痛に感じたこともない。綾が要求して、蓮がそれに答える。それで自然。それが二人の姿といってもよかった。
その姿を維持する為の確認行為。
時折ある綾のこうした問いかけはその一つとして、蓮の中でも自然に処理されていた。安心したような綾の笑顔。こうして彼女は――恐らく蓮も――精神の均衡を保っているのだ。

しかし彼の予想に反して、綾の言葉はそれで終わらなかった。
「ねぇ、蓮くん」
「ん？」
綾の声のトーンが少しだけ低くなったような気がして、蓮はすぐに聞き返した。
「蓮くんはさ、好きな人ってどうしてた？」
「――っ！」
一瞬だけ、蓮の顔に緊張が走る。
好きな人。その単語を綾の口から聞くことになるとは。蓮はその言葉に一抹の寂しさなどではない、その言葉ではとても形容できない複雑な感情を禁じえなかった。
中学・高校時代、蓮にも「気になる女子」はいたし、そういった相手と付き合うこともあった。しかし、そうして恋人ができても、蓮にはあくまで綾がいた。当時の綾は、まだ蓮に依存しきっていた。綾からのメールがあるとすぐにそれを見て、綾からの電話にはすぐに出て、綾に呼ばれれば何を投げ出してでもすぐに彼女の所へ向かった。その結果としての別れにも、「仕方がない」と自分に言い聞かせることしかできなかった。綾以外を優先するという選択肢は選びようがなかった。
その綾から、「好きな人」という単語を聞く。
蓮は「そっか、好きな人か……」と柔らかい――年の離れた妹と接する兄のような――微笑と共に呟きながら、自分の経験談を思い起こそうとしている。
しかし内心では、自身の中に突如芽生えた感情に戸惑っていた。
……よくもぬけぬけとそんなことを言えるな、俺からはこんなに自由を奪っておいて。
それは、もしかするとずっと彼の中にあったかも知れない感情だった。本人が自覚することを頑なに拒んでいるだけで、スポーツクラブの大会当日に休まなくてはならなくなったときにも、修学旅行で周囲から好奇の視線を向けられたときにも、以前から楽しみにしていたコンサートを当日になってキャンセルしなくてはならなくなったときにも、そして綾との関係が原因で親しい人物と疎遠になってしまったときにも、綾に対する嫌悪に近い感情は蓮の中で芽生えていたのかも知れなかった。
そしてこの時初めて、蓮はその感情を自分のものとして自覚することとなった。自覚してしまった後では、いくら否定しようとしても胸の奥に重苦しい物がつかえてしまう。
それでも――綾に対する黒い感情を秒刻みで募らせていきながらも――蓮の表情と口調は優しげで、その姿は妹の悩みに対して懇切丁寧に答える兄のようだった。そして、すぐに終わってしまった関係の苦い記憶を辿る。
「最終的にさ、気持ちを伝えられるかどうかなんじゃないか？　本気だって相手にわかってもらえれば……綾なら、大丈夫だよ」
蓮が軋むような胸の痛みに耐えている横で、綾は「そっか」と真剣な声音で呟

く。そして彼をまっすぐに見つめながら、息を吸った。
「蓮くん、あの……！　あのね、」
綾は、水底の澱を吐き出してしまおうとするかのように言葉を探し、蓮はそんな綾の姿に、心を波立たせた。
彼が無自覚に積み重ねて来た負の感情が上乗せされていきそうな暗い予感。しかし、それがわかっていても、幼い頃からそうであったように、彼には黙って綾の言葉の先を待つ以外になすすべがなかった。
そして、綾は躊躇うように閉じていた口を開いた。
「あの……、わたし、は……。ずっと、」
これ以上聞いてはいけない。
自分がそう思った理由を、蓮は理解していなかった。
色々なものを犠牲にしながら続けてきた関係が変質してしまう予感への恐怖だったのか、あるいは綾に対して抱いていた「妹のような存在」という見方が変わってしまうこと――綾が「妹」以外になってしまうことでこれまで抑えてきた感情を抑えられなくなってしまうこと――を恐れたのかも知れない。
いずれにしても、蓮は自分が抱いた感情を理解する前に、綾の言葉を最後まで聞くことを拒んだ。
「そんな風に言い出されたら、きっとみんな綾のこと気にせずにはいられなくなるかも知れないな」
ほぼ考えず、脊髄の反射で返した言葉。蓮が、恐らくは初めて実行した、綾に対する拒絶だった。綾の表情がゆっくりと変わっていき、笑みの形になる。
「蓮くんも、そうだった？」
笑みの形に歪んだ顔で、綾は蓮に尋ねる。そして彼の「ちょっとだけドキッとした」という言葉を聞くとはにかんだような笑みを浮かべた。
「ちょっと蓮くんで練習してみたんだけど……。ふーん。蓮くんにそう言ってもらえると、何か自信になるような気がするよ」
そしてしばらく視線をさまよわせた後、「あっ、そうだ！」といつも彼に見せている、弾けるような笑顔を咲かせてリビングへと蓮の手を引いた。
これでいい、と蓮は思った。
綾は今まで通り「妹」でいてくれればいい。ただ笑っていられればいい。そう思いながら綾の背中を見つめていた。
「ちょっとここで待ってて！」
そう言ってリビングを後にした綾が二階の「自室」に行ったことは、微かな照明の点いた広い廊下や階段に反響するスリッパの足音からわかる――もうあの両親はいないのに、彼女がまだ三人で暮らしていた頃をなぞっていることが窺えて、蓮の胸に微かな痛みを刻みつける。
それでも、綾は笑っていた。
蓮へのプレゼントを取りに行く直前も、パーティーで料理を食べているときも、話をしているときも。綾の自然な笑顔に蓮は安堵していた。
彼女は、もう十数年間にわたって付けられてきた傷から立ち直ろうとしているのかも知れない。それに安堵した。先ほど言葉を遮ったときに芽生えた罪悪感も薄れるような気がした。自分の為なのか、綾のことを素直に祝福してなのか。

天井を見上げて「おめでとう」と小さく呟いた彼の顔は、長年背負い続けて来た重荷を手放すことを喜ぶアトラスのようだった。

その後、リビングに戻ってきた綾から贈られた真新しい腕時計に感想を述べて実際に身につけてみせた後、蓮は綾の家を後にした。

夜空に浮かんでいるはずの月は厚い雲の向こう側に隠れ、街は月明かりの届かない夜闇に包まれていた。

両親を亡くした後、綾が最初にしたのは寝室の天窓をベニヤ板で塞ぐことだった。この天窓から見上げる夜空は母から受けていた陰惨な虐待を思い起こさせるので、綾にとっては不快以外の何物でもなかった。だから彼女は、両親の趣味で買い集められた家具を売却するよりも先にこの天窓を塞いだのである。

かつて夜空が見えた場所にあるベニヤ板を見つめながら、しかし綾はそのような遠い記憶ではなく、先ほど夜道を帰って行った幼馴染のことを思い出していた。

……伝わらなかったのかな。

蓮が自分を拒絶しうるという可能性について考えたことのない彼女には、こう考える以外に彼に言葉を遮られた理由を求められなかった。

少し時間が経ったからこそそういう風に落ち着いて考えられるのであって、それまでは、ましてや蓮に言葉を遮られた直後には、そういう誤解すらできなかった。必死で繕った笑顔はぎこちなく軋み、絞り出した声は震えてしまっていた。

変に思われたかな――一瞬芽生えた不安を、すぐに首を振って打ち消す。

きっと、タイミングが悪かったんだ。ほんの少しの微妙なタイミングで蓮くんはたまたまわたしの気持ちに気づかなかっただけだ。

そう思うことで、綾は連から拒絶された事実から目を背けた。

綾には、蓮が自分から遠ざかっていくという考えはない。それどころか、彼はずっと自分のそばにいるという確信があった。

……幸せにしてくれるって、言ってくれたから。

幼い頃、公園で泣いていた綾に蓮が言った言葉、『ぼくが綾ちゃんを幸せにするから泣かないで』。

いつのことだったか、それを綾ははっきりと覚えている。まだ小学校にも上がらないくらいの年のときに、親の不仲から八つ当たりをされることが多く、しかし周囲からの助けも得られずに一人で泣いていたとき。

当時から彼女の味方は近所に住む四つ年上の――このときはまだ小学二年生だった――蓮だけだった。彼は日頃から独りで泣いている綾のことを気にかけていた。そして時間のあるときに彼女と一緒にいたのである。他人に対して心を開かなかった綾も、「いつも優しいお兄さん」の蓮の前でだけは少し明るくなっていた。

そんなある日、綾が家出をした。

結局そこまで遠くには行っておらず、彼女の家出がわかってから約二時間で見つかったのだが、蓮の言葉をも拒んで綾は尚も走り続けようとした。幼い彼女

の体力は既に底を尽きており、走ろうとしている足取りもふらついて、すぐに蓮は追いついた。

そのときに蓮が言ったのだ。

『ぼくが綾ちゃんを幸せにするから泣かないで』と。

その言葉通り、蓮はそれから今まで――少なくとも綾から見れば――綾の幸せを最優先にしてくれていた。どんなことも、今にして思えば自分勝手だったと綾本人が恥ずかしく思うようなことでも、嫌な顔一つせずにしてくれた。そのことに対して、綾は心の底から感謝しているし、恐らくはその優しさから、彼女は蓮に惹かれていた。

できることなら、彼と新しい関係になりたい。

ずっと「蓮お兄ちゃん」と呼んでいたのを最近になって「蓮くん」と改めたのも、そんな気持ちの表れだった。いつか読んだマンガのように、一緒にいるうちに自然と先の関係に進めるかも知れない、という期待の表れだった。

しかし、いざそう意識をしてみた段階で、綾は蓮との微妙な距離の存在に気づいてしまった。恐らくは蓮自身も気付いていないだろう言動の隙間に、綾は気付いた。長らく蓮に依存して、蓮と以外深い関係を築いてこなかった綾だからこそ、友人や意中の相手との関係にも気を配っていた蓮よりも敏感に自分たちの関係の変化を察知したのであった。

些細なきっかけだった。

メールの返信がたまにそっけない文になること。

自分といるときに電話が鳴って出るようになったこと。

前以上に友達を作るように促すようになったこと。

綾でなければ関係の変化を疑わないような、些細な言動の変化だった。客観的に見て、それは綾の被害妄想と言ってもいいような懸念だった。しかしその疑惑は芽生えた瞬間から綾の中で事実になり、そして実際、蓮は無意識のうちに綾から遠ざかろうとしていた。

それでも蓮は綾に対する自分の感情から目を背けていたから、蓮はあくまで彼女に優しかった。だから、綾もそれに甘えて自分たちに巻き付く不吉な予感から目を逸らしていた。

そして、心の中に湧き上がる不安を振り払おうとしたのがこの夜――十二月二十四日だった。

しかし蓮は、綾の言葉を最後まで聞くことなく、しかもそれが自分に向けられた言葉だと気付くことなく遮って終わらせてしまった。

きっと、わたしの気持ちが足りないんだ。

だから蓮くんはわたしじゃなくて……。

綾はベニヤ板の向こうに広がる夜空を見上げながら思った。頭を抱えて、そのままベッドに倒れ込む。思案から漏れる唸り声は数秒くらいして止まった。誰もいない家のインターホンが押されたのだ。

こんな時間に、一体誰が？

蓮くんかな――一瞬の恐怖をそう口に出して打ち消す。

「はーい！」

もし蓮くんだったら、もう一回言ってみよう。ちゃんと、あなたのことが好き

だって。きっと、彼は優しい笑顔で受け入れてくれる。甘い夢想。淡い幻想。

それが現実とは離れたものであると綾もどこかでわかっていながら、自然と緊張で呼吸が早まる。急ぎ足になっていく。冷たい廊下に足音を響かせて、綾は玄関に向かう。

「れ、……」

ドアの向こうにいたのは、背の低い黒服の人物だった。

「どうも、夜分遅くに失礼します。私、タカギと申します」

つばの広い山高帽に黒い背広姿。目深に被った帽子のせいで顔ははっきりと見えないが、機械の合成音みたいな声は低く、恐らく男と思われるその人物は、あからさまに怯えている綾に歩み寄り、穏やかな口調で囁きかけた。

「あなた、幸せになりたいですか？」

月明かりの届かない闇夜の中、玄関照明によって照らされる黒い人物の姿を、綾は不安そうな——信じていなかった存在を目の当たりにした者が浮かべる——表情で見つめていた……。

Track2：自己逃避ラビュリントス

なりたい自分。目を逸らしてしまいたい自分。それはきっと、誰もが持っているもの。

ある冬の夜、「自分」から逃げ続けてきた青年の、報いの話。

「じゃあ、またね。蓮くん」

「あぁ。また明後日」

「あ、そうだ蓮くん。このコートありがと。……あったかいよ」

「そっか。それなら嬉しいよ」

蓮はにこやかに微笑むと、自宅に向かう為に電車を降りた。終電の数本前とあって、駅周辺の飲み屋街でも夜の賑わいと呼べるものが治まりつつある。それでも煌々と明かりの点いた店内からは楽しそうな声が聞こえてはいるが、駅を少し離れると道は暗く静かになる。

最終バスはとうに行ってしまった後だ。それに、元々駅から自宅までは歩いても二十分かからないくらいの距離だから、たまにはいいかも知れない、と蓮は人通りの少ない夜道を歩き始めた。

街灯が所々に灯るだけの薄暗い道を歩く。蓮は時折、その温かさを確かめるように、首に巻いたマフラーを触っている。

クリスマスの夜に恋人の紗月莉緒——先ほどまで一緒の電車に乗っていた同い年の女性からもらったマフラー。それ自体の温度もあるのだろうが、このマフラーを自分に贈ってくれたのが莉緒だということが、蓮にとってはまたとないくらい温かく感じられた。

彼女、莉緒と出会ったのは去年——綾が高校に入学した年の五月初めのことだった。

大学で学ぶ講義の履修登録が完全に終わって間もない頃、たまたま教室変更を知らなかった蓮は、何の気なしに、好みの音楽を聞きながら始業時間を待っていた。

事前に配られていた講義資料を机に広げていた彼は、ふと肩を叩かれて振り向いた。ヘッドフォンを付けていた彼を気遣うような表情で蓮を見ていたのは莉緒だった。その顔に、蓮は見覚えがあった。以前からいくつか同じ講義を受けていることもあって、時折見かけていた女の子。彼女との初めての会話は、遅刻しそうだと告げられて慌てて走り出すという、恋人の出会いと言うには少し恥ずかしいものだった。

その礼を言うことをきっかけに二人は親しくなり——より正確に言うならばそのきっかけで蓮は莉緒と積極的に関わりを持つようになり——そのまま恋人同士になったのが夏の終わり頃。

偶然とはいえ皮肉めいているのは、綾が蓮と望んだような過程で二人が関係を変えたことであった。

しかし、その関係へ至ることに蓮は躊躇していた。その理由が綾であることは言うまでもない。付き合い始めてしまったら綾の傍にいられなくなってしまう。綾には自分がいなくてはいけないのに。

躊躇していた蓮の背中を押したのは、意外にも綾の言葉だった。といっても、綾が直接蓮の交際に関することを言ったわけではない。高校で友達に恵まれているらしい綾の話を聞いているうちに、以前のように付きっきりでいる必要はないのかも知れない、と思うことができたのであった。

そうして彼は、莉緒と付き合い始めたのだった。そうして蓮は綾から「解放」されたのだった。それが恣意的な解釈であることからは、最後まで目を逸らしたままだった。

数ヶ月経った今でも、二人はまだ付き合いを続けている。

客観的に見て、莉緒は周囲の羨望を集める美貌を持っているうえ成績は常にトップクラスという才媛であり、まさに才色兼備を体現したような女性だった。

更に惚れた弱みというべきなのか、蓮には彼女の多少わがままな性格も、魅力の一つに思えていた。都合の関係でどうしても聞けないもの以外は、大抵彼女の願いを聞いている。その姿は傍から見れば——現に時折友人たちから言われるように——「都合のいい男の人」くらいの扱いに見えなくもないのだが、蓮は、そのわがままな言動は自分を信頼しきっているからこそのものだと確信していた。

それに、二人が付き合い始めた時期に莉緒から打ち明けられた悩み——悪質なストーカーが莉緒に付きまとっているということも気になっていた。幼い頃綾と接してきた経緯から、悩みを抱えている人を放っておけない性格である蓮は、彼女を守りたいという思いも強く持っていた。

何より、これは蓮が目を背け続けていることだが、莉緒と付き合っていれば、莉緒と会っている間は、自分に依存している幼馴染のことを——綾のことを煙たく思っていることも含めて——考えずに済む、という理由も強かった。綾の依存のせいで他の関係を作ることができずにいた蓮にとって、莉緒と過ごす時間はそんな過去をやり直しているような感覚だった。何度も夢想した、自分だけの

為に使う自分の時間だった。その意味で、蓮は莉緒のことを愛しているというよりも、目を逸らしたい自分から目を逸らしていられる時間を大切にしていると言うこともできた。無論、本人がこれを周囲から指摘されても否定するのであろうが。何故なら、蓮が莉緒という女性に惹かれていることも事実ではあるのだから。

あの日――綾が蓮に対して気持ちを打ち明けようとしたクリスマス・イヴ以降、蓮は綾と少し距離をとっていた。理由はわからないが、会うことに気まずさを覚えてしまうのだった。そしてその分、彼が会っていたのは莉緒だった。

だからだろう、後ろから「蓮くん」と声をかけられたときに彼が思い浮かべたのは恋人である莉緒の顔で、振り返った先にいた綾を見たときに多少の驚きを禁じ得なかった。

「綾……？」

「久しぶり。蓮くん元気そうだね。一ヶ月くらい会ってなかったから、ちょっと心配してたんだ。よかった」

日付が変わろうという時間の暗い夜道。そんな中を綾が一人で歩いている。それに気付いた蓮は慌てて綾に駆け寄る。

「よかった、じゃない！　こんな時間に何やってんだよ!?　こんなとこ一人で歩いて、何かあったら、――っ!?」

「……」

暗い夜道。街灯の光を背にして立っている綾の顔は、至近距離からでなくてはよく見えなかった。蓮が綾の所へ近寄ったのもそのせいだった。

立ち尽くす綾の近くに詰め寄った蓮は、そのまま息を飲んだ。

視界が悪い夜中の道でもわかるほどに綾の頬は青黒く腫れ、そして綾の着ているコートにはおぞましいほどに赤黒い飛沫がべっとりと付いていた。

「綾……？」

訳も分からず、戸惑いの表情を浮かべる蓮に、綾は「えへへ」と微笑む。まるで蓮が自分を見つめていることが嬉しくてたまらない、とでも言うように。そして、微笑んだままでコートに付着した赤黒い液体を指差す。

「大丈夫だよ、蓮くん。これわたしのじゃないから。怪我したの、顔だけだったから。……う～ん。やっぱり、こんな顔で会うのはちょっと恥ずかしかったなぁ」

「そ、そうじゃないだろ、綾。そうじゃないだろ！？　どうしたんだよ、何があったんだよ！？　なぁ、綾!?」

はにかむような顔で笑う自分の肩を掴んで揺さぶる蓮の焦った顔を愛おしげに見つめながら、綾は「ふふっ」と笑いを漏らす。

「やっぱりね。タカギさんの言った通り」

「え？」

「わたしが傷だらけになったら、やっぱり蓮くん、わたしのこと見てくれた。心配してくれた」

「な、何言ってんだよ……、そんなこと、」

「思い出してみたんだ、蓮くんはいつも優しいけど、特に優しいのはどんなときだったかな、って。

そういえば蓮くんって、わたしがお母さんにいじめられた後はすっごく優し

くしてくれてたよね。それでわたし、いつもほんとに救われた気持ちになれた。そのこと思い出したらね、じゃあそういうことになってみたらまた蓮くんが優しくしてくれるんじゃないかって、タカギさんがアドバイスしてくれたの。

ちょっと怖かったけど、頑張ってよかった！　だって、蓮くん昔みたいにわたしのこと心配してくれてるし……♪」

「は？　な、何だよそれ……。何で、どうしてそんなことを」

「ねぇ蓮くん。わたし、幸せになりたい」

戸惑いの感情のままに話す蓮を遮るように発せられた綾の声は、それまでの夢見るような口調から少し冷めたものに変わっていた。相変わらず綾は笑顔のままだったが、幼い頃からずっと綾と一緒にいた蓮にはそれが本心からの笑顔でないとすぐにわかった。

――綾は今、静かに怒っている。しかし、何に対して？　蓮には、綾の怒りが理解できなかった。

「覚えてる？　子どもの頃言ってくれた、『ぼくが幸せにする』って言葉」

「……」

「やっぱり、忘れてたんだね……。いいんだよ、わたしはちゃんと覚えてたし。それに、今でもちゃんとあの言葉が心の支えになってるから」

大切なものを抱くように胸の前でぎゅっと両手を握っている綾の姿を、蓮は黙って見つめている。

「昔公園で作った砂のお城を竜宮城みたいって言ってくれたよね。全然綺麗なお城が作れないって泣きそうだったわたしを慰めてくれた。でもね、わたしは蓮くんと一緒にいられるあの場所自体が竜宮城みたいに感じてた。

ずっと時間が進まないで、ずっと楽しいことが、それこそ望めば永遠に続く竜宮城。浦島太郎を読んでから、わたしはそんな世界に、ずっと憧れてた。ううん、憧れなんかじゃない。今ならわかるの。きっとあの頃は、本当にわたしたちは竜宮城の中にいたんだと思う。だって、あの頃の蓮くんはずっとわたしのことを見て、ずっと優しくしてくれた。

やっとあの二人が死んで解放されたと思ったのに、そうしたらもう、わたしたちのユートピアは終わってた……」

寂しげな声で話しながら、綾は夜空を見上げる。

何か言わなくては。そう思って震える口を開こうとした蓮の唇に冷え切った指を当てる綾はあくまで優しげな微笑みを浮かべながら、「大丈夫だよ、無理しないで」と明るい声音。

昔から見てきた、無邪気で明るい綾の笑顔。

全く同じように見えるのに、蓮はその笑みにわずかな戦慄を感じてしまった。きっとそれは彼女の笑顔と、青黒く腫れた頬のギャップが激しすぎるせいかも知れない。

「これ、気になるの？」

不意に、綾が優しい声で問いかけてきた。それから、少しだけ嬉しそうに笑った。

「叩いてくれる人を探すの大変だったけど、頑張ったんだ。だってそうすれば、また昔みたいになれるって信じてたから」

言いながら綾はコートを脱ぎ、セーターの袖をまくる。その下から現れたものを見て、蓮は背筋を氷で撫でられたような感覚に襲われた。

健康的な、しかしどちらかといえば色白な部類に入る綾の細い腕には所々に痛ましい痣ができていて、よく見ると中には小さな針の跡も見えた。

「……っ、しばらく叩かれてなかったから、せっかく慣れてたつもりなのに忘れちゃってたみたい。痛くて怖くて気持ち悪くて、何回も泣きそうになったけど、ずっと我慢してたんだ。だってこれは、わたしが望んだ結果だもん。それに、」

「もう、やめてくれ……！」

すすり泣くように弱々しくなった綾の声を遮るように、蓮は声を上げた。目に涙を滲ませて、懇願するように綾を見つめる。

「もうやめてくれよ、綾。ごめん、俺が悪かった。綾がそんなに思いつめてたなんて知らなくて、綾を独りにしてしまった……。ごめん、ごめん綾！　だから、もう……、」

「ねぇ、何で謝るの？」

静かな夜道。小声で会話していたせいか、綾の声は響いた。

意識しないうちに思わず下げていた頭を上げた蓮を、綾は冷たい――しかし泣き出しそうにも見える――無表情で見下ろしていた。惚けたようなその顔は、今まで蓮が見たことのない表情で、喉の奥から「ひゅっ」という声にならない音が漏れた。

「謝らないでよ、蓮くん。何で謝るの？　そんな風に謝られちゃったら、何かわたしがかわいそうみたいじゃない。

違うよ。わたしは今、とっても幸せなんだよ？　去年からどこか冷たかった蓮くんが今こうやってわたしのことだけを見てくれてる。これでやっと、昔みたいになれた……」

どこか虚ろな表情で語りかける綾を、蓮は怯えた顔で見つめる。そんな彼を安心させるような笑みを浮かべて、綾は距離を詰めてくる。しかし、その表情は壊れた笑顔と呼ばれてもいいもので、綾の努力は無意味に終わっていた。

「あのね、蓮くん。確かに痛かったし怖かったけど、わたしは全然辛くなんかなかったんだよ？　あ、でも初めては蓮くんに、って思ってたから、そうできなくなっちゃったのは辛いけど……。でもほら、この首のとこ。綺麗でしょ？　この傷つけてくれたのはそのお兄さんだったんだよ？　でも、これだけでいいって言ったのに……。ここのときも、ここのときも、あと指届かないけど背中のときも、傷だけでよかったのに。男の人って、みんなそうなのかな。

あ、違うよ？　ふふっ、蓮くんは優しいもん。そんな人たちとは違うよね♪　あとね、たまに注射してから傷をつけてくれる人もいたんだよ。そしたらあんまり痛くなくて。ほら、このお腹のバツ印。う～、お腹寒いからしまっちゃうね。熱～い鉄の棒で焼かれたのに、全然辛くなかったの！　それからね？　……」

一つ一つ、綾は体中に付けられた傷を、「見せられる所だけ」と言って蓮に見せつける。まるでその一つ一つが自分の彼に対する愛情の証だと言わんばかりに。

しかしその愛しげな表情や口調と裏腹に曝される傷は痛ましく、愛情の証というよりはむしろ、クリスマス・イヴに綾の想いを拒んだ蓮に対する当てつけの

ようでもあった。

「……、今は見せられないけど、腿のところにも天使の羽みたいな傷が彫ってあったんだよ？　もうかさぶたになってきちゃったけど、一番綺麗だったかもなぁ〜。あとは……、」

「あ……、あぁぁ……！」

もう、蓮の中には目の前の少女に対する感情――といってもそれは綾の求めた種類のものではないのだが――は残っていなかった。痛ましい傷跡を嬉々として見せてくる少女は蓮にとって、自分の妹のように思っていた寺枝綾ではなかった。もはや、彼女は蓮にとって恐怖の対象になろうとしていた。

不意に、綾が思い出したように「あっ」と言って、嬉しそうな顔をする。昔から見てきたものに似た表情に、一瞬だけ安心した蓮だったが、次の瞬間、またその顔を凍らせることになる。

「蓮くん、その時計付けててくれたんだね。どこにいるときでも、何してるときでも。ありがとう。リオさん？　……と仲いいんだね。全部聞こえてたよ」

「――――っ！」

綾の前で、莉緒のことを話したことはなかった。何となくだが、彼女の名前を出すことが躊躇われたのである。にもかかわらず綾がその名前を知っている理由を悟ったとき、蓮は腕時計をつけている左手首の辺りから体中に毛虫が這い回っていくような嫌悪感と恐怖に襲われた。

そういえば、と今になって蓮は思い返す。

思い返してみれば、顔を合わせることはなかったものの、クリスマス以降も続いていたメールでのやりとりにも、蓮の行動を知っている節はあった。

「だからね、辛くなりそうなときも頑張れたの。

蓮くんは今わたしじゃない方に向いちゃってるのがちゃんとわかったから、わたしももっと、リオさんに負けないくらい頑張らなくちゃいけないんだって思えた」

偶然か冗談だろうと思っていた蓮だったが、綾の口から直接そのことについて聞かされたその瞬間に、その瞬間だけ、彼の中から彼女に対する恐怖以外の感情が消えた。

目の前にいるのは、誰だ……？

一瞬芽生えた思いは、そのまま震えていた彼の両足に伝わる。

「あぁぁぁ……っ！！」

蓮はただ走った。兄代わりの自分と妹のような綾の、当たり前に続くと信じて依存していた、二人の幼くも美しく純粋な「世界」を侵す存在から少しでも離れたくて。必死の形相で走りながら彼は、ずっと自問していた。

何故、こんなことになったのか。

自分たちの関係は、ずっと続くのではなかったのか。

そして恐怖の赴くままに彼は走り続けた。後ろから聞こえてくる声に耳を貸すことなく、ただ走った。そして川沿いの大きな通りに横から垂直に接続するように走る、少し広い車道を横切るようにして渡り終えた直後。

キィィィィィィ！！

「蓮く、」

ドッ

鈍く湿った音の後、一瞬訪れた静寂。

走り去っていくトラックのエンジン音と、赤いテールランプ。その全てが遠く感じられた。

慌てて駆け寄った先にいる幼馴染みを見つめる蓮の瞳が、みるみる震え出す。しかし、それはもう恐怖からではなかった。何故なら、すぐ足下で全身を血塗れにしている少女は、紛れもなく彼にとって大切な存在だったのだから。

音すら消えてしまったような暗い闇の中。蓮は、彼女を見下ろしながら思い返す。

彼女が自分を読んで笑う度、嬉しかった。

彼女の泣き顔を見る度、何とかしたいと思った。

綾が笑ってくれるなら何でもできる。確かにそう信じていた。

綾には、誰よりも幸せになって欲しかった。その為に助けられることなら何でもしようと思っていた。

それなのに、どうしてこんなことになってしまったのか。

開いた箱から漏れるように蘇る在りし日の記憶。それが脳裏によぎる度に蓮の心は軋むように痛んだ。記憶の中で輝いている明るい笑顔と、目の前で沈黙している冷たい顔。痛みはやがて熱となり、両目の辺りに溜まってから、止処もなく溢れた。

「綾……？」

広がり始める血だまりに足を踏み入れて、蓮は綾に近づく。

「綾、起きてくれよ、綾」

手が血で汚れるのも構わず、蓮は綾の肩を揺する。しかし、目の前の少女は何も反応しない。

「綾、目を覚ましてくれよ。ほら、風邪……ひくから……っ、もう、一人にしないから……っ。綾……っ！」

後悔の涙を流す蓮の足下で、綾は固く目を閉ざしている。

二人の上に、そしてその二人の姿を近くのマンションの屋上から見下ろしている低身長の男の上にも、脆く儚い、ちらちらとした粉雪が降り始めていた。

Track3：抱腹絶倒ナルシシズム

人間は貪欲な生き物だ。それはきっと誰でも、全部を手に入れたような「完璧な」人でも同じこと。

ある冬の暗い夜、望むものを全て手に入れて悦に浸っていた「完璧な」彼女の、青天井な欲望と、終わりの話。

電車の窓に当たった雪の粒はすぐに水のように溶けて、筋となって夜空の遠

くへ消えていった。

「雪……？」

もうすぐ下りる駅に到着する電車の中から、莉緒はその様子を眺めていた。規則的に聞こえてくる枕木の音が眠気を誘う。

彼女の着ている真新しいコートは、恋人である松嶋蓮から昨年のクリスマス・イヴに贈られたものだ。最近話題になっている人気ブランドの、しかも今年流行間違いなしと言われている新デザインのコートだ。蓮では手に入れられないのではないか、と不安に思っていたこともあって、彼からこのコートをもらったときのことは、莉緒の記憶に今でも明るく残っている。それに加えて、今日は――。

「――、ふぅ～……」

つい頬が緩みそうになるのを、深く息を吐いて堪える。

慌てて周囲を見回し、周囲の視線が自分に向いていないことを確認する。それから安心したように窓の外――段々と白くなっていく景色を眺め始めた。

ふと気が付いて携帯で時間を見ると、もう日付も変わろうという時刻だ。つい浮かれすぎて、普段は外にいないような時間まで過ごしてしまっていた。別れる間際、蓮が心配そうな顔で自分を見ていたことを思い出して、微かに微笑む。

彼女は、明日以降自分が更に幸せになれると確信していた。

『では、一月××日にメールでお知らせしますので』

あの人物は、そう言ったのだ。

そして、莉緒がそれを思い出すのを待っていたかのように、手の中で携帯が震える。

慌ててメール画面に切り替えた彼女の目に『ご依頼が完了致しました』という簡潔な文章が飛び込んでくるのと電車が終着駅のプラットホームに到着したことは、莉緒にとって幸運だったといえるだろう――もはや彼女は、顔中に広がっていく笑みと、喉の奥からせり上がってくる笑いを堪えられなかった。

漏れ始める笑い声を、艶のあるグロスが塗られた唇の中に何とか押し留めて、駅舎を駆け抜ける。そして駅前の飲み屋街の奥、人気のない所まで何とか走ってから、酸素を求めて肺が蠢くのを感じながら莉緒は声に出して笑った。

メールにあった「依頼」の完了、それはつまり寺枝綾が人として破滅したということを意味している。

夜道で黒服の人物と出会ってから一ヵ月半、待ちに待った瞬間の訪れを、紗月莉緒は心の底から祝った。

紗月莉緒にとって、自分の思い通りにならないことがあるという現実は何よりも恐ろしいものだった。誰か、もしくは何かに自分の意志を制限されるなど、彼女にとってあってはならないことだった。

だから、生まれつき容姿や頭脳に恵まれていた彼女は、極めて幼い頃から自分の味方を増やすことに執心してきた。その為にあらゆる努力を惜しまなかった――肉親を含めて、他人の期待することを察知して、時には後ろめたいことをしてでも集団の中でより優位に立てるように気を回していた。そうした努力の成

果は小学校のうちに現れ、たちまち学校の人気者になった。誰にでも分け隔てなく接する——少なくとも表面上はそう見られていた莉緒は、それを続けていくうちに自信をつけていった。そして自信に溢れる姿もまた、彼女の人気を支えるものになった。その循環の中で、彼女は「誰からも愛される理想的な少女」の仮面を見つけたのである。

莉緒は誰からも好かれる自身があった。そして好かれる為の努力も続けていたこともあって、実際に自分が好かれようとした人からは老若男女問わず、誰からも好かれてきた。

その自負がある莉緒だから、自分の手の届きそうなものと自分との距離が開いてしまうことは耐え難い苦痛だった。

自分のもの同然だったブローチをいじめっ子に取られたとき。

自分に好意を寄せていた男子が友人と付き合っているのを知ったとき。

対象に対する思い入れの大小は関係なかった。まったく興味のないものであっても、自分の手の届くものを「奪われる」ことが莉緒には耐えられなかったのだ。だから「奪われた」と感じることがあったら莉緒は全力で奪い返そうとしたし、そのときにこそ幼少期から培われてきた人身掌握術は遺憾なく発揮された。多少強引なことをしても、当事者同士のいざこざは別として、莉緒を責める者は現れなかった。彼女は、ほぼ何でも肯定される存在だった。

そんな少女時代を送った莉緒にとって、蓮との付き合いは大きなストレスのかかるものだった。

莉緒から見て、蓮本人の性格や言動は至って平凡で、可もなく不可もないものだった。しかしそれまで付き合ったことのないタイプだったことと、彼の持つ、周りの干渉を嫌う壁のような空気を好ましく思った。

そして「たまにはこういう人もアリかな」という軽い気持ちで蓮と関わり続け、そのまま恋人として付き合い始めた。しかしその段階で莉緒には一つ、引っかかることがあった——綾の存在である。

二人がまだ「友達」だった頃は、まだ気にならなかった。

しかし彼が「自分のもの」になると、少し気になることが増えてきた。

昔のことを尋ねると必ず出てくる「四つ年下の幼馴染」。

その話しぶりから窺える「幼馴染」への情愛。

時折自分の頼みよりもその「幼馴染」を優先すること。

蓮が——いや、蓮に限らず自分の恋人、友人などが自分以外の人間を優先するということを莉緒は嫌っていた。

だから、蓮が自分よりも「幼馴染」——綾を優先するという事実を思うたびに、彼女の自尊心には粉々になるくらいの亀裂が走っていた。どうにかしてその「幼馴染」を自分の世界から排除してしまいたいと思った。殺してしまいたいとすら思っていた。

しかし、莉緒と彼女の間には蓮以外に接点はなかったし、莉緒にはその理由がわからなかったが、蓮は莉緒と綾を合わせることを頑なに拒んでいたため、莉緒としては直接何かをすることはもちろんのこと、誰か第三者を唆して蓮の「幼馴染」を孤立させるという手法を使うこともできなかった。

莉緒の心の中にはまだ会ったこともない寺枝綾に対する憎しみがあり、同時

に蓮との関係にそこまで必死になっている自分への苛立ちもあった。
元々彼女は、蓮に異性としては惹かれていないはずだった。
それでも自分に好意を寄せていることはその挙動からわかっていたし、あまり付き合ったことのないタイプだから、という理由で始めただけの交際だったはずだ。飽きたら別れよう――そう思っていたくらいの相手に何故自分がここまで煩わされなくてはならないのか。逆恨みに近い怒りが莉緒の中には芽生えていた。
――どうして私が「一番」じゃないの？
幾度も、彼女は蓮にそう言いそうになっていた。
他の恋人と会っていても、彼らが莉緒のことをまるで女王か女神のように扱っていたとしても、何をしていても「完璧」な自分が蓮の「一番」ではないという思いが楔のように突き刺さって、彼女の心を軋ませる。そのストレスがいよいよ莉緒の心を本格的に侵食し始めたとき、莉緒はその人物と出会った。
蓮が莉緒に贈るコートと綾に贈るバッグを探していた夜、莉緒は別の恋人と会っていた。そしてその恋人の友人と三人で酒盛りをした帰り、深酒のせいか疲労のせいか、足取りの覚束ない彼女の前に現れたその人物は、異様な姿をしていた。
『こんばんは』
いや、まずかけられた声からして異様だった。
機械の合成音のような声。それに足を止めて振り返った莉緒は、しかしその一瞬のうちにその人物を観察し、判断していた。
彼女の前に立つ――黒い山高帽に黒い背広を着た、小学生くらいの背丈とそれに近いくらいの幅を持った――人物は、その容姿はもちろんのこと、伝わってくる雰囲気も何か気味が悪かった。しかし莉緒は、全く自分と関わりのないような相手でももめてしまえば致命的な弱みになりかねないことを、自らがそれを利用して他人を陥れてきた経験から学んでいた。
『こんばんは～』
だから、彼女は努めて穏やかに、極めて「感じのいい近所の女子大生」を演じることにした。しかし、その反応は莉緒の予想を裏切った。
『……』
その人物は、莉緒の演技に含み笑いで返し、一言言い放った。
『あなた、いつまでも無理をしていてはいけませんねぇ』
『――――っ!?』
心臓を鷲掴むようなその言葉に、莉緒は笑顔を消した。
見透かされている――そう思った瞬間、彼女の中には初対面の人物に対する敵意が燃え盛った。
『何なんですか？　あなたは』
口調も険しく、現れた黒服の人物を睨みつける莉緒。彼女にとって何としてでも「排除」しなくてはならない相手に向ける、ある意味最も彼女の本音に近い、敵意に満ちた表情だった。その表情を見て、その人物は再び静かに笑う。
『いいお顔です。やっぱり人間、素直な気持ちでいるのが一番ですね～。あなたもそう思いませんか？　あ、申し遅れました、私はタカギという者です』

無機質なはずなのに何故か表情を感じさせるその声音に、莉緒は苛立ちと同時に得体の知れない恐怖を感じて、『そうですか。ご親切にどうも、それじゃ』と吐き捨てるように言ってその場を立ち去ろうとした。その背中に一言。

『あなた、幸せになりたいですか？』

直前まで帯びていた不気味な雰囲気が霧散したその声に、思わず莉緒は警戒を解いて『はい』と答えてしまった。

そして黒服の人物――タカギは笑みを深めた。

『そうですか。では、私にお手伝いできることはありますか？　どんな些細なことでも構いませんので』

タカギと名乗る男――声がやや低めだったことから莉緒はタカギが男であると判断した――の突然の申し出に、莉緒は一瞬解いた警戒を取り戻し、訝しげな顔になる。

『は？　そんなの、』

ない、とはそれでも言い切れなかった。

タカギの醸し出す雰囲気のせいか、この人物に不可能はないのではないかという考えと、ある誘惑が彼女の心を掠めた。

莉緒には、たとえ見ず知らずの人間であっても縋りたいくらいの事情があったのだ。それでいて、自分の手を尽くしたくはないこと。自分の手を汚さずにできるならそれに越したことはない、と常々思っていたこと。寺枝綾という、紗月莉緒にとっての不安と屈辱と悩みの種。

莉緒は今、自分が立っているチャンスに気付いてしまった。

それに、莉緒にとって「こういう手合い」は初めてではなかった。善意のふりをして自分から悩みを聞き出し、適当に何か見当外れの、そうでなくても誰でもできるような親切を恩着せがましく強調して、鼻の穴を膨らませながら「見返り」を求める輩など、莉緒はもう何度も出会ってきた。タカギという男もそういう種類ならば、彼女にとって御せないことのない相手だった。

『じゃあ、さ』

そして、以前蓮のフォトアルバムから抜き取っておいた綾の写っている写真をタカギに差し出した。

『この写真に写ってる娘を、この寺枝綾って娘を人としてめちゃくちゃに壊してやってよ』

胸の奥から焦燥のように溢れ出す感情のままに、莉緒は言い放った。タカギは、その写真――真新しい高校の制服を着て、ファインダーの向こうにいる蓮へはにかんだ笑顔を向けている綾の写真――に目を落とし、口元をニヤリと歪める。

『それが、あなたの幸せなんですね？』

試すような視線に、莉緒は毅然とした表情で応じた。

『えぇ。私の幸せを願ってくれるんだったら、やってくれますよね、タカギさん？』

『そうですか。それでは承りましょう。では、成功したら一月××日にお知らせ致しますので』

そうして、ヴェール越しに輝く月の下で、莉緒はタカギに「依頼」をしたので

あった……。

「まさか、ホントにやってくれるなんてね～」

期待していなかっただけにその喜びは大きい。

タカギは莉緒にとって出会ったことのないタイプの相手――何せ、自分から申し出た「見返り」に対して、『いえいえ、お客様の満足が何よりの報酬ですから。それ以外のものは何であれ頂かないことにしているのです』と言ってのける相手――だったこともあって、期待してはいなかったのだが。

しかし、タカギがどういう手段を使ったかは知らなかったが、莉緒はこれで寺枝綾が人格的に壊れてしまったのだろうと確信していた。蓮と「幼馴染」の関係は決裂したのだ。やっと蓮の「一番」になれる――「誰からも愛される」「完璧な」自分としてのプライドを保てることを、彼女は心の底から喜んでいた。

しかし、いやだからこそか、生来の性格か憎悪の反動か、莉緒は自分の気持ちがすっと冷めていくのを感じてもいた。

理由は考えるまでもなかった。

莉緒は元々、蓮個人に対してはそれほど魅力を感じているわけではなかったのだ。ただ寺枝綾という、自分のプライドを傷つけかねない「障害」があったからこそ、蓮を独占しようと努力してきたのであり、それがなくなってしまえば――自分が「一番」であることが決まりきってしまえば――莉緒にとって蓮はどこにでもいる同級生Aくらいでしかなかった。

「もうちょっとしたら別れよっかな……」

そう呟きながら、莉緒はもう一度タカギのメールを確認する。たとえもう蓮についてこだわるところがなくなったとしても、莉緒にとってこれは自分の「障害」を排除できた記念のメールだ。もう一度くらいは見ておこう、と思ったのである。と、莉緒はメールに添付画像が貼られていることに気付いた。いつもの習慣から、「何だろう」という疑問を持つ前にその画像を開いた莉緒は絶句した。

ディスプレイ中央に、黒いアスファルトの上で血を流して倒れている綾の姿が、大写しになっていた。

額は割れて、顔からは血の気がすっかり引いている。

それ――何かがあって血だらけで倒れている綾を少し上から見下ろすように撮影された写真――は、莉緒の想像を大きく超える結末を意味していた。

「え……、え……っ！？　何、これ。どういうこと？」

タカギの口元に浮かんだ笑みの暗さを思い出して、莉緒は全身から血液が失われていくように感じた。

「え……！？　な、何でこんな……っ」

喜びは一転して恐怖に変わる。

もちろん、これは莉緒のせいではない。いや、正確に言えば莉緒が手を下したわけではない。真相としては逃げようとした蓮を追いかけた綾が事故に遭ったというだけのことだ。

しかし、莉緒はそれを含めて詳細を全く知らないし、何より、このことを計画したのは――元々の依頼をしたのは彼女だった。

恐怖と思いがけない罪悪感が莉緒の心を掻き乱す。だから、彼女は気付けなか

った。込み上げる笑いを抑える為だけに入り込んだこの人気のない路地で、すぐ後ろに迫っている人影に。彼女が背後の「り〜おちゃん♪」という下卑た低い声に気付いたときには、もう逃げられないほど近くまでその男は来ていた。

振り返った莉緒の顔が、更なる恐怖に染まる。

「た、鷹山さん……!?」

「莉緒ちゃん酷いな〜。半年も連絡くれないなんて。まだ遊び足りないってボク言ってただろ？」

鷹山という男は、外見はいわゆるチビデブを極端にしたような姿で、そしていつも汚い身なり、そして加齢のせいだけとは思えない脂ぎった不快な体臭、そして何より女性の人格を否定するような言動と体中に絡みつくような視線を、莉緒は嫌っていた。それでもこの男には、父から受け継いだ大企業経営者という地位と莫大な資産がある。だから莉緒は、他のところには目を瞑る形で鷹山と付き合っていた時期がある。

しかし付き合い始めてすぐに鷹山のおぞましい「趣味」を知ることとなり、莉緒はそれ以来鷹山と会うのをやめた。そのときの怒りようがあまりに恐ろしくて、だから見つからないように気をつけていた。しかし、今夜の彼女は気を抜いてしまっていた。それもこんな誰も来ないような路地の奥で。

恐怖に身をすくませている莉緒を、鷹山の油臭く毛深い両腕が後ろから抱きしめる。「――っ」声にならない悲鳴をあげる莉緒の耳元で、不快感を煽るような猫撫で声で囁く。

「他のババア共じゃもう慣れちゃってて、キミみたいないい反応してくれないんだよ。わかるだろ？」

「わ、わか……っ」

震える声で反論しようとする莉緒の姿に先程までの、そして普段の、自信で全身を覆った紗月莉緒の面影はない。まるで折檻を恐れる幼い子どものように震える彼女に言葉を許さないとでもいうように、鷹山がまた囁く。

「キミが一番なんだよ、莉緒ちゃん。他のぶっ壊れたオモチャなんて比べ物になりゃしない。ホントさ」

その言葉は、莉緒にとって聞き慣れた言葉だった。

雪の舞う夜空の下、街灯の光さえ希薄な細い路地。ある三人の人間にまつわる夜の物語は、終わりを告げた。

雪解けと共に訪れる、麗らかな春。命が芽吹き、別れと新しい出会いが待つこの季節においても、ベンチに座っている蓮の表情は沈鬱なものだった。

つい最近吸い始めた煙草はまだ慣れていない蓮にとって美味いものではなかったが、紫煙をくゆらせていると何だか目が冴えるように感じられる。だから彼は、病院内の――といっても建物の外ではあるが――喫煙スペースのベンチに腰掛け、独り思案する。

考えているのは、あの日――綾がトラックにはねられた日に呟いていた名前。

『やっぱりね。タカギさんの言った通り』

今は、何とか一命をとりとめたものの、ずっと病室のベッドで眠っている彼の

大切な幼馴染。ずっと守りたいと思っていた、四つ年下の少女。彼女があのように変わり果ててしまった原因が自分にあることは、蓮も自覚していた。それについては、もうどんなに目を背けたくともできないことだった。しかし、彼女の背中を押した誰かがいるのだとしたら——綾の呟いた「タカギ」がそうなのだとしたら——、蓮はその人物のことも許すことができそうになかった。

綾の前に連れて来たい。そして今、目覚めることのない綾の姿をそいつに見せてやりたい。その一心で、彼は今、タカギと呼ばれる人物を探している。

少なくとも、綾の高校にタカギという名の友達はいないようだったし、高校全体を探せば一人や二人はいたが、どう探っても綾との接点は見つからなかった。かつて綾に会ったことのある知り合いにも、タカギという名前はいない。そもそもタカギというのが本名であるのかもわからない。そして彼は、名前以外の情報を何一つ持っていない。そう、彼にはタカギを見つけることなどほぼ不可能だった。それは本人も次第に自覚し始めたことであり、自分の行為に空しさを覚えていることも確かだった。そして恐らく、その目的が達せられたとしても意味はない。もし綾に意識があったとしたら、きっと困った顔をするかも知れない。しかし彼には、暇を見つけて病室を訪れることと、そして自分とは違う方法で綾を追い詰めた「タカギ」を探すこと——そしてそのタカギに自分が持っているのと同じ罪悪感を抱かせること——しか、綾に対する罪滅ぼしの手段を思いつかなかった。

ほとんど無理なことはわかっている。

それでも……。

「おや、何かお悩みですか？」

機会の合成音じみた声が目の前から聞こえて目線を上げると、目の前に全身黒ずくめの格好をした、極端に背の低い人物が立っていた。

「あぁ、すみません。ここ座りますか？」

慌てて立ち上がる蓮を、その人物は「いえいえ、お気遣いなく」と穏やかな口調で手を振って制する。

「ん〜、やはり春の日差しというのはいいものですねぇ」

その男——顔が見えたわけではないが、蓮はそう判断した——はそう呟きながら大きく伸びをして、蓮に話しかける。

「あなた、今幸せですか？」

「はい？」

顔を覗き込むような形で尋ねてくる黒服の男を、蓮は困惑した表情で見返す。そして色々な可能性を考える。この人物が何物なのか。誰か病人の家族なのか、この男本人が病人なのか、それとも病気に苦しむ家族を見て悩む人をターゲットに勧誘活動をする新手の宗教家なのか。自分はどう答えるべきなのか。

そんな蓮の気持ちを察したのか、黒服の男は取り繕うように穏やかな口調で言葉を添えた。

「いえいえ、私怪しい者じゃございません。ただ私は人を幸せにすることを信条にしておりまして」

だから率直に答えてくだされば いいのです、と言い添える黒服の男に蓮は、「わかりませんよ」とだけ返した。男の怪しげな言動はもちろんのこと、どうや

ら笑っているらしい口元が妙に癇に障った。
「そうですか。では率直にお伺いします。あなた、幸せになりたいですか？」
それは、前の言葉以上に怪しげだった。
しかしその問いかけには不思議な魅力があるように思った。恐らく「はい」と答えればこの人物に不可能はないのではないか、と思わせるような、一種魔力とも呼べる力がその言葉には宿っていた。ただ、蓮はその言葉に一瞬目を見開いた後、寂しげな微笑を浮かべながら「さぁ」と呟く。
そこには、変貌した綾が何度も呟いていたのと同じ「幸せ」という単語への拒否感もあったし、恐らく長年の習性ではあるだろうが終始穏やかな話し口調の男に対して不快感を覚えていたこともあった。
そんな蓮の感情を知ってか知らずか、男は大仰に驚いた。
「おや珍しい。大体の方が幸せになりたいと仰るものですが。何かよほど深い事情でもおありで？」
「いや、別に、」
「いいではないですか、ここで出会ったのも何かの縁です。全く見も知らぬ他人だからこそ話せることというのもあると思いますよ？　話せば多少なりともご自分の中で悩みも整理されるというものです。案外、思いもよらなかった解決策を思いつくということだって決してないわけではないでしょう。どうです、ここは一つ話してみてはいかがですか？」
黒服の言葉には、妙な説得力があった。
だから、蓮は不承不承ながらも、自分の過去について話し始めた。
「俺には、四つ年下の幼馴染がいたんですよ。小さい頃からずっと一緒にいて、それで……」
それから蓮は、いつの間にか隣に座っていたその男に事の次第を話した。もちろん、綾の名誉に関わる内容については伏せて。ただ自分の不注意で事故に巻き込まれてしまったと言ったときに男が表情を動かしたように見えたのは、恐らく気のせいだと思った。
「だから、俺はその幼馴染の背中を押したタカギってやつを探してるんです。もちろん、悪いのは俺だってことはわかってる。俺がもっと綾に向き合っていられたら……。でも、それでも、俺はそいつを許せそうにないんです」
そう言ってうなだれた蓮に、男は同情の声をかける。
「いやぁ、それは災難でしたね。それで、見つかる当てはあるのですか？」
「いえ、ありません。そもそも、見つけることに意味なんてあるのか……。だけど、やっぱり納得いかないんですよ」
「私にもお手伝いできればよかったのですが。おや、アラームが鳴っていますよ？」
「あ、面会時間だ」
蓮は限られた面会時間をより長く綾と過ごす為に、病室の近くにいないときは常にアラームをつけている。今では会う回数が以前より減ってしまっている莉緒がよくこの機能を使っていたのを見て思いついたのだ――といっても、綾が意識を取り戻さない以上、一緒に過ごすというよりは蓮が一人で綾の傍にいるだけになってしまうのだが。

そう、綾の入院している病院に来るとき、蓮はいつも一人だった。綾には関係者と呼べる者が蓮以外にいないし、莉緒が頑なにこの病院を訪れることを嫌ったからである。理由を尋ねようとしても答えが返ってくることはなく、しかし何か酷く怯えている様子だった。

一体どうしたんだろうな――ふとそう思ったのを振り払って、蓮は病院の中へ向かっていく。

「寺枝綾さん、お目覚めになるといいですねぇ」

背後からの言葉は、蓮の耳にそう聞こえた。

「え？」

蓮がその言葉に振り返ったとき、もうそこには誰もおらず、ただそこには昼下がりの麗らかな日差しにまどろむ二人掛けのベンチが静かに残されているだけだった。

Bonus Track：君に幸多からんことを

ねぇ、知ってる？

何でも願いを叶えてくれる黒い服の人の話。

あれって続きがあるの。

願ったことは何でも叶えてくれるけど、「幸せになりたいですか？」って聞かれて「はい」って答えちゃうと、絶対に幸せにはなれないんだって。

「やれやれまったく、酷い話ですねぇ。私はただ、皆さんの幸せを願ってやまないだけなのに。聞きたくなくても聞こえてくるので確かめてみたら……」

最近実しやかに囁かれる都市伝説。

苦痛すら伴うほどに強い願いを持つ者の前に現れて、何でも願いを叶えるという黒い服を着た男の噂話。

深夜の薄暗いバーで一人、その人物はカウンター席に座っていた。そして、ネット上で広まっている噂話が掲載されている掲示板を見て、一人愉快そうに呟く人物に対して、バーテンダーはただ無言でカクテルを渡すのみである。

「マスター、そう思いません？　私はどちらの願いも叶えたのですよ。寺枝綾さんは蓮さんに自分のことを見てほしかったのです。傍にいてほしかったのです。今、あそこで眠っている彼女の傍には可能な限り蓮さんはいますよ。まさしく願い通りです

紗月莉緒さんの願いだって、叶っているんです。綾さんの人生は間違いなくボロボロになっていることでしょうからね。事故ももちろんですが、彼女はもう立派な麻薬中毒者になっていますから。それに彼女は蓮さんとお会いする前に……。ですが、そのことと蓮さんが綾さんに構うことはイコールではないのです。だから、『幸せになりたい』と言ってあの二人が願ったことは全て叶っているわけです。まったくもって問題ないじゃないですか。

あぁ、いえいえ、もう結構。そろそろお暇しますよ。私は今日も、願いを持っ

ている人を幸せにしなくてはいけないので。いやはや、今日もおいしいカクテルをどうも。では、また」

そう言って、黒服の人物は薄暗いバー「Roman des soleil et lune」を後にした。

そして、街灯の無機質な明かりに浮かび上がる妖艶な桜吹雪の中で、その人物——タカギは振り返る。

「あなた、幸せになりたいですか？」

日記

草津出
サナギトウカ
寒牛紐棟

ＥＳＳＡＹ

草津出

月曜日

目が覚めた僕は、ぼやけた目を擦りながら目覚まし時計の文字盤を見詰めた。針は十二時を回ったところを指していた。僕はもう一度布団の上に仰向けになって「もう今日も終わりか」と呟いた。

暇だ。一年を通してもこんなに暇なことは珍しい。なぜこんなに暇なのかというと、それは考えるまでもなくゴールデンウィークだからだった。

本当に何もやることが見つからなかった。大学で課題を出されていたような気もするが、そんなものがゴールデンウィークでやるべきことであるはずが断じてない。

こういう時、実家にいたころは弟か妹にちょっかいを出しては親に大目玉を食らうのが常だったのだが、独り暮らしを始めた今となってはそれも懐かしい。いまさら家族の重要さが身に染みる。

ふと思い立って、パソコンを立ち上げた。デスクトップは自分が書いた小説やら、大学課題やら、Word ファイルばかりで埋め尽くされていた。そのうち整理しないとな、と思いながらそのうちのひとつを開く。

それは以前途中で挫折した、書きかけの小説だった。時間をおいて読み直してみると、良いところも悪いところも含めて、いろいろなところが目につく。

僕はそれを読んでいて、これを未完のまま終わらせてしまうのは何だかもったいないような気がした。だから残りの半日、この続きを書くことで暇をつぶすことにした。

思ったよりも筆が進んだ。まだ完成には程遠かったが、本気でそれを目指してみるのもいいかもしれない、と僕は思った。かつての僕が構想していた話とは似て非なるものになってしまうかもしれないが、それもそれで面白い。

そうしているうちに一日が終わった。傍から見れば時間の無駄に見えたかもしれないが、少なくとも僕にとっては有意義な一日だったように思う。

火曜日

友人に誘われて、一緒に月島に行った。友人によると、『三月のライオン』というマンガの舞台だから行きたかったらしいのだが、読んだことがないのでどうでもいい。だけどマンガのほうは少し面白そうだったので、今度借りる約束を取り付けた。

月島といえばもんじゃ焼きくらいしか思いつかなかったが、本当にそれしか見どころがないくらい簡素な町だった。だけど友人は、なんの変哲もないような場所で熱心に写真を撮っていた。聞けばマンガの中に登場する場所らしい。友人はマンガ本を片手に、マンガのコマと同じ構図になるように試行錯誤をしていた。僕は彼の背中を追いながら、そこまでこだわる必要なんてないのに、とちょっとだけ思った。

昼食としてもんじゃ焼きを食べることになった。これを食べないと、お前はいったい何のために月島に行ったんだと言われかねない。

流石もんじゃ焼きで売っている町だけあって、たくさんの店が並んでいる。しかし友人は、とある店だけを執拗に推していた。どうやらそこも、マンガの舞台になっている店らしかった。

僕らはその店に入ることにした。しかし人気店だったのか、席が空くまでしばらく外で待たされた。この日は夏がフライングしてやって来たんじゃないかと思えるほど暑かったので、待っているあいだ肌の日焼けが気になった。

やっと席に通された僕らは、もんじゃ焼きを何枚か頼んで食べた。まずくはないが、値段の割には満足感が足りなかった。

友人と別れた後、僕は帰りに牛丼を食べて帰った。おいしかった。

水曜日

世間では今日もまだゴールデンウィークのはずなのに、なぜか大学があった。

暦の上では今日は振替休日のはずだ。しかし大学はそこに月曜日の振替授業を入れていた。振替休日って……そういう意味じゃないだろう。馬鹿なのか？　大学は馬鹿なのか？

最初の授業は、二限のドイツ語だった。だがあまりヤル気が起きないので、適当に聞き流した。

三限は国語科教育論だった。この授業はディスカッションが主体なのだが、これも面倒だったので、他人に適当に相槌を打って凌いだ。

四限は哲学だった。でも僕はこの授業があまり好きではなかった。言っていることがさっぱりだからだ。課題が出された。「無限存在とは何か考察せよ」というものだった。そんなことは知らんと声を大にして叫びたかった。でもとりあえず適当に書いて提出した。

五限が休講なのがせめてもの救いだった。僕は四限が終わるや否や、すぐさま帰宅した。

今日は無気力で何も手に着かなかった。このまま意味もなく起きててもしょうがない気がしたので、適当に飯を済ませてすぐに寝た。

木曜日

今日は朝からアルバイトだった。普段は本や新聞などの複写が主な仕事内容。なのだが、どうやら今日はそれのストックがないらしく、仕事がなかった。

複写するのも単純作業の繰り返しなので辛いことは辛いが、やることがない日もまた辛い。なんというか、精神的に辛い。

しかし何もやらない訳にもいかないので、社員さんに初校の確認作業を繕ってもらった。それにしてもバイトのために、仕事をわざわざ探すというのは、あまりにも本末転倒が過ぎるのではないだろうか？

そういうわけで作業を開始した。少しでも手を休めると、どうして自分はこんなところにいるのだろうという、凄まじい虚無感に襲われる。僕は頭の中を無にして、ひたすら手だけを動かし続けた。これなら誰かに責められた方が、少しはマシだったかもしれない。

さあ僕に、給料泥棒と言ってくれ！

そして帰宅してから、重要なことに気付いた。なんと今日は大学が火曜の振替だったらしい。つまり、受けるべき授業があったのだ。仕事がないのに職場に居座っていた自分がバカバカしく思えてくる。しかしいまさら嘆いても仕方がないので、一日くらいサボっても何とかなるハズだと自分に言い聞かせて、それ以上は深く考えないことにした。

金曜日

今日は文芸サークルの活動があった。まだ決まったわけではないが、今年の新入会員は二、三人といったところだろうか。別に不満なわけじゃないが、盛況なサークルが多いらしいと聞いているだけに、なんとなくもの寂しい。

今回は自分の作品を批評してもらった。ちょっと前に書いて、そのまま寝かしておいた作品だ。寝かせたので少しはコクが生まれたかと思ったが、そんなことはなかった。

肝心の評価は良いのか悪いのかよく分からなかった。ただ続編を書いてきてほしいようなことを言われたので、そこまで悪くはなかったとは思いたい。

ただ、続編を書いてくると安請け合いしてしまったのは良くなかったかもしれない。僕のデスクトップに、途中まで書いて放置している作品とすら呼べない作品が一体いくつあることだろう。

しかしこの作品のキャラは割と気に入っているので、世界を広げていきたいというのも確かにある。まあやるだけやってみるのも良いのかもしれない。

まだ案は何も固まっていないが、気が向いたらがんばろう。

土曜日

最近前髪が気になりだしたので、そろそろ散髪に行くことにした。

実は、僕には行きつけの散髪屋というものがない。というのも上京してこちらで生活を始めたころ、越してきた近くに散髪屋があったので最初はそこに行っていた。

その店のご主人はなかなか気さくな人で、彼の仕事にも特に不満のなかった僕は、三回ほどそこに通っていた。しかし不幸なことに、そのご主人が突然亡くなってしまったのだ。どうやら以前からある病気を患っていたらしい。かくして行きつけの散髪屋を失い、僕は路頭に迷ってしまったわけなのである。

だが僕は思った。ご主人が亡くなったのは残念だったが、これを機にいろいろな店を試してみるのも良いかもしれない。そう思い立って、今日に至る。

さあ今日はどこに行こうか。

大学に向かう途中に店を構える、とある散髪屋に行くことにした。こんなに分かりやすい位置にある店だというのに、どうしてそこに一度も行ったことがないのか。正直に言おう。それは、ここの店主がなんとなくコワモテだったからである。

僕は決心して、おずおずとその店に足を踏み入れた。店主が僕の顔を見て「どうぞ」と不愛想に招き入れた。僕は戸惑いながらもチェアに座る。

店主が「今日はどうしましょう」聞いてきた。僕は思わず「え？」と聞き返す。すると店主は、少し不機嫌になりながら「今日はカットでよろしいですか」と言う。ああやってしまったな、と僕は思った。しかしそっちだって不親切じゃないか！　どこぞのラーメン屋の謎ルールじゃないのだから、もっと聞き方があるだろうに。

そしてカットが始まった。僕と店主の間に、会話は一切なかった。不愛想な割に手際は意外とスムーズだった。ただ髪を切っていく中で時おり見せる店主の強引な手つきが、僕を少しだけ不安にさせた。

そうしている間に、髪型は完成した。出来上がっ

た頭だが、割かし悪くはなかった。だが、またここに通いたいかと言われると、微妙なところだ。

帰り際にカウンターでお金を手渡す。手元から離れていく五千円札を見ながら僕は思った。帰りに百円ローソンにでも寄って、カップ麺を買って帰ろうと。

日曜日

LINEというモバイルアプリケーションを利用するようになってから、毎日の生活が窮屈に感じられるようになった。昨今の社会ではLINEの他にもTwitterやFacebookなど、ソーシャルネットワーキングサービスと呼ばれるものが広く普及しているが、LINEはその中でもとりわけ、特定の個人を強く縛り付けている傾向にあるように思う。

共通の友人だけで作ったとあるLINEのグループに、友人の一人が「〇〇誕生日おめでとう！」と書き込んでいるのを発見した。僕にとって、それは寝耳に水だった。その彼が今日、誕生日であることを知らなかったからだ。

既読通知を付けてしまった僕は、ほとほと困り果てた。画面上では、他のメンバーからの祝いの通知が更新されていく。まるで、返信しない僕が悪者のようではないか！

そもそもなぜ、わざわざグループLINEでそれを言うのだ。個人のLINEで言えばいいじゃないか。普段から行事ごとに消極的な僕への当てつけか？LINEを滅多に返さない僕への嫌がらせか？

確かに、たとえ彼の誕生日を知っていたとしても何のアクションも起こさなかったかもしれない。あるいは百円のミルクティーを奢るのが関の山だ。もし本人から誕生日のことを仄めかされれば、知らなかった、で押し通せば良い。しかし誰かの要らぬ世話のせいで、それらの方法は一切通用しなくなってしまった。まったく余計なことをしてくれたものだと僕は思った。

考えあぐねた挙句、僕は取り敢えず「おめでとう」とだけ呟いた。

繭籠り

サナギトウカ

2015/05/02

今日は連休が始まる日ということでやや興奮気味。溜め込んだ未読書籍の山を崩すか、録り溜めたアニメを消化するか、はたまた艦これイベントでもやろうか、いつもはできない遠出でもしようか、どれにするか悩むことさえ楽しい素敵な時間だった。（※過去形なのは起床が午後二時だったからで、つまりおよそすべて手遅れという意味）

で、午後から出かけるのも億劫になったので今日は艦これのイベント「発令！第一一号作戦」をプレイ。連休のあいだにすべて終わらせるつもりでやるので、E1から3までノンストップで駆け抜けた。とはいえ、途中で食事とか疲労抜きの待ち時間（短時間に連続で出撃させるとキャラのパフォーマンスが下がるのだ）に読書したりで片手間であったことは認める。

それにしても、艦これというのは世界観が不定形というかはっきりしない点が特徴的だ。艦娘とはなにか、深海棲艦とは、なぜ戦っているのか、諸々のことはすべてゲームシステムとそのフレーバーのようにしか示されることはない。唯一、第二次世界大戦をモチーフにしていると思われるキャラクターやステージのデザインがあるだけで、それだって艦これの世界とどう関係するのかはまったく明示されない。

ただ、魅力的なキャラクターがあれば、いかようにもストーリーを仮託してしまえるのが訓練されたファンの習性というもので、そういう意味では、むしろこういう「すかすか」な世界観こそ艦これの魅力のひとつだったりするのかも。つまり、好きになった艦娘を、自分好みの世界観で動かしているということにして楽しめるということだが。

そこに行くと、やたらたくさんあるメディアミックス作品がそれぞれ独自の世界観を構築していたり、あるいは逆に世界観をオミットして艦娘に焦点を当てたりするのもそのへんに関係しているんだろうなあ。今どき公式アンソロジーがあれほど大量に出る作品というのもあるまい。

で、同じことが二次創作にも言えて、艦これ二次と言っても千差万別なアレコレがネットには広がっている。世界観に興味があるぼくの好みからすると、SFとかファンタジー方面に解釈されたものが特に好き。たとえば『司令艦、朝潮です！』だとオカルトに寄った解釈で艦娘とその周辺を描くし、『電脳軍事探偵あきつ丸』だとSFに寄った解釈（というかサイバーパンク）で世界を構築する。（前者はネットで読めるが、後者は同人誌なので入手困難。欲しくばコミケかその時期の委託かで買って、どうぞ）

こういうある意味で野放図な広がりは、確固とした「公式」があるとどうしてもできないことだからして、結果的に艦これはオープンワールド系のなにかとして運動している風にも見えたりする。傍証として、夕立改二の赤目表現は二次創作からの輸入だったりも。

……アニメ？　あれはどこをとっても半端だったとしか言えないから話したくない。いや、本当に二期は頼むぞKADOKAWA？

本日の読み物：

大橋崇行著『大正月光奇譚　魔術少女あやね①』読

了。
スコット・ウェスターフェルド著／小林美幸訳『ベヒモス』六〇ページくらいまで

2015/05/03

図書館に本を返しに行き、図書館に本を借りに行った。なにを言っているのかわかんないと思うのでもう少し詳しく説明すると、県外の図書館で借りた本を返し、自宅の隣市にある図書館で利用登録をした上で本を借りた。なぜこんな七面倒臭い動線を伸ばさねばならないのかと言えば、やはり中核には「カネがない」ことが挙げられる。文庫ならまだしも大判の本は税抜き１５００円は下らないからマジで高価。借りる算段がついたのは本当に幸運だった。

で、家に帰るとブックオフオンラインで買った古本の受け取りが待っていた。しめて２４冊、代引き手数料込みで３６５６円。

そんなもん買ってっからカネがなくなるんだよ！　知ってた！

それに道すがら寄ったブックオフでもＧＷセールとかでホイホイ３冊ほど買っちゃったから月初めにしてすでに財布が軽い。視野が広がりすぎて欲しい本がそこらじゅうにあるのが常態化してしまっているというのが実によくわかる、この醜態。控えめに言っても駄人間なのだが、さりとて見なかったことにはできないから、涙を呑むか買うしかない。こういうのを不治の呪いというのかもしらん。

なお、ここまでで午後五時半。十時半に出発したので七時間くらい歩き回っていたことになる。帰宅したときには疲れ果てていたが、そりゃ疲れるはずだ。

その後、日曜洋画劇場の期待のバカ映画、バトルシップの放送まで体力が保つか不安だったので仮眠を摂ることにした。……ニコニコのラブライブ二期一挙放送？　いえ、知らない子ですね。

と思ったら寝過ごした。ぐぬぬ。

本日の読み物：
古橋秀之著『超妹大戦シスマゲドン（１・２）』読了。

2015/05/04

半日ほどかけて部屋にある私物を別の部屋に移し替えた。というのも、今まで使っていた部屋をこんど実家（つまりぼくの家でもある）に帰ってくる姉が使うからなのだそうで。だもんで、１階にある前の部屋を引き払って、二階の次の部屋へと運びこむことになったのだ。

と、書けば非常に短く済むのだが、軽く一〇〇冊を越える数の本を箱に詰めては階段を登り降りする繰り返しにはさすがに閉口した。文庫本が大半だとはいえ、それだけで総重量はたぶん数十キロくらいにはなったろうし、その後には本棚も移動させなければならなかったから、その重労働たるや。数回の休憩をはさみつつ終わらせてみれば、それだけで日が暮れていた。うわあああ、せっかくの休日があああ。

ついでに、またぞろ届いた古本（今度はアマゾンのマーケットプレイス）のうち一点が誤配送で別物だったのでテンションがさらに下がる。問い合わせたら正しいものを送ってくれるということになっ

たので多少は持ち直したが、すぐに読めないというのはやはりつらい。積み本がいくつ溜まろうとハシゴ外しは気分の問題だからな。

あ、そうそう。艦これのＥ５クリアと、Ｅ６でローマを入手できたことを報告しておく。自慢話かと思うかもしれないが、そのとおり、自慢話だ。なにしろ一回目の挑戦でドロップしたからな、これは自慢せねばなるまいて。高波の件もあるし、ここ数日はきっとなにかが憑いているに違いない。どうだ羨ましかろう。

ほんのちょっとだけ、報われた気分である。

本日の読み物：
わかつきひかる著『リバースツインズ』読了。

2015/05/05

今日は端午の節句だが、特にそれらしいことはなにもしなかった。ただ、サークルのＯＢと一緒にボードゲームを遊んだので、もしかしたらそれだったのかもしれない。

あとは家で宿題などをした。今日は本当に書くことがない。

なので、というつながりもあまりないが、今日した読書の話でもしようと思う。現在ぼくはオカルトパンクという際物ジャンルにハマっているのだが、これはオカルトがある種の技術体系として科学と同じかそれ以上に文明の基幹となっているような類の物語を指す（とぼくは思っていた）。しかしながら、単に魔法が十分な発達を遂げた社会であればいいのではない、ということにはこれを読むまで気付いていなかった。つまり、最前の定義だと、たんにオカルトを扱うエブリデイ・マジック系の物語も射程に含むことになってしまう。これ、あんまり雑な理解なんで我ながら嫌悪感を覚えた。パンクとしての条件をもっと厳密に考えておかないとほかの領域と区別がつかなくなってしまうのだよなあ。そうなるともうジャンルとして括る意義すらなくなってしまう。

そこで、たとえば『とある魔術の禁書目録』のような作品は、オカルトも科学も登場はするけれどもパンク的な融合はしていないよね、という点で除外してみる。そういう意味でオカルトパンクを考えていると、『されど罪人は竜と踊る』や『煉獄姫』はオカルトパンクっぽさがある。ついでに『ストライクウィッチーズ』もそれに含まれるのではないかと気付いたときには腹筋が痙攣した。といっても、さすがにコレは語弊が大きすぎるような気もするが、まあ一応ね？

というわけでこの後めちゃくちゃ反省した。かくのごとく過去の自分を二分間憎悪することでぼくはまた一つ成長するのである。

なお、Ｅ６はついにラストダンス。延々と続くキラ付けに目が曇ってきた。間宮と伊良湖がニヤニヤしてこっちを見ている。

本日の読み物：
牧野修著『呪禁捜査官　訓練生ギア』読了。

2015/05/06

なんで祝日なのにうちの大学は講義があるんだよ？　まあ言っても仕方ないのでここでやめるが、

もうちょっと休ませてくれてもいいのにねえ。

というわけで本日より通常業務に復帰。日記もそれに応じて楽しい話題も少なくなるだろう、というかなる。E-6甲もレア艦掘りもバケットチェーンエクスカベーター捕獲も終わっちゃったし気軽に書けることはもうあまりないので。

まあ、今日は空き時間に白石晃司監督の映画『カルト』を観たので、その感想でも書いておく。

この映画はいわゆるフェイクドキュメンタリー、もしくはモキュメンタリーと呼ばれる形式のホラーなのだが、それだけだと評価の半分にすぎない。というのも、人が呪い殺されたりするのは本編のおおよそ半分までであり、もう半分とはなにかというと異能バトルである。

異能バトル。

なにを言ってるのかわからねーと思うが、ぼくもなにを観たのかわからなかった。いや、序盤はちゃんとオカルト物件に体当たり取材からの、霊能者の雲水先生および龍玄先生による「スゥー、セイッ！」と耳に残る喝とか真言だったりで雰囲気出てるなあ、と感心していたのだ。それがなんか三浦涼介扮する「ネオ（仮名）」が登場したあたりから、あたかもヒーロー物のような快刀乱麻の如き解決編に突入し（そういえばこの人、仮面ライダーオーズに出演してたよな）、あれよあれよとわけのわからない展開まで引っ張りだされ、目がぐるぐるしてきたあたりでズゴゴゴとエンドロールが。

どういうことなんだ、いったい。面白かったはずなのに、それを説明できない。勢いだけで駆動するB級映画かとも疑ったが、思い返してみると伏線バッチリ仕込んであるし、設定にも違和感がない……キャラの言動ひとつひとつのそれ自体がツッコミどころでしかないのにもかかわらず！　挙句の果てにはひょっとしてこれ、傑作なのではとさえ思えてくる始末。まだ観てないひと、いっぺんは観るとよいと思う。肌に合うかどうかは知らないが。

あとＤＶＤに収録されてた予告編、これ内容に偽りありすぎじゃねえかな。まあ、一周回ってかえって面白いのでよかったです。

本日の読み物：

マーク・ホダー著／金子司訳『バネ足ジャックと時空の罠　上』三分の一くらいまで

『ベヒモス』一〇〇ページくらいまで

2015/05/07

二日遅れでちまきだのかしわ餅だの食う。季節感とかあったもんじゃねえけどおいしいものは正義。なにしろ古事記にも書いてある。

今日は講義が午後からだったのでのんびり本を読んでいた。おかげで捗る捗る。借りた本は読み終えることができたので、土曜日にでも返却して下巻が借りれるかどうか調べてみよう。あと、ＴＳＵＴＡＹＡで在庫検索をかけたところ、ぼくの移動範囲内に白石晃司監督の映画をだいたい揃えている店舗があるということが判明したので、それも併せて済ませるつもり。

本日は以上。いや、書き出すと本当にやったこと少ないし、ボンクラっぽくないことを書こうとするとあまりにも込み入ってるので無理というか、量が膨れすぎる。申し訳オブザワールド。今日は本当にほぼ翌日以降の準備で終わったようだ。

本日の読み物：
『バネ足ジャックと時空の罠　上』読了。
『ベヒモス』一三〇ページくらいまで

2015/05/08

本日は当サークルの読書会。今回は四作品を対象に批評をした。どれも非常に特徴的な作品で読みごたえがあった。それが即、面白さを意味するわけではないのが難しいところではあるが、こうして色々な作品に触れることで書く方はもとより読む方も得るところがあるだろう。

あと、純粋に作者に対して好き勝手に物申せるフィールドというのがとてつもなく愉しいというのもある。もっとも、手を抜くのは最もたるシツレイだと信じているからね、本気でやるよ。面白くなるといいね？　※個人の感想であり効果には個人差があります

なお、帰りしなに『スチームパンク・バイブル』を購入。税込み三六四二円なり。こんなもん買ってっから（以下略）。

本日の読み物：
『ベヒモス』二四〇ページくらいまで

2015/05/09

寝坊したことに気付いて変な声を出すまでが休日の始まり。気付いたら午後二時だった。またかよ。

まあ、今日については出かけないという選択肢はない（なにしろ延滞はカネがかかりすぎる）ので四十秒ほどで支度をして自転車に飛び乗る。

で、本を返して借り、ＤＶＤを返して借り、あと本を買った。

つまり、『バネ足ジャック』の上巻を返し、下巻を借りる。『カルト』を船橋で返し、西船橋で『ノロイ』『ある優しき殺人者の記録』を借りる。ついでに帰りしな本屋に寄って電撃の新刊から五冊を購入した、ということ。今月はサイバーパンクだのスチームパンクだのオカルトパンクだのとキワモノが揃って新刊で出てるのであらすじ見てから即購入余裕。このラインナップからすると、やはり最近パンクＳＦが流行しだしているという感覚は正しいと思う。攻殻機動隊は復活するし楽園追放はヒットするし、もう枚挙に暇がない。これ絶対流行ってるって。いまのぼくのマイブームがまさにパンクＳＦということもあるし、乗るしかない、このビッグウェーブに！

それはそれとして『ある優しき殺人者の記録』の感想。『コワすぎ！』の一巻を借りれなかった腹いせに借りた同監督の最新作。やはりモキュメンタリーなのだが、舞台が韓国というところでカネかかってるなあ、と思った。物語としては、「神のお告げ」を信じて殺人鬼となった男を、その幼馴染であるジャーナリストが取材に行くという筋立てなのだが、それだけだとお話の半分ほどでしかない……ってこれ前にもやったな。残りの半分は、目がぐるぐるする体験をこんな短期間にまたするとは思わなかった、とだけ言っておこう。

『カルト』に引き続いて二作目となる鑑賞だが、この監督が撮る映画のすごいところは異質な価値観で動く人間をよりリアルに描いている点にあると

個人的には思っていて、この映画もまたそこに見どころがある。狂気に陥った人間を、狂気であることを崩さず、観ている人間へ説明なしでわかるように描写するという離れ業を映像で観られるのは本当に貴重な経験だ。

つまりなにが言いたいかというと、野生のチンピラはすごい。なにを言ってるのかわからない？　ならTSUTAYAにでも行ってレンタルしたまえ。ただ、グロテスクだったりエロティックだったりする過激な映像も含まれるので、そうしたものが嫌な人は回避推奨だ。

本日の読み物：

『ベヒモス』三六〇ページくらいまで

2015/05/10

本日がこのエッセイもどきの最終日なのだが、それにふさわしいなにかをするべきそうすべきと心の中のブロントさんが囁くので、新宿はNaked Loftにて開催されたT-LINEノベルス作家陣によるトークライブ”「エンタメ文芸」って何だ！？”に行ってきた報告でもしようと思う。最終回スペシャルで文字数も大幅増量である。喜べ。

とはいえその前に、「T-LINEノベルスとはなんぞや」と疑問符を浮かべる人間もいると思うのでちらっと解説すると、これは今年二月に創刊されたばかりの新レーベル。名称は”Tatsumi Literature Nova for Entertainment”の文字を拾ったもので、「漫画・アニメ的なキャラクターを登場人物としながら、いつもはライトノベルではない小説を読まれている読者の方にもより多く手にとって頂けるような小説」がコンセプト。判型は最近いろんなところが出してる流行りの四六判で、お値段一〇〇〇円ちょっとややお高め。もっとも、イメージ曲付きのPVを全作品に展開して宣伝しているのを含めると、むしろ安いという考え方もある。というか、文庫よりも大きくハードカバーよりも薄い本の値段だったらこれぐらいが妥当でしょ実際。

作家陣にはライトノベル作家をはじめニコ動の歌い手（！？）や児童文学作家や文芸誌で活動する作家など多彩な布陣であり、そこから注力の具合もわかろうというもの。

で、トークライブの話。大橋崇行氏を司会に、竹林七草氏、ヤマイ氏、村松茉莉氏（順不同）を迎え、作品の紹介やそれにまつわる四方山話が披露された。休憩を一度挟みつつもなかなか場は盛り上がって、特に司会を務めた大橋氏がたいへん気さくな人柄だったこともそれを手伝っていたのではないだろうか。もっとも、それはそれとしてあんなにぶっちゃけた話しちゃって大丈夫だったのか、思い出している今でも疑問だったりはする。あまり他レーベルの話はしないようにしようと決めていたんじゃなかったんですか先生！　いいぞもっとやれ。

いろいろと面白い話が聞けたものの、それらはやや取り留めもきりもないので申し訳ないが割愛。個人的に思うところ大だったことだけ以下にまとめる。

・今まで物理書籍のみで展開してきたT-LINEノベルスだが、五月一五日から電子書籍事業も展開するとの由。ただし、その編集作業のため新刊は遅れる。一人しかいない編集者がすべて回しているということなので、まあそりゃそうなるだろ。

・作家陣は、同レーベルで本を出している大橋崇行氏が名前をピックアップしたのをスカウトしたとのこと。ついでに言えば、どうも氏がレーベルの創刊や編集にも（！）深く関わっているらしい。作家と編集の垣根ってそんなに低いものだったっけ。いや詳しく知らないで言ってるんだけど、まあ本人が言ってたんで事実なんじゃねえかなあ。閑話休題。

・レーベルのカラーというか作品ジャンルの方向性があまり定まってないとトーク中に言及された。確かにホラー、ＳＦ、伝奇、魔法少女、ハードボイルドにと雑多だが、そんなまだ創刊して半年も経ってないのにそんなもん決められるわけもなし、むしろ今は自由にやって可能性を模索するべき時期だと思う。それになにより、ライトノベルというもの自体、表現のコードはともかく内容が自由すぎてカテゴリが定まらない鵺のようななにかじゃなかったろうか。そこを繋ぎ止めている要素こそ、Ｔ・ＬＩＮＥのレーベルコンセプトの「キャラクター」というわけで、うむ、現状どこもおかしくはないな。むしろ雑多なほうが読者層のハブとしては有効なんじゃないかな。

また、物販は当然として、色紙やポスターのプレゼント企画があったり限定のレーベル作品ショートストーリーが配布されたり、イベントはファンサービス盛りだくさんで、むしろこのために来てもよかったと言っても過言ではない豪華ぶり。サインも貰えたしぼくはとても嬉しい。次回なんかあったらまた行こうと思ってしまう。

……しかし、これだと本格的に回し者に見えるな、ぼく。ぜんぜんそんなことはないはずなのだが。

本日の読み物：

『ベヒモス』読了。

『バネ足ジャックと時空の罠　下』二〇〇ページくらいまで

倦怠記

寒牛狃棟

二〇一五年四月十九日(日)

午を過ぎて二時頃に起床。たいして食べるものが無いので、棚に置いてあったチョコレートを食べる。米を砥いでから、買い物に出た。アパートの室を出て直ぐの塀の上に黒い紙コップが置かれている。最近流行っているコンビニの珈琲のカップで、向かいのシェアハウスに住む外国人が放置したものだ。中には、烟草の吸殻と羽虫の死骸が泛んでいる。

スーパーへの道中、猫を二匹見た。一匹目は、一軒家の郵便受けの上に丸まっていた。もう一匹は、アパートの花壇に沿って歩いていた。郵便とポストモダンが近縁性を有つのは、言葉の遊び以上に意義の有ることなのだろうか。ぼくの室の郵便受けに入ってくるのは、公共料金の支払書と新聞の勧誘広告、知らない宗教の宣伝、政治家の名刺とビラ、区の刊行物、それから、あきらかなボロアパートだというのに、寿司屋の出前表や宅配ピザの註文表、それくらいだ。これらの紙切れを一枚一枚吟味して、生まれてきた構造を解釈したらおもしろいだろうか。だが、もうポストモダンの時代も終わったらしいので、きっと無意味だ。

スーパーでは主にお酒を買った。発泡酒とウィスキーだ。それはそうと、朝御飯に食べるパンを買い忘れてしまった。最近、まともに朝御飯を食べていない気がする。独り暮らしの災禍かもしれない。明日の朝は恋人のいるやつらを呪いながら珈琲を飲もう。

夕飯には野菜炒めをつくった。これぐらいしか料理が出来ないのだ。玉葱の表面にカビが生えていたが見なかったことにした。皮を剥けば大丈夫だろう。玉葱の皮を剥くと言えば、つい先日、ギュンター・グラスが鬼籍に入った。ぼくですら知っている名前が亡くなっていく。昨年にはマルケスが沒った。渡辺淳一もそうだ。まどみちお、宇沢弘文、赤瀬川原平……。

一昨年の暮に大滝詠一が亡くなってから、どうにも訃報が目につく。筒井御大も……と、不謹慎不謹慎。とりあえず、今年のノーベル文学賞はウンベルト・エーコに贈られますように。これも不謹慎か。

二〇一五年四月廿日（月）

今日はアルバイトへ。朝から夕まで雑誌の複写をする。夕方は、それほど雨は降らないだろうと思っていたが、かなりの風雨。

今日から、リチャード・ブローティガンの『西瓜糖の日々』を読み始める。「わたしの名前」という節がとても好い。『西瓜糖の日々』だけは、ブローティガンの文庫化作品の中で、書店を回っても見つからなかったのだが、先日、古書店で発見して直ぐ様購入した。ところで、「わたしの名前」は、想い出や追憶、郷愁だろうか。つまり、thought なのかもしれない。trout とちょっと発音が似ている。鱒と記憶。そう言えば、鮭は匂いを恃んで川を上る。鮭の場合、懐かしさを嗅覚によって知覚するのだろう。ブローティガンの場合は、それが西瓜の味なのだろうか。鮎の匂いが西瓜の匂いに似ているという話もある。川魚と西瓜には繋がりがあるのかもしれない。

それはそうと、ブローティガンのこの作品に、老人と家具の馴染みの描写が出てくるが、これと同じ

描写は『芝生の復讐』にも出てくる。

あたかもキャメロンは四六時中その椅子に腰かけているような印象をあたえた。彼の魂がその椅子を支配していたからだ。老人はそこにすわって生涯を閉じる家具とそのような関係を結ぶ。（リチャード・ブローティガン『芝生の復讐』、p.119、新潮文庫）

チャック爺さんの話し声はもうなんだか間のびして、かれがあたかもずっとその椅子にすっぽり嵌ったままの人間ではないかと思えるほどに、からだからもしだいしだいに力がぬけてゆったりとしてきた。両腕は西瓜糖の上に、そっと置かれていた。（リチャード・ブローティガン、『西瓜糖の日々』、p.36、河出文庫）

こうして並べて見ると、家具を支配することが何か重要な意義を帯びているようだ。ギリシャ語で実体を意味するウーシア ousia が土地とか家財の意味だと何処かで見た気がするが、家具を、本質を支配することが老成すること、人間性が成熟すること、時熟すること、そのような意味がこの描写に表されているのではないかと思わされる。これは、解釈でも批判でもなく、テクストへの披繙だ。ぼくは、批判という言葉より、披繙という言葉の方が好きだ。拒否ではなく、紐解き、広がりを与えることの方が、きっと意義深いはずだ。

2015年四月廿一日（火）

今日は大学で一日授業。二限の講義は、若い先生だったが、あまり面白くなかった。こういうのをテクストの知覚、経験の再活性化を促すようなテクストの知覚と呼び、ほんとうに面白い読まれるものとしてのテクストとは称ばないのだろう。つまり、読みしろが、空気が尠いのだ。その意味では三限の講義の主題であった現象学のような読み方でもない。主観性ではなく、テクストの有つ、超越性とでも呼んだらいいのだろうか、なんらかの性質を中軸にした読み方が面白さを披繙するのかもしれない。解釈学だろうか。いや、やはり現象学なのかもしれない。テクストの有つ性質とは、きっと交差性だと思う。それを披繙するのだ。あてずっぽうだが。

四限はカントについて。ヘルマンとヘルダー、興味深い。五限は徳倫理学。そのうちアイリス・マードックのテキスト、もちろん小説作品ではなく哲学関係の作品、を使うようなので、それだけが愉しみ。マイケル・サンデルは哲学じゃないと言っていたのは誰だったか。浅田彰だったかな。トマ・ピケティも一緒に批難していた。みすずも堕ちたとか。

これを書いている今の時刻は、午前三時である。何故かと云えば、友人と Skype で通話していたからなのだが、こういうことは週に何度かある。お互いに暇なのだろう。とは言うものの、ぼくは今忙しい。進路調査希望カードだかなんだかいう使い途のなさそうな書類を出したばかり、今度はサークル継続願とかいう時代遅れの書類を書かなくてはならない。顧問にメールを出し、書類の捺印を求め、いわゆるアポを取る。こんな書類を書かせるくらいなら、学生部の事務員の馘首を求める署名を書いた方が幾分マシだ。かれら、態度の稚拙さが目立ってしようがないのだが、例えば、「和暦ってなんすかァ」

と大声で叫んだり、質問をしても「っすねえ……」などとチンピラも興醒めするような生返事をしたりする。和暦がわからないというのも相当だが、知らないならこっそり調べるとかすりゃいいのだ。駄駄を捏ねて人の救けを待つなど幼児のすることだ。なぜこんなののために学費を納めなくてはいけんのだ。莫迦莫迦しい。

　些し疲れが溜まっているようで、やや愚痴っぽくなってしまったが、自らの首を絞めて搾り出した大事な金なのだから、野卑なかれだってちょっとは藁人形になってくれてもいいだろう。

　この後、少しだけ眠って、この少し寝るというのが大変なのだが、アルバイトへ出なくてはならない。ので、書き終えようと惟ったが、最後にちょっと。

　ブローティガンの『西瓜糖の日々』を読み終えた。とても面白かったのだけれども、いま細細と感想を書いている暇がない。主題は「死」とか「不在」とか解説にあった。「過剰な不在」だったかな。確認する暇もない。そんな風に言われると、いやいや「現前」こそが主旋律だとか言ってみたくなる。それにしても、舞台の名前は「アイデス iDEATH」というのだが、アイデスという発音が字面と不釣り合いに楽しげだ。それと、語り手、ここでは書き手と言った方が適切だが、名前の無い「わたし」という人物の名無しという居方も考えさせる。こういうのが、空気の有る作品で、披繙され得るテクストだろう。風景が有る。でも、不在なのだ。それが、この作品の緒だろう。やはり、あてずっぽうだけど。

二〇一五年四月廿二日（水）

　今日はアルバイトの日。月曜日と同じ作業。井上陽水の「灰色の指先」を思い出す。あれを聞くと葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」を連想する。そう言えば、河川敷に混凝土像を作っていた男が書類送検というニュースをやっていた。長野の上田だった。上田には一度行ったことがある。ちょうど去年の今頃だ。次に長野へ往くのなら、黒姫童話館を訪いたい。エンデについての演習が毎週金曜日にある。演習の題材がエンデなんて素敵じゃないか。倫理学なんかより数段好ましい。前回と前前回は、先生の雑談が中心だった。

　ぼくは、大学の講義やなんかは雑談を聴くためのものだ、と思っている。テクストを読むなら、自分で読めばいいのだ。と言うか、他人の読んだテクストは、もはや読みからは逸れて、聴覚、知覚の対象になってしまう。これでは、テクストを読んだことにはならない。だから、読解を取り除いた講義の構成要素は、雑談ということになる。かなり言い過ぎだけども。

　テクストを聴いたり、嗅いだり、見たり触ったりすることは、出来る限り自分で行わなくてはいけない。味わうことは、ぼくにとったら、ぼくの口を通してしか出来ない。独立独行だ。テクストを読むことは、趣味の問題かもしれない。

　誰かが趣味としての哲学は有り得ないと言っていたが、ぼくは哲学というのは趣味でしか有り得ないと思いたい。労働としての哲学なんていうものがあったら、きっとセメント樽の中の世界だ。ひょっとすると、大学の哲学科はセメント樽だ。そもそも某蕩揺大学じたいが、と言うと差し障りがあるだろうか。でも、先述のエンデの演習の先生も似たようなことを言っていた。

今日はブローティガンの『ビッグ・サーの南軍将軍』を少しだけ読んだ。ブローティガン作品の文庫で出ている幾冊かで、まだ読んでいないのはこの『南軍将軍』だけだ。これを読み終えたら、藤本和子の評伝を読む。それから、単行本で出た作品を古本屋でも巡って集めよう。もしくは、ピンチョンの作品でも読もうかな。いや、アイリス・マードックを並行して収集しようか。

明日は大学だ。行きたくない。西田幾多郎も選科生の待遇の悪さを嫌って余り大学が好きではなかったようだが、哲学科そのものが大学における選科生のようなものだ。特殊学科とか被差別学科とか称んでもらって、水平運動の起こるのを待ちたいところだ。

二〇一五年四月廿三日（木）

この日は大学。一日中眠気がひどかった。おかげで記憶が薄い。この日は、帰ってから直ぐに寝てしまった。確か、五時くらいだったと思う。起きたのは、零時に外で外国人が騒いでいたせいで一度だけ。その後、朝七時まで二度寝をした。

二限はマッハのテキスト。三限は芸術をテーマにした演習。

洒落た映画館で自信ありげに教養の香水のにおいをプンプンとさせている連中と一緒に審美感覚をくすぐられてみたいとは思わないのだ。そんな金はない。（リチャード・ブローティガン『芝生の復讐』、藤本和子＝訳、新潮文庫、p.140）

美はこの世でもっとも理解しにくいやつさ。セックスに飢えたティーンエイジャーの真似をすることはないよ。宿命論の勝利者になることはない。人生はそんなものを引きずってまわるには、ちょっとばかり短かすぎる。（リチャード・ブローティガン『愛のゆくえ』、青木日出夫＝訳、ハヤカワ epi 文庫、p.77）

芸術なんて聞くと、右の言葉を思い出す。この授業なにが怖いかと言うと、みんな、具体性を帯びた、人生経験を基礎にした、みずからの芸術性を披瀝するために虎視眈眈としているのだ。

この日は、現象学とキュビズムだかいうテーマの発表だった。ぼくには、珍文漢文であった。現出と現出者がどうこう。観念論と何が違うのだろう。思念とか観念の実在性を説くバークリとどこか違っているのだろう。それにキュビズムと現象学のどういったところが重なるのだろうか。経験は、現象学的還元を果たすと、キュビズム絵画の世界になるのだろうか。

ちょっと慇懃無礼な発表だったし、自信過剰な感じが薄ら寒かった。

四限は西田幾多郎の話。鈴木大拙が話題に挙がっていた。やはり、当時の思想を理解するには、鈴木大拙は外せないか。ハイデガーも鈴木大拙を褒めていた。

そう言えば、柳宗悦とウィリアム・ジェイムズとの結節点として、ウィリアム・ブレイクを上げられそうだ。そんな本が出ているそうだ。しかし、値段がすこぶる高価い。そんな金はない。

二〇一五年四月廿四日（金）

今日も大学。一限から授業。ちょっと寝坊した。ぎりぎり九時に到着した。一限は倫理、二限はエンデ、三限はプラトンの話だった。前日に続いて眠気がひどい。

昼休みになってから、学生部に教室を借りるために書類を出しに行った。書類を出すと、学生部の、アルバイト君みたいな、浜辺に上陸した半魚人みたいな事務員が「空いてないっすね」とぽつり。えっ、じゃあどうしたらいいんですか、と訊き返す。「は？」と何故か半ギレ。もう一度訊く。「はぁ？　借りらんないっすけどぉ？」と苛立たしげ。しばらく睨め合う。他に教室は借りられないのかと尋ねても、無言のままでそっぽを向いてしまう。仕方なく、予定通り図書館に学習室を借りに行く。なぜ学生部の事務員はあれほど態度が悪いのだろうか。余談だが、教務部の窓口も態度が稚拙だ。いったい何処から雇い入れたらあんなのがやって来るのだろうか。

サークルには、二人、見学者が来た。これで、見学に来たのは五人になる。継続して宣伝に力を容れなくてはいけない。ホームページも、もう少し整理しなくてはいけない。

さて、リチャード・ブローティガンの『ビッグ・サーの南軍将軍』を読了した。これで、文庫化作品は読み終わったことになる。それから、藤本和子の評伝、『リチャード・ブローティガン』を読み始めた。とてもおもしろい。ブローティガンに何故惹かれるのかが判った。読み始めたのは、どういう経緯があったのか憶えていないが、やはりそれなりに魅力があったのだろう。たぶんだが、どうも苦労人の書いた文章に魅せられるようだ。だからと言って、ぼくが人より苦労しているとか、苦難に満ちた人生を送っているというわけでは無い。

二〇一五年四月廿五日（日）

休みの日は、どういうわけか、決まって午后の二時に起きる。目が醒めても特にすることが無いので、ネットをチェックする。随分前に、海外の掲示板にハイデガーの「世界-内-存在」という語について、『茶の本』の独訳の影響だという話がある、と書き込んだのだが、それについて詳しく調べてくれた人が投稿していた。それに拠ると、『茶の本』の独訳では、「arts of being in the world」を「Kunst des in-der-Welt-Seins」としているそうだ。ちなみに、この語は「処世術」のことだ。つまり、たんに「世に処る」というだけでなく、「世において処する」という覚悟を有った態度を意味する。

他にも、こういった東洋思想の影響はラカンなどにも見られるそうだが、アガンベンの『開かれ』をパラパラと眺めていると、コジェーヴの「日本的スノッブ」という考え方を紹介していた。いわく、戦中戦後の西洋は日本化することで、人間で在り続けたとか。

関係はないかもしれないが、日本にすることが日本化なら、茶にすることは茶化すことになる。茶化すことはパロディである。パロディにはユーモアを求められる。すなわち、人間性を前提にした行為がパロディだ。

それはそうと、『茶の本』で「処世術」という語の出てくる箇所は次の通りだ。

道教がアジア人の生活に対してなしたおもな

貢献は美学の領域であった。シナの歴史家は道教のことを常に「処世術」と呼んでいる、というのは道教は現在を――われら自信を取り扱うものであるから。われらこそ神と自然の相会うところ、きのうとあすの分かれるところである。「現在」は移動する「無窮」である。「相対性」の合法な活動範囲である。「相対性」は「安排」を求める。「安排」は「術」である。人生の術はわれらの環境に対して絶えず安排するにある。道教は浮世をこんなものだとあきらめて、儒教徒や仏教徒とは異なって、この憂き世の中にも美を見いだそうと努めている。（岡倉覚三『茶の本』、村岡博＝訳、岩波文庫、p.47）

例えば、文章を読んだ感想というのは、十人十色。だからこそ、文の藝術というのが求められる。そんな「文藝」がすることと云えば、単純に美文を求めるというだけではないだろう。世に在って、何かを整え、糺し、ひとつの現在を綴じることにあるのではないか。そして、そのような過程を通して、人の相互の交わりを可能にするkönnen作法が文の藝術Kunstかもしれない。そんなわけで、文藝サークルなんてものが細細と続いているのでしょう。

着物の格好や色彩、身体の均衡や歩行の様子などすべて芸術的人格の表現でなければならぬ。……というのは、人はおのれを美しくして始めて美に近づく権利が生まれるのであるから。（同前、p.91）

ちょっといい感じで締めようと惟ったけど、こんなことが書いてあった。どうやら、ぼくには文藝についてとやかく言う権利は無かったようです……。

寸　評

・『夢追い人、夏影を踏む』

じつは続編である今回、コタロー青年とその姪であるカナちゃんは夏祭りに行く。あとは作品のほうで確かめてほしいのだが、この二人のさりげない仕草が示すこころの動きと、そこから伺える関係性が絶妙なのである。カナちゃんは大人ぶりたい幼さとコタローに対する無防備な信頼が見え隠れするし、コタローもコタローで一人称の語りから垣間見えるぶっきらぼうな優しさがすばらしい。しかも、前作では大学生だったコタロー君は無事（？）卒業してマンガ家志望のフリーターをしているようだが、そのうだつの上がらなさがまたよい。そうして大人になりきれない夢追い人のコタローだからこそ、小学生のカナちゃんと同じ目線に立てるし隣に立つことができるのだろう。そういう意味で、本作は異世界を描くよりもなお、ファンタジーである。

あと個人的に、作者様におかれましては続編を書いていただきたい。なにとぞ。

・『ＴＡＫＥＲＵ』

こちらも三題噺（「窓・本棚・ゴールデンウィーク」）の作品であり、『炎の町』とは対照的にステレオタイプのボーイミーツガールの一幕を描く。ある女性大学生のモノローグで構成される本編は、何気ない彼女の行動とそれに伴うとりとめのない思考によって進行してゆく。一人称の利点のひとつは、まさにこうした主観的な文章を成立させることができるという点にある。そういう意味でこの作品はじつに一人称的であり、彼女の行動と思考を通して物語を「解読」するのはとても楽しかった。とはいえ、一人称であることを置いても悪文が目立ちがちであることは認めねばなるまいが。お題の「窓」を消化する際に村上春樹の『バート・バカラックはお好き』を引いたのは上手い（これはのちに改題されて『窓』になる）。

・『炎の町』

今回の作品中、最も思想的な面が露骨な作品。現実の世界においては鼻につくだろうあれこれも、フィクションであるならば善悪の問題からは（作中の世界に描かれるものを除いては）自由になれる。さもなければピカレスクロマンなんてジャンルは成立しないだろうから。だから、思想的な偏りがどうとかいうのは問題の本質ではなくて、ただ単純に描かれる世界そのものに説得力が足りていないという身も蓋もないところにこの作品の課題は収束する。もっとも、その点は長所でもあり、それが自明のことであるかのように描かれる価値観同士の会話や突如として唱和する例の歌などはその異質さがむしろ面白かったところもある。それと、そもそもこの短編は「マイク・ピーマン・公定理」の三題噺として提出されたものであることは付記しておくべきだろう。

・『アビゲイルの唄』

いつも通りの鬱陶しくて胸糞悪い筋立て。そこは別にどうでもいい。作風というものもあろう。しかし、この作品がまずいのは、その胸糞悪さを徹底しきれていない点にある。というのは、物語の全体が焦点を当てるのが綾になのか莉緒になのかが判然としないからである。仮に綾に焦点を当てるのだと

すれば、少なくとも莉緒の末路については明らかに不要だし、そもそも莉緒の存在自体がノイズであり うる。逆に、莉緒に焦点を当てるのであれば、根本的に登場するのが遅いし、末路の描写はあまりにもおざなりだ。だからこそ、両者ともを取り扱うつもりだったとしても、やはり中途半端なのである。とはいえ、異質な価値観を持つ人間が放つ凄みの描写には光るものがあるし、そこにおいて読ませる力を持っていることも確かである。それだけに、惜しい。じつに惜しい。（文責：サナギトウカ）

寸　評　その２

小説は、現代において、随分と軽く素早いものとなってきたのではないだろうか。そして、そのような軽さは単純なものであり、その単純さ故に多様なものとなっているはずだ。植物がすべて葉であると看做したゲーテの謂うように。しかし、小説とは何であろうか。まさか葉ではあるまい。

巻頭一作目「休日、窓辺にて」の冒頭では早速「早さ」が飛び出してくる。「俺は早くも」と嫌な予感を閃く語り手の独り語りにおいてである。この時、読者は語り手の予感を負けないくらいの素早さで看破しなくてはいけない。でなければ、何も「早くも」ない。この後にはしばらく回想が続く。事態の開陳には些か「早い」からだ。読者はしばらく待たされる。その待ち時間は悪くない。すぐに姪との軽軽しい応酬が始まる。だが、その実、語り手＝主人公は日日の重さを感じていく。「その現実はあまりにも重かった」のだ。その直後に姉がやって来る。「軽さ」の再来である。或いは、重力のもたらす暖かさの再現だ。姉への思慕が語り手＝主人公を倦怠感から開放し、夢へ向き合わせる軽やかさを与える。千円札で作られた紙飛行機がそれを象徴する。それは「見えなくなるまで」飛んで行ったのであり、その瞬間を見守った語り手＝主人公がそもそも窓を開けたのだった。その行為に「軽さ」を心得た彼の心中が現れている。

さて二作目「夢追い人、夏影を踏む」では、「休日」と人物設定が共通する。そして、やはりどこか軽快な会話から幕が開く。だが、その風景には暑夏の「停滞」した空気を描いている。「休日」から数年が経過している。その時間の澱が夏の空気を生んでいるのだ。開いた窓からは祭囃子が流れ込んでくる。語り手＝主人公は姪と連れ立って外へ出る。彼はもう今はフリーターとなっている。きっと昔みたいに貨幣を棄てるような真似はしないだろう。ここでも彼は姪の手に姉の手の温もりを思い出している。ふたりはリンゴ飴を買う。ところでリンゴはフロイトに拠れば、と冗談はさておき、この場面では貨幣への言及は為されない。語り手の意識はもはや金銭へは向かないのである。それは彼の心中にあった生活への重さが消えたということかもしれない。彼の関心はもっと温もりの有るものへと向いているのではないだろうか。「キツツキ」を姪の尖った唇の比喩に用い、金魚すくいに興じる場面がその後に続くことから推察される。それは姪へ注がれる軽軽しい父性の自覚であろう。だが、未だ曖昧な自覚であり、それで姉の手を想起する。最後の場面では些しの父親っぽさを展開してみせる。自己超克を目指した影踏み、これが父性のめざめをもたらすのかどうかは判然としない。陽を背にしながらも前向きである語り手＝主人公は、夏の予定を案じる。この一幕は、曖昧さ

が際立つ。だからこそ、どことなく優雅であり、落着いた雰囲気を呈している。

同作者による三作目「世界が崩壊する確率」では、共通して軽さが描かれる。だが、その為には重さが描出されている方が無難である。一文目から何かが「また、落ちたらしい」。二作目では影が大地に落ちていた。ここでは自殺者である。しかし、語り手の「僕」からはどこか軽さが滲み出ている。「僕」は窓辺の席にいる。物語というのは、大抵の場合、窓で発生する。「僕」の語りはルビが振られちょっと重たい。だが語り口は軽い。或る朝、母親が死ぬ。学校の教室も空に近くなっていた。「僕」はそれを、拙速にも、一種の病気の徴候として片付ける。そして、少女を突然にも殺害しようとする。この「僕」と前二作の「コタロー」は、欲求が浅薄であることと父性が不在の環境という店において共通している。そして、どちらも自己の重さの超克を達成する。「コタロー」は親族との交流によって、「僕」は飛び降りることによって。最後の場面で「僕」は窓の外から「かつての自分」を覗き見る。開幕での窓の内に居た自分から、外へと飛び出したのである。「コタロー」は大地との安全な関係を築き上げていた。それが影踏みである。「僕」は大地の重力との関係が余りにも拙速であった。適度な早さを得られなかったのだ。

以上を「草津出論」としておくとして、次に同じく三作提出の「八名井明論」に移ることにする。

まずは「なけなしの一欠片」。この冒頭で主人公である「梨本楓太」は絵のモデルを努めている。「一欠片」以外の二作、「在処」と「インパチェンスの庭」をも含めて、この場面がこの作家の作品群を象徴している。いずれも「Sitzung、sitting」を中心に描き出した作品である。

「一欠片」では、今述べたように、主人公は絵のモデルを担っている。そして登場人物が一同に集まっている。特徴としては、主人公の友人吉田が主人公を「フィクションの人物」では無いことを確かめるくだりだ。この箇所に先行して、実は語り手が「フィクション」の語を出している。相手の、つまり主人公の友人吉田に対して有利になるような言葉を配る。読者はこの場面で、吉田とは違って、よりいっそう「フィクション」であることを感じる。さて、主人公は三隅のことを負担に思う。そのことを食事の席で話し合う。結局、彼は彼女に連絡をつけることになる。ところで、sit と shit は音がよく似ている。この後の展開を考えた上で、みなさんご唱和ください。

と、冗句は置いといて（いちいちやらないと気が済まないのだろーか？　我ながら思う）、「在処」は「一欠片」と同じく青春モノだ。草津出も青春モノを題材にしている。最近の大学生の間じゃ流行りなのか、と急に所帯染みた話になってしまった。主人公秋原と友人白川は資料室に置かれた猫の死体を発見する。もう動かなくなった猫の亡骸を二人は庭で火葬することに決める。その会話の重さと猫の屍の軽さが対照される。それから、象徴の欠如によってその重要性を指摘している。また、同時に秋原は感性に着目し、それを理解すべきものと考えている。秋原からすれば、他者の感性は理性に拠って把捉出来るものなのだろう。彼はかなり神経質なのである。潔癖症であることからも推し量られる。さらに、白川の頭の染むらを気にしたりする。だが、猫の死を弔った後には僅かにそれを綺麗だと思う。そして、その後、家に入る頃になると、白川の頭を再び汚い

ものとして想い起こし、猫のことは秘密にしてしまう。「猫が、居たんだ」と云うこの口振りは、「悼んだ」と言おうとしたのかもしれない。家に入ることは秘密を有つことなのである。

「インパチェンスの箱庭」の主人公は秋原という名前である。作中では明言されていないが、前作の彼と同一なのかもしれない。何にしても、秋原は病室にいる姉を見舞い、その傍らに座りに往く。主人公の姉の名は秋原澪名であるが、澪とは通行に便利な河川などの深い部分を云う。澪標と云うと、船の往来の為の杭などを指し、「身を尽くし」にかけて和歌などでしばしば用いられる。「標 Schild」とはそもそもは盾であり、亀の甲羅や保護者を意味する。また schildern とは「物語る」の意があり、「Schilderung」は描写やスケッチの意味を有っている。主人公は姉を慕っている。そして姉を「理解することに苦しみを覚え」ている。主人公は姉の保護者を気取ってみせるが、自ら述べるように姉弟が補完し合うのならば、やはり姉も「保護者」であろう。彼らは芸術家一家であり、主人公以外は絵描きであって、彼だけが才能において疎外されている。だが、現に疎外されているのは病者扱いされている姉なのである。姉には絵描きの才能がある。主人公にはそれが無い代わりに作家の才能がある。姉の言葉「描けないなら、書けばいい」で主人公は作家を目指した。そして今度は姉を護ろうなどと思いあがっている。結局、大したことはせぬまま病院を後にする。彼は自ら色彩感覚に乏しいと打ち明けている。外の世界は来る時と同じく白いままであった。エレベーターでは男性の持っていた花に固執している。鮮やかであることを気にかけている。鮮やかさとは同時に少なさを意味する。白という色は余りにも他の色を捨て過ぎているのだ。彼はその姉曰く写実の才に長けている。そして「書けばいい」と考えている。だが、書くこととは、元来染め付けることだ。染料になるカキツバタが書きつ花であるように、かきつけることはそめつけることなのだ。彼の書く小説にはきっと色がないだろう。それは充分に書けていないことを意味する。十全でない語りは不十分な標であり、不完全な保護者なのだ。このままであれば、彼はこの先も姉を護れないだろう。

新入生の作「TAKERU」と「炎の町」。「TAKERU」では語り手=主人公が図書館を訪れ、一目惚れをするという一幕が描かれる。彼女は切り替えが「早い」。それはきっと気の早さを意味する。それはまた、移ろいやすさでもある。しかし、そんな彼女が落ちていたレポートを丹念に読み上げる。すでに物語の終末が予言されているのだ。彼女は無事にその気持ちを定着するのだろうか。

「炎の町」は高速で展開される。そのことは冒頭の風速とは相反する。内容としては『宰相A』を思い出さずにはいられない。ともあれ、登場人物は口を揃えて政権批判を始める。やや劇がかった剣幕だ。そして、唐突にピーマンを焼く農家の男。農作物を棄てることは文化を捨てることを謂わんとしている。それは紛れも無く小説を燃やすことだ。最後に主人公らは政治家を志し、歌を口に出す。彼らは今や雨中の人ではなく、太陽の陽を浴びている。真っ赤な炎に燃えながら。

「穴は二つある」と「アビゲイルの唄」は同作者の作品であり、いずれも男女間の不運を描く。そして、その不幸の元凶は物語の始まりに展開される関係の外からやって来る。ありがちな円環構造ではな

く、もっと錯綜した構造で、有機体の様に発達していく小説だ。そして、超常じみた雰囲気でありながら、どれも人為に基づく悪が披露されている。つまり、いずれも人間存在をその錯綜する筋によって現前させるのだ。例えば、「穴」では視点が移る。移人称を採用したことで、この作品は混沌さを増している。それは読者に読者であることを意識させる。この点、映画を観ているのに近い。それは作者性を露わにする。だが、ここでは作者論は扱わないようにしたい。

「アビゲイル」でも似たような手法が採られる。今度は音楽であろう。そして、ここでは三人称視点から物語を語る。ただやはり、登場人物への寄り添いは各節毎で変移する。一曲毎に違った語りをしようという試みであろう。ただし、ここでも人の欲をありありと描出しており、作家性に言及したくなってしまう。

時間の都合で余り踏み込んだ評は出来なかったが、空白を埋めることは出来たかもしれない。それが感性の働きというやつだ。ところで、小説とは葉でないとしたら何でありうるだろうか。きっと頁だろう。

本という飛行機が、永遠のページを飛んでいく。

（リチャード・ブローティガン『愛のゆくえ』）

それも素早く軽やかに。座席に腰掛けながら。

（文責・星井靄）

新規会員募集のお知らせ

われわれ「文藝サークル綴」では現在新規会員を募集しております。学校学部学科学年年齢職業住所趣味嗜好体重身長性別は不問です。

・文章が書きたい人
・文章を読みたい人
・挿絵を描きたい人
・編集をしてみたい人
・その他

右掲載の他、会員になりたいという方がいらっしゃればお気軽にお問い合わせください。

原稿募集について

会員の他に原稿も募集しております。小説、評論、日記、随筆、エッセイ、ルポ、インタビュー等々皆さんの書いた文章を一冊の冊子に掲載してみませんか？　字数に制限はありません。原稿ファイルを当サークルの連絡用アドレスまで送付してください。

作品応募規定

・字数制限なし
・ファイル形式不問
・紙原稿でもよし
・宛先は奥付記載のアドレスまで
・件名に「原稿応募」と記載してください

また、今後は冊子に読者コーナーを設ける予定です。冊子を読んでの感想や励ましのお便り、ご意見等を募集します。宛先は右同様メールアドレス宛に送付してください。その場合は「読者コーナー」と件名に入力して下さい。

執筆者紹介

鏡上怜（きょうじょう・れい）　学生。文学部史学科４年。前会長。魔女狩りについて調べているそうです。弟を溺愛。

星井靄（ほしい・あい）　学生。文学部哲学３年。雑用係。「隠れて生きよ」がモットー。物忘れが激しい。

サナギトウカ　学生。文学部哲学科３年。ＦＳＭにも所属するラノベ狂。眼鏡。

寒牛紐棟（かんぎゅう・ちゅうとう）　学生。誰かの変名ではないかとの噂。

草津出（くさつ・いづる）　学生。文学部日本文学文化学科２年。カメラが趣味。カメラ関係のサークルにも所属。眼鏡。

八名井明（やない・あきら）　学生。社会学部社会心理学科２年。反ＫＡＤＯＫＡＷＡ。谷崎とか京極とかが好み？

はるゆかり　学生。文学部日本文学文化学科２年。最近入部。古典作品がお好きとのこと。元眼鏡？

佐藤翔（さとう・しょう）　学生。経済学部総合政策学科２年。エコロジーに関心。ＫＹＯＵＳＡＮ。将来は政治家志望。

編集後記

このたび晴れて『新白山文学』が創刊となりました。これもひとえに会員皆とこのサークルを支えてくださっている顧問の石田仁志先生をはじめ東洋大学の皆さんお陰です。そして何より、文藝aio立ち上げから続くこのサークルの気風を継承してきてくださった歴代サークルＯＢ・ＯＧの方々あってのことです。近頃は文系学部再編通告など文学への風当たりが強くなっているようです。しかしだからこそ今が文学をすべき時ではないでしょうか。文学とは人文学です。或いは文化学かもしれません。人と文化とを探求する学問こそが文学なのです。奇しくも日本では哲学が文学部に配置されています。自由文藝の内に組み込まれているのはどうしてなのか考えさせられることではありますがここでは語らずにおきましょう。

さて『新白山文学』の名を冠するのは他ならぬ『白山文学』の現代版をと考えてのことです。まだまだ若輩者の集まりで頼りないところも多くあるでしょう。ですが一度蒔かれた種を私たちは懸命に育んでゆこうと思っています。朽ちた巨木に居残るより新しい木材を求めようというわけです。こんなことが出来るのも若さゆえのことでしょう。もちろん何を書くのかは千差万別です。何もここで述べているように肩肘を張らずとも好いのです。物好きが集まるのがサークルというものでしょう。会員それぞれ好みは異なりますがこうして一冊の冊子の下で共同し一つの『文学』誌を綴り或いは綴じています。それを紐解くのもまた最初のうちは会員だけかもしれませんがやがては会員外に広く手に取られちょっとした話の種にでもなれば幸いです。これからどうなるのか私にもわかりませんが新しい『白山文学』の活動が何がしかの効用をもたらすものと信じています。それではまた次号でお会いしましょう。次号はモアベターですよ。（文責・星井靄）

新白山文学　創刊号

平成二十七年六月一日発行

編集兼発行人　渡邉和教

発行所　東洋大学

メール：

bungei_ajo@hotmail.co.jp

ホームページ：

http://ttuduri.web.fc2.com/

ブログ：

http://ttuduri.blog.fc2.com/

ツイッターアカウント：

https://twitter.com/toyo_tuduri

＊不許複製

作品の投稿、入会、感想ご意見などおまちしております。